

学校図書館におけるコレクション形成： 国際子ども図書館の中高生向け 「調べものの部屋」開設に向けて

2014年3月



International Library of Children's Literature

国立国会図書館 国際子ども図書館

国際子ども図書館調査研究シリーズ No. 3
(ILCL Research Series No. 3)

学校図書館におけるコレクション形成：
国際子ども図書館の中高生向け
「調べものの部屋」開設に向けて

2014年3月

国立国会図書館国際子ども図書館
International Library of Children's Literature,
National Diet Library

刊行にあたって

国際子ども図書館は、児童書や子どもの読書に関わる様々な活動を支援しています。子どもの読書活動推進の現場に還元できるような調査研究を行うこともその一つです。この調査研究の成果を広く知っていただき、各種の活動を推進していただくことを目的として、「国際子ども図書館調査研究シリーズ」を刊行しています。このたび、シリーズ第3弾にあたる『学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べものの部屋」開設に向けて』を刊行いたしました。

国際子ども図書館は、平成27年度に、増築棟竣工に伴うリニューアルを行い、中高生の調べものに対応した「調べものの部屋」を新たに開設します。本書は、タイトルに示すとおり、「調べものの部屋」開設に向けた準備プロジェクトの成果をまとめたものです。

国際子ども図書館は、関係諸機関及び外部の有識者の皆様との連携なくしては成り立ちません。今までも、皆様から貴重な御教示を賜り、活動を助け、様々な課題に取り組んでまいりました。本書は、連携作業の成果の一つであります。主査の中村百合子先生を始めとして、調査研究に参画して執筆して下さった青山比呂乃先生、安形輝先生、そして実地調査に御協力いただいた学校図書館関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

今後とも、関係諸機関、有識者の皆様の御協力を賜り、調査研究を実施し、その成果を随時刊行していきたいと考えています。そしてこのことが、子どもと本を結ぶ活動の役に立ち、子どもの読書推進の一助となっていくことを願っています。

平成26年3月

国立国会図書館国際子ども図書館長
坂田 和光

執筆者一覧

中村 百合子（立教大学文学部 准教授）

第1章1、第2章1～2、3（2）、4、コラム、第6章

橋詰 秋子（国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係長）

第1章2～3、第2章3（1）、第3章4、コラム

堤 真紀（国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係）

第3章1～2

高宮 光江（国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係）

第3章3

安形 輝（亜細亜大学国際関係学部国際関係学科 准教授）

第4章

青山 比呂乃（関西学院千里国際中等部・高等部 司書教諭）

第5章

目 次

刊行にあたって

要 旨	1
SUMMARY	2
1. はじめに	3
1.1 研究の目的・意義	
1.2 「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」の概要	
1.3 本報告書のねらいと構成	
2. 学校図書館のコレクション形成をめぐる議論（文献調査）	7
2.1 はじめに：先行研究と用語の整理	
2.2 日本語文献での学校図書館コレクション形成の議論	
2.3 英語文献での学校図書館コレクション形成の議論	
2.4 まとめ	
コラム 英語テキストの読みの難易度指数について	25
3. 学校図書館におけるコレクション形成の実態（事例調査）	26
3.1 調査の概要	
3.2 訪問調査の結果	
3.3 資料選定の情報源に関する補足調査の結果	
3.4 考察：学校図書館のコレクション形成に影響を与える志向性	
4. 蔵書データから見る共通する資料群と学校図書館の特徴	50
4.1 学校図書館の蔵書分析	
4.2 蔵書分析の手順	
4.3 蔵書分析の結果	
4.4 まとめ	
5. 学校図書館実務者へのインタビュー：中学校に適したコレクション形成とは	72
5.1 インタビュー調査の概要	
5.2 近畿圏の学校図書館実務者へのインタビュー要旨	
5.3 首都圏等の学校図書館実務者へのインタビュー要旨	
5.4 まとめ：中学校の学校図書館のコレクション形成の留意点	
5.5 （参考）生徒がよく取り上げる自由研究テーマについて	
6. おわりに：「調べものの部屋」のコレクション形成に向けて	101

要 旨

本書は、国立国会図書館国際子ども図書館が、平成 24 年度から平成 25 年度にかけて実施した「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」（以下、「プロジェクト」という。）の成果を報告したものである。

このプロジェクトは、平成 27 年度のリニューアルに合わせて国際子ども図書館に設置される中高生向けの「調べものの部屋」のコレクション形成の参考に資するために、学校図書館のコレクション形成の現状及び学校図書館におけるコレクション形成の効果的な方法を探ることを目的とした調査研究である。調査研究は、中村百合子氏（立教大学文学部准教授）を主査とし、青山比呂乃氏（関西学院千里国際中等部・高等部 司書教諭）、安形輝氏（亜細亜大学国際関係学部国際関係学科 准教授）、国際子ども図書館児童サービス課職員で構成された研究会が実施した。

本研究では、学校図書館におけるコレクション形成に関して、①文献調査、②学校図書館事例調査（訪問調査及び電子メールによる質問紙調査）、③学校図書館の蔵書データの分析調査、④実務者インタビュー調査の四つの調査を行った。

本書は、以下の 6 章から構成される。

第 1 章では、学校図書館におけるコレクション形成を対象とした本研究の目的と意義を述べた上で、本報告書の構成を示す。

第 2 章から第 5 章では、プロジェクトで行った四つの調査について、それぞれ調査の概要と結果を述べる。

第 2 章では、「文献調査」を報告する。学校図書館のコレクション形成について、日本語及び英語文献における議論を整理する。

第 3 章では、「学校図書館事例調査」の結果を報告する。充実した図書館活動を行っているとして名前が挙がることの多い学校図書館 10 館のコレクション形成の実態を明らかにする。資料選定で使用されている情報源を探るために行った補足調査の結果も報告する。

第 4 章では「学校図書館の蔵書データの分析調査」の結果を報告する。学校図書館の蔵書データ 13 館分を統計的に分析し、蔵書データから見た共通する資料群と学校図書館の蔵書の特徴を明らかにする。

第 5 章では、平成 25 年 6 月に実施した「実務者インタビュー調査」の要旨を掲載する。これは、学校図書館の実務者が経験則として持つコレクション形成の暗黙知を明らかにすることをねらったものである。

最後の第 6 章では、プロジェクト主査が、研究結果を概観するとともに、その成果を踏まえて、「調べものの部屋」のコレクション形成の方向性について提案を行う。

SUMMARY

This report reveals the findings of the “Preliminary Research Project of the Room for Teens” conducted by the International Library of Children’s Literature (ILCL) in FY2012 and FY2013.

In FY2015, a new building will be completed in the ILCL and the room for teens will newly open. The project aims to offer information for collection development of the Room by researching the current state and effective approaches of collection development in school libraries. The research was conducted by a research group consisting of Ms. Yuriko Nakamura (Associate Professor, College of Arts, Rikkyo University) as the supervisor, Ms. Hirono Aoyama (Librarian, Senri International School of Kwansei Gakuin), Mr. Teru Agata (Associate Professor, Faculty of International Relations, Department of International Relations, Asia University) and staff members of the Children’s Services Division, ILCL.

The project covers the following four studies: literature research on collection development, school library case studies (site visit / email questionnaire), school library collection data analysis and interview of teachers / teacher librarians / school librarians.

This report consists of the following six chapters:

Chapter 1 refers to the aim, significance and overview of the project, and the purpose and outline of this report.

Chapter 2, 3, 4 and 5 outlines four studies in the project and their findings.

Chapter 2 reviews school library collection development based on literature research in Japanese and English.

Chapter 3 shows the actual realities of school library collection development through the “school library case studies” which target ten school libraries providing progressive activities to support students’ learning. It also reports the results of the supplementary research of information sources for selecting library resources.

Chapter 4 describes the “school library collection data analysis.” It statistically analyzes the collection data of 13 school libraries to reveal their common resources and the characteristics of school library collections.

Chapter 5 summarizes the “interview of teachers / teacher librarians / school librarians” conducted in June 2013. It aims to analyze the preceding research findings more deeply and show the collection development technique which is usually acquired by teacher librarians / school librarians through experience.

In the final Chapter 6, the supervisor makes suggestions for the collection development of the upcoming room for teens, based on the research findings.

1. はじめに

1.1 研究の目的・意義

国立国会図書館国際子ども図書館の調査研究プロジェクトとして、日本の学校図書館のコレクション形成の実務に資するべく、これまでに日本ではほとんど行われてこなかったコレクションの“質”の観点（後述）から、研究を行った。プロジェクトの名称は「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」であり、調査期間は平成 24 年度から平成 25 年度である。

日本では、学校図書館のコレクション¹については、概して蔵書の量的拡大を目指すことに関心が集中していたように思われる。文部省（現・文部科学省）は、平成 5 年に「学校図書館図書標準」として義務教育学校において整備すべき図書の冊数を定め、同年から蔵書を増やすための特別の予算措置を継続的に行ってきた。平成 24 年度からは、新たな 5 か年計画で標準冊数を整備することを目標とし、地方財政措置を拡充して、年間約 200 億円を、用途を特定しない一般財源として地方公共団体に交付している。このような量的拡大は行政の主導で行うことができる一方で、その質の追究に行政から口を出すことは知的自由の観点から問題があらうし、必然的にこの部分は各学校、学校図書館の判断に任せられることになる。にもかかわらず、過去、日本では、学校図書館のコレクションの形成について、量的拡大に関するものを除くと、実務者や研究者、または利用者である児童・生徒、学校教職員や保護者らによって活発な議論が行われてきたとは言えない（本報告書第 2 章参照）。

コレクションの質を議論することは容易ではない。そもそも一般に、質というものは一概には語るができないものであろう。学校図書館の使命をどのように考えるかが、コレクションの質の評価を決めることになるという一面があると思われる。使命が明確な場合、コレクションの評価と改善については、利用状況を分析し、顕在・潜在の利用者の声を聞き、それらの結果をコレクションに反映するといった方法が提案されている。しかし、今回の研究では、「調べものの部屋」の開室を控えている状況にあって、上記のようなマネジメント・サイクルの中に位置付けられるコレクションの評価と改善の段階ではなく、それ以前のコレクション形成にかかる各業務においてコレクションの質をいかに追及するか、その全体像の解明に焦点を当てた。そして学校図書館の使命、ひいては現在の日本の学校図書館に期待されている使命については、一旦議論を保留した。

そして、まずは、学校図書館のコレクション及びその形成の実務の現状を大まかに把握するため、学校図書館の訪問を開始した。訪問先には、専従の教諭または職員を配置し、充実した図書館活動を行っているとして各種研修会等で名前が挙がるが多く、コレクション形成や資料選定が意識化されていると考えられる、先進的とみなし得る学校図書館を、主として首都圏と近畿圏から選択した。図書館への訪問調査を進めていくうちに、次

1 本研究では、「蔵書」「コレクション」を次のように使い分けている。「蔵書」＝図書館が所蔵する図書（単行書）。「コレクション」＝図書館が所蔵する資料全体。図書だけでなく、多様なメディアの資料の集積を意味する。

の2点が明らかになってきた。①学校図書館担当者によるコレクション形成に関わる実際の業務について、日本では、広く議論され、情報交換をされたことはほとんどなく、それを整理すれば日本の学校図書館にとって十分に有意義な情報提供となるであろうこと、②専従の学校図書館担当者を配置し、学校図書館の活性化を図っている学校では共通して、いわゆる探究的な学習の実現に対する学校図書館の貢献が期待されており、これを、現在の日本の学校図書館の使命のうちの重要なものの一つと捉えることが可能であろうこと、である。そこで本研究では、先進的とみなし得る学校図書館を対象とした調査を中心に据え、その事例の分析を通してコレクション形成の在り方を多角的に検討することとした。

本研究では、まず、学校図書館のコレクション形成に関する、日本語と英語の文献の整理を行った。そして、日本国内の先進的な学校図書館への調査として、事例（訪問）調査、蔵書データの分析、担当者へのグループ・インタビューを実施した。本報告書の核である学校図書館の調査の実施に当たっては、調査対象校の方々に大変お世話になった。対象校の学校図書館担当者の方々は、自らの実践の貴重な経験を惜しみなく提供してくださり、御多忙のところ、度々の要請に対して快く協力をしてくださった。これによって、現時点の日本の学校図書館コレクション形成の優れた実践について、かつてない規模で整理をすることができたと考えている。この場を借りて、皆様の御協力に心から感謝申し上げたい。

日本の学校図書館では、出版点数の増加、メディアの多様化といった環境の変化もあり、コレクション形成の専門的な作業の重要性は増していると考えられる。『出版年鑑』によると、平成24年に出版された図書は総計82,200冊であり、そのうち児童書が4,898冊である²。一方で、全国学校図書館協議会の平成24年度調査（全国の小・中・高校から都道府県ごとに3%無作為抽出）によれば、1校当たりの年間平均購入冊数は、小学校で390.5冊、中学校で480.6冊、高校で612.4冊であった³。例えば、仮に小学校で児童書のみを資料選定の対象にしたとしても、購入できるのは10分の1以下である。コレクションに加える図書の選定は、10冊のうち9冊を排し1冊を選ぶという、労力を要する作業であると考えられる。しかし本研究では、コレクションの形成の重要な一部分と捉えられる資料の選定、つまり一点一点の資料の評価と具体的な選定の判断の方法については、その重要性を認識しながらも、特別に深く検討することができなかった。この部分については、この後の研究の進展を期待したい。

1.2 「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」の概要

国立国会図書館国際子ども図書館では、平成27年度に中高生向けの「調べものの部屋」を開室する予定である。「調べものの部屋」では、学校図書館における探究活動支援のモデルケースをイメージしたサービスとして、自由研究などの中高生の調べものに役立つサー

2 「新刊書籍部門別平均定価並びに定価別発行点数2012年」出版年鑑編集部『出版年鑑13』出版ニュース社, 2013.

3 全国学校図書館協議会研究調査部「特集'12子どもの読書と学校図書館の現状：2012年度学校図書館調査報告」『学校図書館』no.757, 2013.11, pp.41-61.

ビスを行うとともに、図書館や図書館資料を使った探究活動の体験プログラムを用意して、修学旅行や校外学習で上野公園を訪れた中高生に体験してもらうことを検討している。

この「調べものの部屋」の開室準備のために、平成 24 年度から平成 25 年度にかけて実施したのが、「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」である。このプロジェクトは、「国際子ども図書館子どもの読書活動推進支援計画 2010」⁴に掲げた、国際子ども図書館の学校図書館支援の取組の一つであり、平成 22 年度から平成 23 年度にかけて行った「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」の後継事業である。

調査研究は、以下のメンバーによる研究会で実施した。

主 査：中村百合子（立教大学文学部 准教授）

委 員：青山比呂乃（関西学院千里国際中等部・高等部 司書教諭）

安形輝（亜細亜大学国際関係学部国際関係学科 准教授）

事務局：橋詰秋子（国際子ども図書館児童サービス課企画推進係長）

高宮光江（国際子ども図書館児童サービス課企画推進係）

堤真紀（国際子ども図書館児童サービス課企画推進係）

（以上、敬称略。所属は実施当時のもの。）

なお、「調べものの部屋」は中高生向けの資料室であるが、本研究においては、実務に資する具体的な成果を得るために、研究対象とする学校種をこれまでコレクション形成の知見・ノウハウがあまり共有されていなかった中学校（中高一貫校を含む）とした。

1 年目の平成 24 年度に実施した調査は、以下の 3 点である。

①文献調査〔中村、橋詰〕

学校図書館のコレクション形成に関する日本語及び英語文献を調査した。

②学校図書館事例調査〔高宮、堤〕

充実した図書館活動を行っている学校図書館 10 館を訪問し、図書館担当者からコレクション形成と資料選定について聞き取った。また、訪問後、補足として、学校図書館の資料選定で使われる情報源に関して電子メールによる質問紙調査を行った。

③学校図書館の蔵書データの分析調査〔安形〕

先進的な学校図書館コレクションの傾向等を明らかにするために、上記②事例調査の対象校等の蔵書データ 13 館分を統計的に分析した。

（〔 〕内は、当該調査の主たる担当者。）

2 年目の平成 25 年度は、以下の 3 点の調査を実施するとともに、成果報告書（本書）の執筆を行った。

4 国立国会図書館国際子ども図書館『国際子ども図書館子どもの読書活動推進支援計画 2010』 < <http://www.kodomo.go.jp/promote/suishin2010.html> >（最終アクセス 2013 年 11 月 21 日）

①文献調査〔中村、橋詰〕

前年に引き続き、学校図書館のコレクション形成に関する日本語及び英語の文献を調査した。

③学校図書館の蔵書データの分析調査〔安形〕

前年に引き続き、学校図書館の蔵書データ（13館分）を統計的に分析し、先進的な学校図書館コレクションの傾向等を明らかにした。

④実務者インタビュー調査〔青山〕

学校図書館の実務者が持つコレクション形成に関する暗黙知を探るために前年に実施した事例調査の対象校の担当者に対するグループ・インタビューを行った。近畿圏の学校図書館実務者5名へのインタビューを平成25年6月15日に、首都圏等の学校図書館実務者6名へのインタビューを平成25年6月23日に実施した。

（〔 〕内は、当該調査の主たる担当者。）

1.3 本報告書のねらいと構成

本報告書は、調査研究の成果をまとめたものである。成果の整理に当たっては、学校図書館の現場及び「調べものの部屋」の準備などの実務に資するものとなることを目指した。前節で述べたように、研究対象を中学校としたため、調査結果の整理も中学校の学校図書館での実務を意識して行った。

全体の構成は、次のとおりとした。本章に続く第2章から第5章で実施した四つの調査を個別に取り上げる。具体的には、第2章では「文献調査」、第3章では「学校図書館事例調査」、第4章では「学校図書館の蔵書データの分析調査」、第5章では「実務者インタビュー調査」を取り上げた。各々の調査については、手法を説明するとともに、「調べものの部屋」のための資料収集準備の実務及び中学校図書館のコレクション形成の実務に資するという観点から考察・分析した調査結果を述べた。最後の第6章では、研究結果を概観するとともに、その成果に基づいて、「調べものの部屋」のコレクション形成の方向性について提案を行った。

なお、本報告書では、各調査の主たる担当者が該当する章の執筆を行った。プロジェクト主査の中村百合子准教授が、報告書全体を俯瞰した調整と各章執筆者に対する助言を行った。

2. 学校図書館のコレクション形成をめぐる議論（文献調査）

2.1 はじめに：先行研究と用語の整理

本章では、「調べものの部屋」準備という実務に資するという観点から、学校図書館のコレクション形成に関する日本語及び英語文献を調査し、学校図書館のコレクション形成についての議論を整理した。調査対象は、2000（平成 12）年以降の日本語及び英語の文献（図書及び雑誌記事）である。本節では、それらの先行研究を概観するとともに、本章で使う用語を定義する。

(1) 先行研究

学校図書館のコレクション形成に焦点を当てた文献レビューは、日本語では極めて限られている。そもそも、資料の選定についての研究はされてきたが、学校図書館のコレクション形成までに視野を広げた研究がまれであった。2003（平成 15）年頃に川崎良孝と前田稔が米国の学校図書館の蔵書と検閲の問題について研究したもの¹と、2007（平成 19）年に西巻悦子が発表した論稿「コレクションマネジメントの視点：学校図書館の環境整備から」²は、コレクション形成についての文献を整理したものと言ってよいだろう。ただし、川崎らの研究は米国の歴史研究であり、西巻の論稿は 2005（平成 17）年に米国で出版された *Collection Management for Youth*（後述）の特に第 2 章「学習者中心のコレクション・マネジメントのための戦略」を参照しながら、「生徒の学習言語を充実させるため」の「学校図書館の環境整備と蔵書収集のありようを考えることを研究の目的」としており、共に学校図書館のコレクション形成全般を取り上げた先行研究には当たらないと考える。

英語文献レビューでは、コレクション形成の歴史を追ったものとして、1998（平成 10）年に発表されたブロディ（Brodie, Carolyn S.）による *A History of School Library Media Center Collection Development* があるが³、これは本稿が整理の対象とした 2000 年以前を対象としている。ブロディの研究以降も、学校図書館のコレクション形成に関する文献レビューが博士論文、図書、雑誌記事として書かれているが、そのいずれもが研究の範囲がコレクション形成一般よりも限定されており、調査対象とする文献の範囲も狭い。

(2) 用語の整理

英語文献での議論の整理のために、重要な用語の翻訳を、次のようにすることとして、確認しておきたい。

selection：「選定」「資料の選定」「選書」

1 例えば、次のような論稿がある。川崎良孝「学校図書館の検閲と生徒の知る権利：チェルシー事件（1978 年）の場合」『図書館界』55(4), 2003.11, pp.194-206.

2 西巻悦子「コレクションマネジメントの視点：学校図書館の環境整備から」『学校図書館学研究』no. 9, 2007.3, pp.3-13.

3 Carolyn S. Brodie, "A History of School Library Media Center Collection Development," Kathy H. Latrobe ed., *The Emerging School Library Media Center: Historical Issues and Perspectives*, Englewood, Libraries Unlimited, 1998, pp.57-74.

collection development : 「コレクション形成」

collection management : 「コレクション・マネジメント」

この三つの用語の関係について、米国図書館協会 (American Library Association: ALA、以下「ALA」という。) の図書館資料及びテクニカルサービス部門の元部会長であるジョンソン (Johnson, Peggy) は、次のように説明している。

1960年代半ば以降に、「選定」に代わって「コレクション形成」という言い回しが広く使われるようになった。これは、図書館コレクションの形成のよく考えられたプロセスを表す、より包括的な語であり、大学での教育上の優先順位、図書館を取り巻く共同体 (コミュニティ) または利用者のニーズや関心に應えるものであった。また「コレクション形成」は、資料の選定、選定方針の決定と調整、利用者及び潜在的利用者のニーズの評価、コレクションの利用に関する研究、コレクション分析、予算管理、コレクションに関するニーズの判定、コミュニティと利用者への奉仕と連絡、情報資源の共有の計画といった複数の活動を含むものと理解されていた。そして1980年代になると、「コレクション・マネジメント」という語が提案された。「コレクション・マネジメント」は「コレクション形成」を包含し、それに加えて、除架・除籍、定期刊行物の契約打ち切り、保管、保存という一連の判断を含んでいる。ただし、「コレクション・マネジメント」と「コレクション形成」の二つは同義的に使われることがある⁴。

(3) 本稿の範囲

以上の先行研究及び用語の理解を基に、本章では、「調べものの部屋」準備という実務に資するという目的から、「コレクション形成」に焦点を当てて文献の整理 (文献レビュー) を行うこととした。しかし、「コレクション・マネジメント」が「コレクション形成」を包含するとされていることから、「コレクション・マネジメント」についての文献も対象とした。一方、「コレクション形成」の一部とされる「資料の選定」に焦点を当てた論考については、それだけで多くの文献が書かれていることもあり、今回の整理の対象からは除いた。

日本語の文献は magazine plus、NDL-OPAC、CiNii、英語の文献は ERIC、LISTA (Library, Information Science & Technology Abstracts)、ScienceDirect、WorldCAT の検索結果を起点として探索・収集した。ただし、見つかった英語文献は北米 (米国・カナダ) で発表されているものが多く、またそれ以外の国の文献は限られた時間での資料の網羅的な入手が困難だったため、英語文献の整理は北米での議論に限定した。

2.2 日本語文献での学校図書館コレクション形成の議論

(1) 日本語雑誌記事における議論

図書館サービスや図書館コレクションに関する研究を進めた三浦逸雄によれば、1990年代初頭時点で、「わが国ではコレクション形成にかかわる諸問題は〈図書選択〉、〈資料選択〉、〈選書〉といった用語のもとで論じられることが多く、米国にみられるようなコレ

4 Peggy Johnson, *Fundamentals of Collection Development and Management*, 2nd ed., American Library Association, 2009, p.1.

クションの構築、維持、発展にかかわる諸活動を総合的な視点からとらえようという認識を欠いていたため、< collection development >や< collection management >に対応する用語はこれまで使われてこなかった。ようやく最近になって、コレクションに関わる諸活動を広い視点から考えようとして<蔵書構築>あるいは<蔵書構成>といった用語が使われはじめている。」⁵というような状況であった。

今回、改めて学校図書館に関する日本語の雑誌記事を探索すると、その状況に大きな変化は起きていない印象を受ける。前掲の西巻の論文「コレクションマネジメントの視点」を除くと、学校図書館の「コレクション・マネジメント」や「コレクション形成」を正面から扱った学術的論考は皆無であった。

ただ、「蔵書構築」と「蔵書構成」といった用語を用いた雑誌記事に、「コレクション形成」よりも議論が限定的と思われるものは散見された。全国学校図書館協議会（以下、「全国SLA」という。）の機関誌『学校図書館』では、1990年代以降は数年おきに、関係する特集が組まれている⁶。これらの記事には、司書教諭らの経験の共有という趣旨が見える。繰り返し述べられているのは、蔵書もしくはコレクション⁷の現状の把握から、複数の人が関与して計画を立てて選書をし、蔵書もしくはコレクションを更に発展させるという流れや手続きと、全国SLAが発表した、「学校図書館メディア基準」（2000）⁸、「図書選定基準」（2008）⁹等を参考にするという考えである¹⁰。こうした文献の中で、「蔵書構成」は、時に“静態的な”印象を帯びる形で論じられている。例えば、分類別配分比に沿った固定的な「蔵書構成」（言い換えれば、非動態的な構成）を論じた記事が見られる。

2000（平成12）年以降はまた、蔵書の量的拡大つまり増加を目指すことへの言及が多くなっている。これは、旧文部省が平成5年に「学校図書館図書標準」¹¹として学校図書館が

5 「コレクション形成・管理とは何か」三浦逸雄・根本彰『コレクションの形成と管理（講座 図書館の理論と実際 第2巻）』雄山閣, 1993, pp.11-26, 16.

6 例えば、次の特集がある。

「特集 予算増額と本の選び方」『学校図書館』no.517, 1993.11, pp.9-50.

「特集 資料の選択と蔵書構成」『学校図書館』no.570, 1998.4, pp.15-22, 25-30, 41.

「特集 学校図書館メディアの選択」『学校図書館』no.607, 2001.5, pp.15-47.

「特集 学習を支えるメディア構成」『学校図書館』no.642, 2004.4, pp.15-42.

「特集 図書資料の選択」『学校図書館』no.698, 2008.12, pp.15-45.

7 本書では、「蔵書」「コレクション」を次のように使い分けている。蔵書＝図書館が所蔵する図書。コレクション＝図書館が所蔵する資料全体。図書だけでない、多様なメディアの資料の集積を意味する。

8 全国SLA「学校図書館メディア基準」< <http://www.j-sla.or.jp/material/kijun/post-37.html> >（最終アクセス 2013年10月24日）

9 全国SLA「全国学校図書館協議会図書選定基準」< <http://www.j-sla.or.jp/material/kijun/post-34.html> >（最終アクセス 2013年10月24日）

10 約10年に一度、AASLが発表している学校図書館基準やガイドラインは、それほど時を置かずに日本でも翻訳・出版されており、そうしたものの中にコレクションへの言及が見られるものもある。2000年以降に出版されたものに、次のものがある。

アメリカ・スクール・ライブラリアン協会・教育コミュニケーション工学協会編（同志社大学学校図書館学研究会訳）『インフォメーション・パワー：学習のためのパートナーシップの構築』同志社大学, 2000.（原書名: American Association of School Librarians, *Information Power: Building Partnership for Learning*, 1998.）

アメリカ・スクール・ライブラリアン協会編（全国SLA 海外資料委員会訳、渡辺信一ほか監訳）『学校図書館メディアプログラムのためのガイドライン』（シリーズ学習者のエンパワーメント第2巻）, 2010.（原書名: American Association of School Librarians, *Empowering Learners: Guidelines for School Library Programs*, 2009.）

整備すべき図書の冊数を定め、現在まで蔵書を増やすための特別の予算措置を継続的に
行っていることと関連があるだろう。

(2) 日本語図書における議論

学校図書館のコレクションを扱った図書としては、司書教諭資格取得のために平成 11
(1999) 年に開講された必修科目「学校図書館メディアの構成」のための教科書が多く出版
されている。平成 25 (2013) 年時点で出版されている最新の版について、表 2-1 (12~13
ページ) に目次を整理した。旧文部省が示した同科目の「ねらいと内容」には「構成」と
いう言葉が使われ¹²、また全国 SLA の学校図書館司書教諭講習講義要綱作成委員会が平成
21 年 10 月 15 日付で制定した「学校図書館司書教諭講習講義要綱」では「構成」と「構築
」という言い方がされており¹³、教科書でもそれらの言葉が使われている。

内容は「コレクション形成」や「コレクション・マネジメント」を扱っていると思われ
る記述が多いが、教科書によって用語の定義や使用法は異なる。中には、用語の定義がは
っきりと示されていない教科書や、資料の選定と収集、もしくはその組織化に重点が置かれ
ていて、「コレクション形成」や「コレクション・マネジメント」の考え方がほとんど見ら
れないと感じられる教科書もある。¹⁴

<学校図書館メディア>という新しい表現と「構築」という語が組み合わせられ科目名
とされたこと、さらにその科目に資料の組織化も内容として含まれたことが、「コレクシ
ョン形成」や「コレクション・マネジメント」という図書館情報学で一般的になりつつあ

11 文部省初等中等教育局「学校図書館図書標準」< http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/doku-syo/hourei/cont_001/016.htm > (最終アクセス 2013 年 10 月 24 日)

12 文部省初等中等教育局長による「学校図書館司書教諭講習規程の一部を改正する省令について (通
知)」の別紙添付資料に、「司書教諭の講習科目のねらいと内容」があり、「学校図書館メディアの構成」
について、次の四つを内容として示している。(1)学校図書館メディアの種類と特性；(2)学校図書館
メディアの選択と構成；(3)学校図書館メディアの組織化・分類の意義と機能、日本十進分類法等の解
説、件名標目表の解説、目録の意義と機能、日本目録規則の解説・目録の機械化；(4)多様な学習環境
と学校図書館メディアの配置。

(文部省初等中等教育局長 辻村哲夫「(別紙2) 司書教諭の講習科目のねらいと内容」文部省初等中
等教育局児童・生徒課, 1998.3.18. < http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1327211.htm > (最終アクセス 2013 年 10 月 19 日))

13 「学校図書館司書教諭講習講義要綱」には、次のように大きく五項目が挙げられており、それぞれの
下に小項目が複数挙げられている。Ⅰ. 高度情報社会における学校図書館メディア；Ⅱ. 学校図書館
におけるメディアの種類と特性；Ⅲ. 学校図書館メディアの構築；Ⅳ. 学校図書館メディアの組織化
の意義と展開；Ⅴ. 学校図書館メディアの組織化の実際；Ⅵ. 特別な支援を要する児童・生徒と学校
図書館メディア。(全国学校図書館協議会学校図書館司書教諭講習講義要綱作成委員会制定「学校図
書館司書教諭講習講義要綱」全国学校図書館協議会, 2009.10.15. < <http://www.j-sla.or.jp/material/kijun/post-13.html> > (最終アクセス 2013 年 10 月 19 日))

14 この科目について小田光宏は、「“学校図書館メディアの構成”とは、「提供(利用)」機能に関する
サービス、すなわちパブリックサービス以外のものを対象としていることにおおむねなる。一言で言
うならば、「テクニカルサービス」である。あるいは、利用者への直接サービスとの対比で、間接サー
ビスと呼ぶこともできる。」と述べた上で、それを「図書館の文脈でのみ捉えるのではなく、教育の観
点で踏まえるべきである」と述べ、学校図書館のテクニカルサービスの新しいモデル構築の必要性を
指摘している。(小田光宏「学校図書館におけるテクニカルサービスモデルの構築：『学校図書館メ
ディアの構成』をもとに」日本図書館情報学会研究委員会編『学校図書館メディアセンター論の構築に向
けて：学校図書館の理論と実践』(シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.5), 勉誠出版, pp.45-57,
47-48, 49-50.)

た語ではなく、学校図書館関係者が〈学校図書館メディア〉の〈構成〉という言い回しをする流れを作ったと考えられる。前の「(1) 日本語雑誌記事における議論」の検討に当たり入手した雑誌記事にも、その影響はうかがわれ、この新設された司書教諭講習の科目名が日本語の議論に与えた影響は大きいように思われる。

2.3 英語文献での学校図書館コレクション形成の議論

(1) 英語雑誌記事における議論

英語の雑誌記事には、日本語の雑誌記事でよく見かける実務者による実践報告¹⁵の他に、コレクション形成の実務に役立つ理論や知見に関する記事があった。本稿では、前者の実践報告は除外し、後者の知見・理論を扱った記事を中心に整理を行った。

前述した日本の傾向と異なり、英語の記事では蔵書の量的拡大の必要性への言及はあまり見られなかった。代わりに見られたのは、①コレクション形成のマネジメント・サイクルに関する内容、②電子資料を始めとする多様な資料の選定に関する内容、③知的自由の原則と検閲に関する内容の記事であった。以下、この順番に議論を整理する。

①コレクション形成におけるマネジメント・サイクル

学校図書館のコレクション形成に関する記事で、最も多く見られた内容は、Plan → Do → Check → Act (PDCA) のマネジメント・サイクルに関係するものであった。特に、Plan に当たる部分、すなわちコレクション形成方針・計画を策定し、それを継続的に見直し更新していくことの重要性を指摘する記事が目立った。スクール・ライブラリアン¹⁶向けの雑誌に、方針・計画策定を理論的に意義付けする記事だけでなく、具体的な策定手法に関する記事が何度も掲載されていたことから、北米のスクール・ライブラリアンにとって方針・計画の策定は身近な課題であることが推測できる。

方針・計画策定の準備

英語記事では、方針・計画を策定する前に、(a)利用者ニーズと(b)既存コレクションを把握する重要性が指摘されていた¹⁷。

(a)利用者ニーズの把握とは、つまり当該図書館がサービスの対象とする共同体(コミュニティ)を分析することだと考えられる。学校図書館が対象とする共同体の中心は児童・生徒であるため、児童・生徒のニーズ把握を重視する記事が目立った。児童・生徒の興味関心を探る方法(貸出統計の分析、アンケート、インタビュー調査)や、児童・生徒によ

15 実践報告を内容とする雑誌記事には、例えば、次のものがある。

Elizabeth Greenan, "Walking the Talk: A Collaborative Collection Development Project," *School libraries in Canada*, 21 (4), 2002, pp.12-14. ; Nara L. Newcomer, "Back to Basics: International Collection Development on a Shoestring," *Collection Building*, 28(4), 2009, pp.164-169.

16 本章では、英語圏の学校図書館の専門職については、「スクール・ライブラリアン」という語を用いた。日本の学校図書館の担当者(司書教諭やいわゆる学校司書)と職責や立場等が異なる場合が多いことを考慮した判断である。

17 Stephens Claire Gatrell et al., "What Do I Buy? What Is Collection Development?," *School Library Media Activities Monthly*, 22 (8), April 2006, pp.44-45. ; Stephens Claire Gatrell et al., "Collection Development Part II: What Do I Buy? Developing the Print Collection," *School Library Media Activities Monthly*, 22(9), May 2006, pp.45-46.

表 2-1 日本語の教科書の目次

タイトル	シリーズ名	編集者	著者(名前は図書に掲載順)	出版社	出版年	その他版	ページ数	章立て(ページ数)	
								序章	第1章
								第9章	第10章
新訂 学校図書館 メディアの 構成	放送大学教 材	-	北克一 平井尊士	放送大学教 育振興会	2012	-	258p.	まえがき(p.3-5)	学校図書館メディア の意義と役割(p. 11-25)
学校図書館 メディアの 構成	シリーズ学 校図書館学 第2巻	「シリーズ 学校図書館 学」編集委 員会	北克一 二村健 中林幸子 野口武悟 平井歩実 福本徹 福本尚子 米谷優子 前川由実子 村上泰子 山田美幸 若松昭子	全国学校図 書館協議会	2010	-	199p.	はしがき(p.3-4)	高度情報社会におけ る学校図書館メディ ア(p.9-26)
学校図書館 メディアの 構成 第二 版	メディア専 門職シリー ズ2	緑川信之	緑川信之 谷口祥一 大作光子 横田さおり 三宅和恵	学文社	2008	初版 2000	168p.	まえがき(p.1) 序章 学校図書館メ ディア構成の視点と 流れ(p.7-14)	学校図書館メディア の種類と特性(p. 15-35)
学校図書館 メディアの 構成	新学校図書 館学2	「新学校図 書館学」編 集委員会	古賀節子 渡辺信一 山田泰嗣 岩崎れい 大城善盛 柴田正美 高鷲忠美 亀田弘 芦谷清 北克一	全国学校図 書館協議会	2000	-	i-v, 175p.	はしがき(p.i-ii) 学校図書館メディア のコンピュータ目録 (p.148-159)	高度情報社会におけ る学校図書館メディ ア(p.1-13) <資料> 「学校図書館基準」 「学校図書館メディ ア基準」 「学校図書館図書標 準」の設定について (通知) (p.160-171)
学校図書館 メディアの 構成とその 組織化 改 訂版	学校図書館 図解・演習 シリーズ2	志村尚夫	北克一 米谷優子 下村陽子 村木美紀 須永和之 見形宗子 鳴海敦子	青弓社	2009	初版 2004	196p.	監修者のことば-シ リーズ刊行にあたっ て(p.8) 改訂版への序文(p. 9-10) ファイル資料、逐次 刊行物の整理(p. 172-182)	学校図書館メディア の特性とその種類 (p.11-30) 資料 「NDC 解説-新版9 版の第三次区分」(要 目表) 『基本件名目録表 第 4版』(抜粋) (p.183-192)
資料・情報 を整備しよ う：学校図 書館メディ アの選択と 組織化	シリーズ い ま、学校図 書館のやる べきこと 2	-	笠原良郎 紺野順子	ポプラ社	2005	-	177, I-XIIp.	はじめに 資料は学 校図書館の命(p. 10-11)	第1章 資料がな ければ始まらない (p.12-48)
学校図書館 メディアの 構成	司書教諭テ キストシリ ーズ02	小田光宏	小田光宏 高橋知尚 齋藤康江 村上泰子 野末俊比古	樹村房	2002	-	iii-xii, 177p.	監修者の言葉(p. iii-iv) 序文(p.v-vi) メディアへの知的ア クセス支援(p. 93-102)	学校図書館メディア の意義(p.1-8) メディアへの物理的 アクセス支援(p. 103-112)

章立て(ページ数)						
第2章	第3章	第4章	第5章	第6章	第7章	第8章
第11章	第12章	第13章	第14章	第15章	第16章	
学校図書館におけるメディアの種類と特性と活用(p.26-41)	学校図書館メディアの構築(p.42-55)	学校図書館メディアの収集方針と選択(p.56-68)	学校図書館メディアの組織化の意義(p.69-83)	学校図書館メディアの組織化(1)(p.84-97)	学校図書館メディアの組織化(2)(p.98-117)	学校図書館メディアの記述目録法(1)(p.118-131)
学校図書館メディアの主題索引法(2)(p.178-190)	学校図書館メディアの主題索引法(3)(p.191-205)	学校図書館の情報資源の管理と運用(p.206-224)	特別な支援を要する児童生徒と学校図書館メディア(p.225-237)	学校図書館の機能を支えるメディア組織化の将来(p.238-249)	演習問題解答(p.250)	
学校図書館におけるメディアの種類と特性(p.27-41)	学校図書館メディアの構築(p.42-84)	学校図書館メディアの組織化の意義と展開(p.85-115)	学校図書館メディアの組織化の実際(p.116-176)	特別な支援を要する児童生徒と学校図書館メディア(p.177-181)	<資料> 「学校図書館基準」 「学校図書館メディア基準」 特別支援学校制度の創設に伴う「学校図書館図書標準」の改正について(通知)(p.182-193)	
蔵書構成と選択(p.37-69)	分類と件名(p.71-93)	目録(p.95-136)	受入・装備・排架(p.137-166)			
学校図書館におけるメディアの種類と特性(p.14-23)	学校図書館メディアの構築(p.24-42)	学校図書館メディアの組織化の意義と展開(p.43-52)	学校図書館メディアの分類法(p.53-83)	学校図書館メディアの件名目録法(p.84-106)	学校図書館メディアの目録法(p.107-136)	情報ファイル資料の構成(p.137-147)
学校図書館メディアの収集・選択とその管理(p.31-44)	資料の組織化、目録の機能、アクセスと展開(p.45-69)	目録規則、記述、排列、解説と演習(p.70-82)	目録とコンピュータ、書誌ユーティリティ(p.83-112)	図書分類、主題からのアクセス、分類法、件名法、その作業(p.113-135)	「Webcat」、国会図書館などの書誌データベース利用、雑誌記事索引の検索(p.136-146)	図書館の施設、利用案内、PR(p.147-171)
第2章 資料が探し出せなければ始まらない(p.49-100)	第3章 資料が使えなければ始まらない(p.101-135)	第4章 頼りにされる学校図書館をつくるために(p.137-174)	あとがき(p.175-176)	参考文献(p.177)	<参考資料> 「学校図書館図書基準」の設定について(通知) 「学校図書館メディア基準」 「学校図書館図書廃棄基準」(p.III-X II)	
メディア構成の理解(p.9-18)	司書教諭に求められるメディアの知識と技術(p.19-30)	基礎知識の習得(1)-学校図書館メディア-(p.31-44)	基礎知識の習得(2)-学校図書館メディアに関する情報源-(p.45-58)	メディアコレクションの形成(1)-形成の意義と評価-(p.59-72)	メディアコレクションの形成(2)-形成の計画策定-(p.73-80)	メディアコレクションの形成(2)-形成の実際-(p.81-92)
メディアの組織化にかかわる理解(1)-分類法-(p.113-128)	メディアの組織化にかかわる理解(2)-目録法-(p.129-142)	メディアの組織化にかかわる理解(3)-件名法-(p.143-154)	課題と展望(p.155-158)	[資料] 1. 学校図書館メディア基準 2. 「学校図書館図書標準」の設定について(通知) 3. 全国学校図書館協議会図書選定基準 4. 全国学校図書館協議会コンピュータ・ソフトウェア選定基準 5. 学校図書館図書廃棄規程 6. 「日本十進分類法」第二次区分表(銅目表)(p.160-174)		

る図書館諮問委員会を設置して児童・生徒を方針・計画の策定に関与させることを勧める記事などがあった¹⁸。また、児童・生徒以外の共同体の構成員、つまり教師や保護者を対象に、彼らのニーズを探ることの重要性も述べられていた。また複数の記事が、スクール・ライブラリアンが各学校のカリキュラムを理解する必要性を指摘していた。そして、その仕事を助けるツールとして「カリキュラム・マッピング」を紹介していた。カリキュラム・マッピングは、教室で必要なコンテンツを特定する方法として、教育コンサルタントのジェイコブ（Jacob, Heide）が提唱しているもので、年間を通して学校で教えられる学習内容を特定・視覚化する手法である。手法の詳細は、中村らの訳書『インフォメーション・パワーが教育を変える！』¹⁹に示されている。なお同書では、「カリキュラムマッピングは日本で言う年間学習指導計画のことと思われる」と補記されている。

コレクションに反映すべき学習内容という点では、カリキュラムの他にも、全米又は各州・地域で定められている学習達成基準への言及も見られた。例えば高校のスクール・ライブラリアンであるヤング（Young, Terry）は、現在の学校図書館コレクションには、生徒が習得を期待される能力（特にテストで計測される能力）を支援することが求められるため、スクール・ライブラリアンは各州や地域の学習達成基準（特にテストで測定される基準）を熟知すべきと述べている²⁰。

(b)既存コレクションの把握に関しては、複数の記事で「コレクション・マッピング」というツールが取り上げられていた²¹。サンノゼ州立大学教授のローチャー（Roertscher, David）が提唱するコレクション・マッピングは、コレクションに関するデータ（例：分類別の資料数、資料の出版年等）を集め、それらを統計的に分析し（例：分類別の資料数とそれらの出版年の平均値を算出）、その結果を可視化する（例：レポートやポスターの形にまとめる）という手法である。この手法によって、コレクション中の補充や縮小が必要な部分が特定できるため、資料の選定や除籍を検討する際の参考情報、管理職への説明資料などに利用できる。コレクション・マッピングの結果を、前述のカリキュラム・マッピングの結果と突き合わせることで、自館のコレクションが学校のカリキュラムに対応しているかを確認することもできる。

これらの他にも、コレクション形成に役立つツールとして、Lexile 指数を活用する手法が紹介されていた。Lexile 指数とは、英語テキストの読みの難易度（reading level）を表すもので、児童・生徒の読解力に合った資料を選ぶ時にも利用されており、北米の MARC レコードにはしばしば含まれるデータであるという。Lexile 指数を書誌データと共に図

18 Lesley S. J. Farmer, "Collection Development in Partnership with Youth Uncovering Best Practices," *Collection Management*, 26 (2), 2002, pp.67-78. ; Joseph Sanacore, "Teacher-librarians, Teachers, and Children as Cobuilders of School Library Collections," *Teacher Librarian*, 33(5), 2006, pp.24-29.

19 アメリカ公教育ネットワーク・アメリカ・スクール・ライブラリアン協会（足立正治・中村百合子 監訳）『インフォメーション・パワーが教育を変える！：学校図書館の再生から始まる学校改革』高陵社書店, 2003, p.211. (原書名: Anne Wheelock and Sandra Hughes-Hassell eds., *The Information-Powered School*, 2001.)

20 Terry Young, "Aligning Collection Development with Instructional and Learning Needs," *School Library Monthly*, 26(10), 2010.6, pp.20-22.

21 Denise Harbour, "Collection Mapping," *Book Report*, 20(5), March / April 2002, pp.6-10.
なお、手法の詳細は、前掲注(19)に掲載されている。

書館システムからダウンロードし、それらのデータを統計的に分析すれば、テキストの読みの難易度という面から学校図書館コレクションの実態を明らかにすることができる²²。(英語テキストの読みの難易度指数については、25 ページのコラム参照。)

方針・計画の策定と更新

方針・計画の策定・更新に関する議論では、策定・更新の作業をスクール・ライブラリアンだけの仕事とせず、保護者を含む学校関係者を関与させる必要性がしばしば指摘されていた。特に、学校管理職の関与が求められており、例えばカナダのスクール・ライブラリアン向け雑誌には、管理職のためのコレクション形成ガイドという記事が掲載されていた²³。

興味深かったのは、ある英語記事で述べられていた「選書方針の策定は難しくはない。なぜなら沢山のモデルが利用できるからである」²⁴という指摘である。実際、アメリカ・スクール・ライブラリアン協会 (American Association of School Librarians: AASL 以下、「AASL」という。) のウェブ・サイトには、学校図書館向けの *Workbook for Selection Policy Writing* (2003)²⁵ やコレクション形成に役立つウェブ・サイトを集めたリンク集²⁶ が公開されており、方針策定の際にモデルとして使用できる既存の方針が容易に手に入るようになっている。

②電子資料を始めとする多様な資料の選定

電子資料の選定は、複数の英語記事が取り上げていたテーマであった。ケンタッキー州の実態調査によると、2000年時点で、州内の高校図書館の94%がCD-ROM形式の電子資料を、92%がインターネットへの接続を提供し、87%のスクール・ライブラリアンがその使い方を生徒に指導していた²⁷。電子資料の導入が進んでいる米国では、スクール・ライブラリアンは「(予算が限られる中で) 電子資料を契約するか紙資料を購入するかという難しい問題に直面している」²⁸。複数の記事が指摘していたのは、紙資料と電子資料を効果的に配置する(両者を効果的に融合させる)必要性である。そうした記事の多くは、学校図書館コレクションを電子資料のみで構成することに対して否定的な論調で、学校管理職は電子資料の導入が紙資料にかかる費用の削減につながると考えがちだが、実際には電子資料が導入されても紙資料の利用は減らないという主張もあった²⁹。

電子資料以外では、これまで学校図書館があまり扱ってこなかった資料群、例えばビデ

22 Arlene Kachka, "Lexile Level Analysis as a Collection Development Tool," *School Library Monthly*, 28(4), January 2012, pp.35-36.

23 Ray Doiron, "An Administrator's Guide to Collection Development," *School libraries in Canada*, 2002, 21(4), pp.18-21.

24 Marjorie L. Pappas, "Selection Policies," *School Library Media Activities Monthly*, 21(2), 2004, p.41, 45.

25 American Library Association, *Workbook for Selection Policy Writing*. < <http://www.ala.org/Template.cfm?Section=dealing&Template=/ContentManagement/ContentDisplay.cfm&ContentID=11173> > (accessed 2013.9.1)

26 American Association of School Librarians, *Collection Development Essential Links*. < http://aasl.ala.org/essentiallinks/index.php?title=Collection_Development_-_General > (accessed 2013.9.1)

27 Ruth T. Kinnersley, "Electronic Resources in Kentucky High Schools: A Survey of Availability and Instruction for Students," *Internet Reference Services Quarterly*, 5(1), 2000, pp.7-28.

28 Cynthia A. Keller, "Collection Development: Electronic or Print Subscription Resources?," *School Library Media Activities Monthly*, 22(9), 2006, pp.56-59.

オ・ゲームや漫画などのポップ・カルチャーを扱った資料の選定に関する議論が見られた³⁰。ポップ・カルチャーを扱った資料を学校図書館コレクションに含めることで、伝統的なリテラシー（読み書き能力）の習得とともに新しい形のリテラシー（情報リテラシーやメディア・リテラシー）育成の促進につなげられる³¹と述べる記事がある一方で、それに反対する論調の記事は見られなかった。ここから、北米では、子どもたちに人気のある資料群が学校図書館に入れるべきものとして肯定的に捉えられていると言えよう。

学校図書館の資料選定方針に、2008年にAASLが発表した *Standards for the 21st-Century Learner*（21世紀の学習者のための基準）³²を反映させる必要性を取り上げた記事もあった。同基準は、学校図書館プログラムの中心に探究的な学習を位置付けているが、同基準を満たすように児童・生徒の探究的な学習を促進するには、彼らに多様な観点の情報を提供する必要がある。スクール・ライブラリアンのフリス（Frieze, Elizabeth E. G.）は、多様な観点の資料を用意する方法の一つに、多様な形態の資料（オンライン資料、マルチメディア資料、視聴覚資料など）を揃えることがあると述べている³³。

③知的自由の原則と検閲

学校図書館における知的自由の原則と検閲の問題は、英語の記事ではしばしば取り上げられるテーマである。この問題の最も有名な事例は、1999年頃に米国各州で沸き起こった、ハリー・ポッター・シリーズに対する学校図書館からの除架・除籍要求活動とそれに対する反検閲運動である³⁴。ALAの調査によると、除架・除籍要求の理由（1990年代）は、性的表現、攻撃的な言葉遣い、当該年齢に対する不適切さ、オカルト・悪魔崇拝、人種差別など様々であった³⁵。除架・除籍の要求者は児童・生徒の保護者が多いという³⁶。除架・除籍要求に対する図書館側の対応は、方針書にその手順を含めることが推奨されている³⁷。実際、ボルチモア郡公立学校図書館の資料選定基準³⁸を見ると、要求書の書式や要求書が提出された以降の手順が含まれている。

29 David Loertscher, "Digital & Elastic Collections in School Libraries: A Challenge for School Library Media Centres," *School libraries in Canada*, 21(4), 2002, pp.3-4.

30 Joy Kim et al., "Discovering Greatness: YALSA's Great Graphic Novels for Teens List," *Young Adult Library Services*, 10(3), 2012, pp.39-41. ; Kathy Sanford, "Videogames in the Library? What Is the World Coming To?," *School Libraries Worldwide*, 14(2), July 2008, pp.83-88.

31 Elizabeth E. G. Frieze, "Popular Culture in the School Library: Enhancing Literacies Traditional and New," *School Libraries Worldwide*, 13(2), July 2007, pp.68-82.

32 American Association of School Librarians, *Standards for the 21st-Century Learner*, American Library Association, 2007.

33 Elizabeth E. G. Frieze, "Inquiry Learning: Is Your Selection Policy Ready?," *Library Media Connection*, 27(3), 2008, pp.14-16.

34 Sara Wolf, "Coping with Mandated Restrictions on Intellectual Freedom in K-12 Schools," *Library Media Connection*, 27(3), 2008, pp.10-12.

35 International Reading Association, "Censorship in the Cyber Age," *Reading Today*, 18(4), February / March 2001, pp.22-23.

36 Dave Jenkinson, "Selection & Censorship: It's Simple Arithmetic," *School Libraries in Canada*, 21(4), 2002, pp.22-23. ; American Library Association, *Challenges by Reason, Initiator & Institution for 1990-99 and 2000-09*. < <http://www.ala.org/bbooks/frequentlychallengedbooks/statistics> > (accessed 2014.1.22)

37 Pappas, *op.cit.*(24)

38 Baltimore County Public Schools, *Selection Criteria for School Library Media Center Collections*. < <http://www.bcps.org/offices/lis/office/admin/selection.html> > (accessed 2013.9.1)

検閲の問題は、学校図書館でインターネット情報の提供が進むにつれて、更に大きく複雑になっている。ある雑誌記事では、ALAのLibrary Bill of Rights（図書館の権利宣言）に含まれる知的自由の原則に基づいて、学校図書館は生徒や教師に多様な観点・形態・分野の資料提供を行うべきだが、その一方で、補助金を受ける学校のコンピュータにインターネット・フィルタリングの導入を要求する連邦法Children's Internet Protection Act（子どもをインターネットから保護する法律）に対応することも必要だと述べており³⁹、米国のスクール・ライブラリアンが両者の間でバランスを取る難しさに直面していることが推察される。

館外関係者による検閲だけでなく、コレクション・マネジメントに紛れて行われる図書館員による自己検閲も、しばしば取り上げられる問題である。自己検閲とは、スクール・ライブラリアンが学校管理職や保護者との争いを恐れて、特定テーマ（例：宗教、性教育、政治）の資料を除架したり新規購入をしなかったりする行為である。自己検閲の実態を探るために行われた、アーカンソー州・デラウェア州・ノースカロライナ州の学校図書館を対象とした調査（2006年）によると、全体としては自己検閲が行われている様子はなかったものの、「年齢が60～69才」「図書館専門職の資格または免許の取得が伴う正規の大学の学位を持たない」「中等学校の学校図書館担当者」「教育経験が15年以下」といった四つの特徴がある者に、自己検閲的な行動が見られたという⁴⁰。検閲と資料選定の間の明確な線引きは難しく、スクール・ライブラリアンは資料選定を無意識に方向付けてしまう各種の要因に注意深く向き合う必要があると述べた記事もあった⁴¹。

(2) 英語図書における議論

英語の図書については、2000年以降に出版された学校図書館のコレクション形成もしくはコレクション・マネジメントに特化した以下の10冊を中心に考察する。この10冊を、表2-2に出版年順にまとめた。これらの図書においては、「コレクション・マネジメント」という用語よりも「コレクション形成」がよく使われている。またそれぞれの図書の中で、これらの用語は明確に使い分けされていた。内容としては、コレクション形成の方針、テクノロジーと新しいメディア、知的自由の原則と検閲の問題、コレクション形成や資料選定のためのツールについて言及されている。ただし、知的自由と検閲に関しては、中には直接的には述べておらず記述の背景として透けて見えるという印象のものもあった（例えば、② *School Library Collection Development*、④ *Less is More*、⑦ *Acquiring and Organizing Curriculum Materials*、⑨ *Managing and Analyzing Your Collection*）。

39 Wolf, *op.cit.* (34)

40 Wendy Rickman, "A Study of Self-Censorship by School Librarians," *School Library Research*, vol.13, 2010. < http://www.ala.org/aasl/sites/ala.org.aasl/files/content/aaslpubsandjournals/slr/vol13/SLR_StudyofSelf-Censorship_V13.pdf > (accessed 2013.9.1)

41 Christine M. Allen, "Are We Selecting? Or Are We Censoring?," *Young Adult Library Services*, 5(3), 2007, p.5. ; Rebecca Hill, "The Problem of Self-Censorship," *School Library Monthly*, 27(2), 2011, pp. 9-12.

表 2-2 2000 年以降に出版された学校図書館コレクションについての英語図書のリスト

①	Bishop, Kay. <i>The Collection Program in Schools: Concepts, Practices, and Information Sources, and Information Sources</i> (5th ed.). Westport, Libraries Unlimited, 2013, xxi, 263p.
②	Stephens, Claire Gatrell and Franklin, Patricia. <i>School Library Collection Development: Just the Basics</i> . Santa Barbara, Libraries Unlimited, 2012, x, 71p.
③	Hoffmann, Frank W. and Wood, Richard J. <i>Library Collection Development Policies: School Libraries and Learning Resource Centers</i> . Lanham, Scarecrow Press, 2007, xvii, 205p.
④	Baumbach, Donna J. and Miller, Linda L. <i>Less is More: a Practical Guide to Weeding School Library Collections</i> . Chicago, American Library Association, 2006, xi, 194p.
⑤	Kerby, Mona. <i>Collection Development for the School Library Media Program: a Beginner's Guide</i> . Chicago, American Association of School Librarians, 2006, vii, 53p.
⑥	Hughes-Hassell, Sandra and Mancall, Jacqueline. <i>Collection Management for Youth: Responding to the Needs of Learners</i> . Chicago, American Library Association, 2005, xiv, 103p.
⑦	Lare, Gary A. <i>Acquiring and Organizing Curriculum Materials: a Guide and Directory of Resources</i> . Lanham, Scarecrow Press, 2004, viii, 265p.
⑧	Dillon, Ken, McGregor, Joy, and Henri, James ed. <i>Collection Management for School Libraries</i> (revised ed.). Lanham, Scarecrow Press, 2003, viii, 372p.
⑨	Doll, Carol Ann and Barron, Pamela Petrick. <i>Managing and Analyzing Your Collection: a Practical Guide for Small Libraries and School Media Centers</i> . Chicago, American Library Association, 2002, vi, 93p.
⑩	Lukenbill, W. Bernard. <i>Collection Development for a New Century in the School Library Media Center</i> . Westport, Greenwood Press, 2002, xii, 209p.

③ *Library Collection Development Policies*、④ *Less is More*、⑦ *Acquiring and Organizing Curriculum Materials* はそれぞれ、コレクション形成方針、除架・除籍、カリキュラム資料（州の学習指導要領、教科書、視聴覚教材等）に絞り込んで議論している。それ以外の 7 冊は、実務の参考になるよう意図しながら、理論的解説と共に学校図書館のコレクション形成に関連する内容を広く論じている（20～21 ページの表 2-3）。この 7 冊について、以下、簡単に紹介する。

① *The Collection Program in Schools* は、Library and Information Science Text Series の一冊である。全体で 263 ページもあるが、各章のページ数は第 8 章の「形式ごとの規準 (Criteria by format)」を除くと実はそれほど多くなく、議論が必ずしも深まっているとは言い難い。とはいえ、資料の選定については、第 6 章から第 8 章までを割いて詳細に論じていて、最も網羅的で細部まで具体的に論じている一冊と言ってよいだろう。ただし、実務のためのツール等はほとんど掲載されていない。初版が 1988 年に出版されてから、1995、2001、2007、2012 と著者・編者や副書名が変わりながらも、既に第 5 版になった。現版の著者（第 3 版から参加）は、ニューヨーク州立大学バッファロー校のオンライン図書館学修士号プログラムの准教授兼ディレクターである。

② *School Library Collection Development* は、Just the Basic Series という、文字も大きな大判のシリーズの 1 冊で、多くの写真や表のほか、FAQ が各所にちりばめられていて、親しみやすい印象である。ただし、多様な情報が同じページに示されている印象もあり、良く構造化された分かりやすい一冊とは言えない。著者の二人はフロリダの高校のライブラリー・メディア・スペシャリストである。内容は、本の修繕やコレクションの点検作業にまで及び、極めて実践的かつ具体的になっている。初心者向けであるが、コレクション

形成の過程について漏れなく取り上げているように思われる。

⑤ *Collection Development for the School Library Media Program* は、サブタイトルに「A Beginner's Guide」とあるように、AASLによる、初心者向けのコレクション形成ガイドブックである。著者はテキサス州の小学校のスクール・ライブラリアンを15年務め、現在はメリーランド州のマクダニエル・カレッジの大学院で学校図書館メディア・プログラムの教授兼コーディネータを務めている人物で、*School Library Media Activities Monthly*等の雑誌にコレクション形成についての論考を多数発表している。第1章から第8章まで章タイトルが、全てWhat do I～?またはHow do I～?の形式になっていることから分かるように、実務者がすぐに具体的な行動に移ることができるような内容になっている。各章にはまた、チェックリストや各種のツールが示されている。

⑥ *Collection Management for Youth* は、ペンシルバニア州のドレクセル大学に所属する著名な学校図書館研究者の二人の共著である。タイトルに青少年のためのコレクション・マネジメントとあるが、内容は、学校図書館という、学習環境のコレクション・マネジメントについて述べられている。大判で図表も多く含まれており、第3部はツール集になっているので実務に大変参考になる。一方で、第1部は「学習者中心のコレクション・マネジメントの理論的基礎」を論じており、学術的な内容となっている。冒頭で、社会構成主義の学習観を基盤に置いた学習者中心のコレクション・マネジメントを掲げており、以後の章はそれを受けて書かれている。理論的説明と具体的なツールの両方が盛り込まれているが、大学院で教育学と図書館情報学を修めているような読者が想定されていると思われ、他の図書と比べると使用している用語や記述は難易度が高い。

⑧ *Collection Management for School Libraries* は、当初、オーストラリアで出版されたものを、北米の現実を踏まえて編み直し、北米向けとして新たに出版した異色の一冊である。内容に関しては、編者自身が冒頭で書いているとおり、典型的なコレクション・マネジメントの枠には入らない要素についても論じている（例えば第4章のナレッジ・マネジメント）。執筆者は研究者が中心で、研究の動向をよく整理した記述がされているが、一方でオーストラリアと米国の研究者9人がそれぞれ担当した各章は個性的であり、論文集のような印象を受ける。実務者にも参考になるが、時間をかけてじっくりと向き合う必要のある論考が並んでいる。

⑨ *Managing and Analyzing Your Collection* は、3章立てのシンプルな構造で、マネジメントの考え方（第1章）を基盤に、コレクションに関するデータの収集と分析（第2章）、除架・除籍（第3章）の重要性と方針の立て方等について論じている。除架・除籍に対する理解が校内ですら広まらないことを受け、「（「除架・除籍」ではなく）「コレクションの刷新（collection renewal）」と呼んではどうかと提案するなど、コレクション・マネジメントにおいて除架・除籍が重要な意味を持つことを強調している。著者は米国のライブラリー・スクールで教える学校図書館や児童文学の研究者で、この本は小規模な図書館と学校図書館の実務者に向けたものである。「実践的なガイド」「シンプルな“レシピ”」などと表紙ではうたっているが、内容は実践的でありながらも、よく練り上げられた構成・文章になっており、専門職ライブラリアンが三つの章を読み進めながら自身の考えを深められるものになっている。

表 2-3 英語図書 7 冊の目次

タイトル	章立て (ページ数)				
	序章	第 1 章	第 2 章	第 3 章	第 4 章
	第 10 章	第 11 章	第 12 章	第 13 章	第 14 章
① <i>The Collection Program in Schools: Concepts, Practices, and Information Sources, and Information Sources</i>	Introduction (p.xix-xxi)	The collection (p.1-9)	Collection Development (p.11-20)	Community analysis and needs assessment (p.21-26)	The school library program (p.27-35)
	Maintenance and Preservation (p.117-126)	Circulation and promotion of the collection (p.127-137)	Evaluation of the collection (p.139-155)	Ethical issues and the collection (p.157-173)	The curriculum (p.175-187)
② <i>School Library Collection Development: Just the Basics</i>	Series foreword (p.VII) Introduction (p.IX-X)	Collection development (p.1-20)	Developing a collection plan (p.21-40)	Ordering and purchasing (p.41-58)	Managing the collection (p.59-63)
⑤ <i>Collection Development for the School Library Media Program: a Beginner's Guide</i>	Introduction (p.v-vi)	What do I do first? (p.1-3)	How do I know what materials to buy? (p.5-8)	What sources do I use to select new materials? (p.9-12)	What sources do I use to fill in collection gaps? (p.13-15)
	Appendix B. Collection overview and curriculum map (p.43-44)	Appendix C. Sample reports (p.45-48)	Sources (p.49)		
⑥ <i>Collection Management for Youth: Responding to the Needs of Learners</i>	Introduction: The library as a place for learning (p.xi-xiv)	part one: The theoretical foundation for learner-centered collection management (p.1-15)		part two: Strategies for learner-centered collection management (p.17-75)	
		Changing expectations and models for practice (p.3-10)	Collector behaviors (p.11-15)	Policy as the foundation for the collection (p.19-32)	Selecting resources for learning (p.33-51)
⑧ <i>Collection Management for School Libraries</i>	Preface to the first edition (p.v-vi) Preface to the North American edition (p.vii-viii)	The information landscape (p.1-15)	Introduction to collection management (p.17-31)	The historical context: An evolution toward knowledge management (p.33-68)	Knowledge management: The human dimensions of collection management (p.71-87)
	Maintaining collection viability (p.225-244)	Collection evaluation (p.245-279)	Collection program funding management (p.281-306)	Issues in collection management (p.307-329)	Appendix A Catholic Education Commission of Western Australia Policy Statement School Library Resource Centres (p.331-336)
⑨ <i>Managing and Analyzing Your Collection: a Practical Guide for Small Libraries and School Media Centers</i>	Introduction (p.v-vi)	Management objectives (p.1-14)	Gathering and analyzing collection data (p.15-58)	Weeding (p.59-73)	(Appendix A) Alternate ways to do data analysis
⑩ <i>Collection Development for a New Century in the School Library Media Center</i>	Introduction (p.ix-xii)	Collection development as science and art (p.1-12)	Vision, mission, and a changing society (p.13-30)	Theories and concepts in collection development (p.31-48)	Collection development policy: A management approach (p.49-65)
	Selected bibliography (p.189-201)				

章立て (ページ数)				
第 5 章	第 6 章	第 7 章	第 8 章	第 9 章
第 15 章	第 16 章	第 17 章		
Policies and Procedures (p.37-43)	Selection (p.45-60)	General Selection Criteria (p.61-69)	Criteria by format (p.71-103)	Acquisitions and Processing (p.105-115)
Special groups of students (p.189-204)	Fiscal issues relating to the collection (p.205-211)	Facilities, digital resources, and the learning environment (p.213-217)	Opening, moving, or closing the collection (p.219-223)	Appendix: Resources (p.225-254)
Conclusion (p.65)				
How do I weed the collection? (p.17-21)	How do I evaluate the collection? (p.23-26)	How do I turn a complaint into a positive? (p.27-30)	How do I share the collection (p.31-37)	Appendix A. Core curriculum charts (P. 39-42)
		part three: Tools for learner-centered collection management (p.77-100)		
Budgeting for maximum impact on learning (p.52-65)	Collaboration from a planning perspective (p.66-75)			
Analyzing the environment (p.89-108)	Policies for collection management (p.109-134)	Selection and Acquisition (p.135-158)	Information and communication technologies meet collection management (p.159-205)	Collection management dilemmas in the digital age (p.207-224)
Appendix B Catholic Education Office of Western Australia: Policy Statement (p.337-339)	Bibliography (p.341-356)			
(Appendix B) Further reading for research and school library media centers				
Protecting and collection from censorship (p.67-86)	Technology, education, and information (p.87-111)	Tools and aids for selection (p.113-143)	Creating information: Cultural transmission and critical thinking (p.145-170)	Literature, information, and the creative process (p.171-188)

⑩ *Collection Development for a New Century in the School Library Media Center* は、Greenwood Professional Guides in School Librarianship シリーズの 1 冊で、テキサス大学の図書館情報学大学院の教授によって書かれている。著者は、高校と大学の図書館に勤務した経験を持ち、研究関心は広く、情報の組織化、青少年向けの文学、大衆文化、健康情報等について多くの論考を著している。本書には図表や実用的なツールはほとんど含まれておらず（第 7 章の「選書のツールや資料 (Tools and Aids for Selection)」にすら含まれていない）、一見して分かりやすいという印象は無いが、学校図書館研究に関心が限定されない視野の広い著者らしく、他の図書には無い個性的なアプローチからの記述が多く見られ、貴重な一冊になっている。第 1 章から第 4 章は理論的な内容になっているが、著者の社会的な関心がよく表れている。その後の章では、著者がマイノリティについて等、幅広い情報に子どもたちを会わせ、社会の文化変容を促すことに大変な熱意を持っていることが感じられる。著者のこのような学校図書館観と全く同じように考える人は必ずしも多くないかもしれないが、彼の一貫した姿勢から、多くの新しい見方を学ぶことができる一冊である。

専門職の判断

以上の 7 冊では共通して、(⑧ *Collection Management for School Libraries* が最たる例だが) <マネジメント>という観点からコレクションの評価と除架・除籍の重要性が強調されており、コレクションの評価をデータに基づいて行う方法が具体的なツールの紹介とともに書かれていた。しかし、紹介されている各種のツール（評価シート等）は、それに自館のデータを記入すれば自館コレクションを客観的に概観することができるものではあるが、その先で行わなければならない判断については、これらの図書の中に具体的な判断基準や指示は示されていなかった。その部分は、(⑧ *Collection Management for School Libraries* の言い回しで言えば)「専門職の判断 (professional judgement)」になるのだと思われる。

⑧ *Collection Management for School Libraries* の第 1 章「マネジメントの目的」では、図書館のコレクションの評価は、大抵、次の 2 カテゴリーに当てはまると述べている。それは、[1] コレクション自体の評価、例えば、数、質、正確さ、その他類似の尺度に照らしてどうかという評価と、[2] 利用者のニーズにどれだけ良く応えているかという評価である。後者がおそらく最も重要であろうとも書き添えられている。同書は、データの収集と分析を通してコレクションに関する客観的な認識を持ち、それに基づいて総合的に評価・判断することこそが、専門職の判断だと示唆していると理解される。

さらに、⑩ *Collection Development for a New Century in the School Library Media Center* の冒頭の章には「科学とアートとしてのコレクション形成」という章タイトルが付けられ、また⑧ *Collection Management for School Libraries* の冒頭の「北米版への序文」の中で「マネジメントをアートと考えるなら」という表現が見える。この「アート (art)」という言葉にも、専門職の人間による複雑で高度な、創造的な、貴重な判断という意味が込められているように思われる。

この他、上記の 10 冊以外で、学校図書館のコレクション形成に複数ページを割いている

図書には、主としてコレクション形成に関するものと、学校図書館の運営に関するものの2種類があった。前者は、基本的に、図書館情報学のコレクション形成に関する科目の教科書として用いられている（と思われる）概説書である。少し変わったものでは、*Reference Sources and Services for Youth*⁴²がある。同書は子どもと青少年のためのレファレンス資料のコレクションについて議論しており、公共図書館の児童サービス担当者とスクール・ライブラリアンが共に読者として想定されている。一方、後者は学校図書館の概説書であり、学校図書館学の教科書として採用されている（と思われる）図書である。これもまた、少し変わったものに、*Ethics in School Librarianship: a Reader*⁴³がある。同書は“スクール”・ライブラリアンとしての倫理を主題としているが、守秘義務や学校図書館の管理業務一般を議論しているほか、各所でテクノロジーやインターネットを含めたコレクションの形成に関わる倫理的問題が議論されている。

2.4 まとめ

日本語の文献では、学校図書館の「コレクション形成」に焦点を当てた図書は極めて少ない。「学校図書館メディアの構成」の教科書では、学校図書館の「コレクション形成」や「コレクション・マネジメント」に当たる議論がされてはいたが、〈学校図書館メディア〉もしくはコレクションまたは蔵書の〈構成〉や〈構築〉といった用語が教科書によって異なる意味合いで使われていた。このような混乱は、「学校図書館メディアの構成」という司書教諭講習の新科目名に幾らか起因していると推測される。この影響は雑誌記事にもうかがわれ、また、近年も「蔵書〈構成〉」が取り上げられ、蔵書の在り方が“静態的な”印象を帯びる形で議論されていた。この科目名が、平成10年の改正省令の通知以降、日本の学校図書館のコレクション形成に関する議論に与えた影響は大きいと思われる。

他方、英語の雑誌記事において2000年以降に頻繁に議論されているのは、マネジメントの考え方、電子資料を始めとする多様な資料の選定、知的自由の原則と検閲の問題である。また、これら全てに関わり、方針策定の重要性が指摘されていた。2000年以降の英語の図書については、学校図書館の「コレクション形成」や「コレクション・マネジメント」に特化し、実務での参照を想定して出版されたと思われる図書が10冊確認された。この図書の多くが、現場で活用可能な「コレクション形成」や「コレクション・マネジメント」のツール類を紹介していた。また、「コレクション形成」や「コレクション・マネジメント」を扱った図書館情報学もしくは学校図書館の概説書に、学校図書館の「コレクション形成」の議論が含まれていた⁴⁴。

なお、子どもの利用を意識した資料選定、特に児童書の選定については、日本でも北米でも、本稿で挙げたもの以外にも別途、選書論として議論されているものがあるが、本研

42 Meghan Harper, *Reference Sources and Services for Youth*, New York: Neal-Shuman Publishers, 2011

43 Carol Mann Simpson ed., *Ethics in School Librarianship: A Reader*, Worthington: Linworth, 2003

44 北米の図書館情報学では、館種を超えてライブラリアンが共通して学ぶコレクション形成論があり、この共通のコレクション形成論が、(理論でも実践でも)図書館の館種ごとの環境に合わせてアレンジして用いられている、という構造をここに見て取ることができる。

究では文献整理の対象から初期の段階で除いてしまった。選書論の検討は、今後の研究課題としたい。

コラム 英語テキストの読みの難易度指数について

第2章（文献調査）において、コレクション形成に役立てられるツールとして、Lexile 指数に言及した（14 ページ参照）。米国を始めとする英語圏の国々では、この Lexile 指数のような英語テキストの読みの難易度（reading level）を判定するシステムが複数開発され、その指数は個別の資料に付与され、MARC 等を通じて提供されている。図書館で、資料がこれによって排架されていることもある。こうした指数は、子どもの読解レベルに合わせた資料の選択のために、ライブラリアン、教師、保護者そして子どもたち自身によって活用されている。こうした読みの難易度判定のシステムは、日本ではほとんど知られていないため、ここで紹介しておきたい。

英語の読みの難易度の判定システムの主なものは、次の六つである。「Guided Reading」、「Fountas & Pinnell」、「DRA」、「ATOS」、「Follet」、「Lexile」。六つのシステムはそれぞれ独自の読みの難易度判定手法を用いているが、判定の考え方は大体同じである。

資料の読みの難易度は、当該資料の中からサンプルテキストを抜き出し、そこに含まれる文の長さや複数音節で構成される語の数等を計算式に当てはめることで算出する。更に難易度判定の精度を上げたい場合、上記のような計算可能なものだけでなく、それ以外の要素も判定に際して考慮することが考えられる。一般には次のようなものが、それぞれのシステムによって取捨選択され、異なる重み付けで使われている。

- ・当該資料のジャンル（例えば、ノンフィクション、教材、詩、伝記、ファンタジー、科学小説、歴史小説）
- ・テキスト構造の理解しやすさ（例えば、時間軸で前後に行ったり来たりする物語よりも、年代順の物語の方が理解しやすい）
- ・当該資料が扱うテーマ・主題
- ・文章の複雑さ、語彙と言葉（例えば、同じ言葉が繰り返されている頻度）
- ・印刷物としての特徴（例えば、読者の理解を助ける絵や用語解説の有無、図書 1 冊のボリューム）

ここでは、紙幅の関係でこれらを詳しく紹介することはできないが、以下のウェブ・サイトに、上記六つのシステムにもう一つ「Reading Recovery」を加えた、七つのシステムの指数間関係を示した表が掲載されている。是非御参照いただきたい。

「Reading Levels Correlation Chart」<http://www.titlewave.com/intro/early-lit.html>

筆者が海外の図書館を見学した経験によれば、こうしたシステムは、英語圏だけでなく、欧州の図書館でも見られるようになってきている。資料選定にいくらか科学的・客観的な視点を、持ち込もうとする動きと理解している。

本コラム執筆に当たり、Follett School Solutions 社のアジア太平洋地域の教育コンサルタント長、ラムゼイ（Ramsey, Tim）氏から、六つのシステムについて情報提供と講義をしていただいた。ラムゼイ氏にはこの場を借りて感謝を申し上げたい。

3. 学校図書館におけるコレクション形成の実態（事例調査）

3.1 調査の概要

平成 24 年度に「学校図書館事例調査」を実施した。この調査では、「調べものの部屋」のコレクション形成の参考に資することを目的とし、充実した活動を行っている学校図書館を訪問してヒアリングを行った。さらに訪問後、各校の担当者が資料選定で使用する情報源について、補足調査を行った。本章では、「学校図書館事例調査」の訪問調査及び補足調査の結果を整理する。この調査によって、各学校図書館におけるコレクションの量的な全体像と資料選定の作業の実態に関して情報を得た。

調査の目的、対象、調査期日、調査事項は以下のとおりである。

➤ 調査の目的

学校図書館における探究活動支援サービスのモデルケースをイメージして、国際子ども図書館に「調べものの部屋」を新設する予定である。「調べものの部屋」の準備に資するために、学校図書館におけるコレクション形成や資料選定の業務について、効果的な方法を明らかにする。

➤ 調査の対象

学校図書館のコレクション形成に関して効果的な方法を探るヒントとするため、対象は、コレクション形成や選書が意識化されており、かつ、充実した図書館活動を行っているとして各種研修会等で名前が挙がることの多い学校図書館とした。対象館は、中学校 5 校、中高一貫校 5 校であり、国公立、共学・男子校・女子校など様々な種類の学校を含んでいる。

表 3-1 調査対象校一覧

記号	学校種別		
A	中学校	公立	共学校 関東
B	中学校	公立	共学校 山陰
C	中学校	国立	共学校 関東
D	中学校	私立	共学校 近畿
E	中学校	私立	男子校 関東
F	中高一貫校（図書館は中高別）	私立	女子校 関東
G	中高一貫校 （幼小中高インターナショナルスクール併設）	私立	共学校 近畿
H	中高一貫校	私立	共学校 近畿
I	中高一貫校	私立	男子校 関東
J	中高一貫校	私立	男子校 近畿

➤ 訪問調査の調査期日

平成 24 年 6 月～11 月

- 訪問調査の調査事項
 - ・学校・学校図書館の概要
 - ・コレクションの概要・NDC 配分比
 - ・コレクション形成方針・選書基準
 - ・資料選定に影響を持つ授業・イベント
 - ・資料選定の方法・選書関与者
 - ・利用者ニーズへの対応
 - ・オンライン・データベース・PC 環境
 - ・資料入手の方法

- 訪問調査の調査方法

対象校の学校図書館を訪問し、図書館担当者への聞き取り及び館内の視察を行った。

- 補足調査の概要

上記の訪問調査の後、学校図書館の資料選定で使われる情報源に関して、補足調査を行った。

 - 調査期日：平成 25 年 1 月～3 月
 - 調査事項：資料選定の具体的な方法、使用している資料選定の情報源（名称、当該情報源で選書する資料種別、使用頻度、使用者、使用方法など）
 - 調査方法：電子メールによる質問紙調査

補足調査の質問紙を調査対象の 10 校に送付した。うち 9 校から回答があった。

3.2 訪問調査の結果

本節では、訪問調査の結果を整理する。はじめに、量的な視点から、対象館のコレクションの概要を説明する。その後、コレクション形成のうち資料選定に関する事項に焦点を当てて、各校での実態を述べる。

『図書館による授業支援サービスの可能性：小中学校社会科での 3 つの実践研究』（国際子ども図書館調査研究シリーズ no.2, 2012.8）で述べられていることだが、日本の学校図書館の実態には幅があり、全国一律にその役割や活動を定めることは難しい。今回は、充実した活動を行っている学校図書館を対象としたことから、対象館にはある種の共通する傾向があると想定して調査を進めたが、調査の結果、各館の運営資源の実態（資料購入費・担当者数等）には明確な共通性は見られず、その実態には幅があることが分かった。今回の結果に基づく安易な一般化には注意が必要だが、よりよい学校図書館活動を考える上で一つ一つの事例は参考にできると考え、その視点から結果を整理した。

(1) 学校・学校図書館の概要

調査対象校は、公立2校・国立1校・私立7校の計10校である。

[公立共学中学 A]は、蔵書数約13,000冊、資料購入費は年間約80万円であった。この規模は、全国学校図書館協議会（以下、「全国SLA」という。）が実施した「2012年度学校図書館調査」¹の平均値（中学校）に調査対象10校の中で最も近い値である。[公立共学中学 B]は、蔵書数が約17,000冊、資料購入費は年間約60万円と抑えた値であった。

[国立共学中学 C]は、蔵書数が約22,000冊、資料購入費は年間約200万円であり、公立2校と比較するとやや値が大きい。

D～Fの3校は私立中学校である。[私立共学中学 D]は、蔵書数が約55,000冊、資料購入費は年間約700万円と充実している。[私立男子中学 E]の蔵書数は約32,000冊、[私立女子中学 F]は、約28,000冊である。

G～Jの4校は私立中高一貫校である。[私立共学 IS・中高一貫 G]はインターナショナル・スクールを併設しており、蔵書数はインターナショナル・スクールと共有で約69,000冊である。[私立共学中高一貫 H]は、生徒数が多いため、蔵書数は約41,000冊だが、生徒一人当たりの冊数は少なくなっている。[私立男子中高一貫 I] [私立男子中高一貫 J]はコレクション規模が大きい。I校は10校中最大の約82,000冊である。I校もJ校も資料購入費は年間約600～700万円と充実している。

10校の蔵書を見ると、最大は82,000冊、最小は13,000冊であり、生徒一人当たりでは、最大99冊、最小21冊であった。私立校だけで見ても、一人当たり70冊以上の学校が4校ある一方で、H校のように、生徒数が多いため一人当たりの冊数が少ない場合もある。また、一人当たりの資料購入費では、最大は1.17万円、最小は0.12万円であった。生徒数の多いH校は、0.25万円と私立校としては少ない金額であったが、公立2校は、0.12万円、0.18万と更に少ない金額であった。

スタッフの面では、私立校の多くは、専任司書教諭1～2名にいわゆる学校司書を加えて常勤2名以上で運営しているが、国公立3校は、兼任司書教諭、学校司書、読書指導員等で運営していた。このように、私立校にも様々な状況があるが、概して、公立校よりは比較的恵まれた状況にあることが多いと推察される。国立校はその中間的な状況であった。

なお、「2012年度学校図書館調査」で示された全国平均値（蔵書数、資料購入費、担当者数）と比較すると、調査対象校はおおむね上回っていた。ただし、公立2校では平均値に近い値であった。

1 全国学校図書館協議会研究調査部「特集'12子どもの読書と学校図書館の現状：2012年度学校図書館調査報告」『学校図書館』no.745, 2012.11, pp.44-61.

表 3-2(1) 学校・学校図書館の概要

学校	生徒数	学級数	図書館の対象	コレクション数	1人当たり冊数	資料購入費	1人当たり資料購入費
	【概数】			(図書のみ)	【概数】	(万円/年)	【概数】
公立共学中学 A	450	17	中	13,000	29	80	0.18
公立共学中学 B	500	15	中	17,000	34	60	0.12
国立共学中学 C	480	12	中	22,000	46	200	0.42
私立共学中学 D	600	14	中	55,000	92	700	1.17
私立男子中学 E	720	22	中	32,000	44	250	0.35
私立女子中学 F	350	12	中	28,000	80	210	0.60
私立共学 IS・中高一貫 G ^{*1}	450/700	21/35	幼～高	69,000	99	600	0.86
私立共学中高一貫 H	2,000	49	中高	41,000	21	500	0.25
私立男子中高一貫 I	1,800	42	中高	82,000	46	700	0.39
私立男子中高一貫 J	1,100	30	中高	79,000	72	600	0.55
2012 年度学校図書館調査 平均値	-	-	中	11,138	28.3	76.7	0.19
	-	-	高	25,280	34.5	91.3	0.12
学校	貸出数 ^{*2}	1人当たり 貸出数 ^{*2}	学校図書館担当者数（専任、兼任とも）				
	(/年)	【概数】					
公立共学中学 A	6,000	13	4	(兼任司書教諭、学年スタッフの教員、図書選定担当の教員、専任読書指導員)			
公立共学中学 B	20,000	40	2	(専任学校司書非常勤 1、兼任司書教諭 1)			
国立共学中学 C	12,200	25	2	(専任学校司書非常勤 1、兼任司書教諭 1)			
私立共学中学 D	20,000	33	4	(専任司書教諭 1、嘱託事務職員 1、アルバイト職員 2)			
私立男子中学 E	23,000	32	2	(専任司書教諭 1、嘱託学校司書 1)			
私立女子中学 F	10,000	29	1	(専任司書教諭 1)			
私立共学 IS・中高一貫 G ^{*1}	6,000	13	7	(専任司書教諭 2、専任パート職員 5)			
私立共学中高一貫 H	40,000	20	4	(探究科教諭 1、司書教諭 1、学校司書 1、非常勤司書)			
私立男子中高一貫 I	11,000	6	3	(専任司書教諭 2、図書館専任事務職 1)			
私立男子中高一貫 J	14,000	13	6	(専任司書教諭 1、専任学校司書 1、業務委託スタッフ 4)			
2012 年度学校図書館調査 平均値	-	-	2.0	-			
	-	-	2.4	-			

*1 IS は「インターナショナル・スクール (International School)」の略。G 校の生徒数と学級数は、前者が中高のみ、後者が併設校 (インターナショナル・スクール幼～高) を含む数値。G 校の 1 人当たり冊数及び 1 人当たり資料購入費の算出に用いている生徒数は、併設校の生徒を含む (700 人)。

*2 英語多読資料を含むか否かなど、貸出数のカウント方法が学校により異なるため、貸出数の単純比較はできない。なお、G 校の数は、中高分の数値であり、併設校分は含まない。

(2) コレクションの概要・NDC 配分比

コレクションの量的概要及び日本十進分類表に基づく類別配分比 (以下、「NDC 配分比」という。) を調査し、国内二つの基準値 (「学校図書館図書標準」²及び「学校図書館メデイ

2 文部科学省「学校図書館図書標準」 < http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hour-ei/cont_001/016.htm > (最終アクセス 2013 年 10 月 25 日)

ア基準³⁾と比較した。「学校図書館図書標準」は、公立義務教育諸学校の学校図書館に整備すべきコレクション数の標準として、文部科学省が平成5年に定めたものであり、学級数から値を算出する。「学校図書館メディア基準」は、全国SLAが平成12年に示したもので、コレクションの最低基準冊数のほか、分類ごとの標準配分比率や年間購入冊数なども定められている。NDC配分比については、類ごとに、昭和29年～平成22年までの出版点数⁴⁾も表に加えた。

中学校対象の図書館であるA～E校について文部科学省の「学校図書館図書標準」と比較すると、ほぼ全校で標準値を上回っていた。一方、全国SLAの「学校図書館メディア基準」で提示された蔵書の最低基準冊数を図書・雑誌・新聞の全てにおいて満たしているのは、D校のみであった。新聞や雑誌の基準値が厳しく、とりわけ公立校にとっては、20タイトル以上の雑誌や4紙以上の新聞を購読することが困難であることがうかがえる。

「学校図書館メディア基準」については、実務者インタビュー調査(第5章)の中でも出版点数に対する0類資料の多さなど、基準を満たす難しさが指摘されていた。なお、NDC配分比の考察については、第4章(蔵書データの分析調査)の中で改めて取り上げることとし、本章では訪問調査時に各校から報告のあった数値を示すにとどめる。

表 3-2(2)-1 調査校のコレクション数・各種基準値

学校	図書館の対象	図書(冊) 【概数】	雑誌(タイトル)	新聞(タイトル)	学校図書館図書標準 ^{*1}	学校図書館メディア基準 ^{*2}		
						最低基準冊数	最低基準タイトル数	
							雑誌	新聞
公立共学中学 A	中	13,000	3	1	13,120	29,950	28	5
公立共学中学 B	中	17,000	0	0	12,160	29,300	28	5
国立共学中学 C	中	22,000	16	1	10,720	27,740	25	4
私立共学中学 D	中	55,000	35	6	11,680	29,100	28	5
私立男子中学 E	中	32,000	40	3	14,880	32,260	28	5
私立女子中学 F	中	28,000	15	2	10,720	27,350	25	4
私立共学 IS・中高一貫 G	幼～高	69,000	80	12	-	60,600	50	14
私立共学中高一貫 H	中高	41,000	43	4	-	71,300	50	14
私立男子中高一貫 I	中高	82,000	69	7	-	68,200	50	14
私立男子中高一貫 J	中高	79,000	120	5	-	61,100	50	14

*1 “学校図書館図書標準”. 文部科学省. (URLは本文脚注2を参照)に基づき、表3-2(1)の各調査校の生徒数・学級数から算出した。

*2 “学校図書館メディア標準”. 公益社団法人 全国学校図書館協議会. (URLは本文脚注3を参照)に基づき、表3-2(1)の各調査校の生徒数・学級数から算出した。A～Fの学校は中学校の計算式を使用。G～Jは中等教育学校の計算式を使用。

3 全国学校図書館協議会「学校図書館メディア標準」< <http://www.j-sla.or.jp/material/kijun/post-37.html> > (最終アクセス 2013年10月25日)

4 出版年鑑編集部「新刊書籍30年間対比部門別出版点数」『出版年鑑』2013-1(資料・名簿), 2013, p.300. 昭和57年以前のデータは総務省統計局「日本の長期統計系列 第26章文化・レジャー 26-2-a 書籍の出版点数」< <http://www.stat.go.jp/data/nenkan/23.htm> > (最終アクセス 2013年10月28日)を参照。

表 3-2(2)-2 NDC 配分比

学校	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	その他 ^{*5}	児童書	学習参考書
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
公立共学中学 A	4.0%	3.0%	4.0%	11.0%	11.0%	5.0%	2.2%	10.6%	4.8%	31.0%	5.0%		
公立共学中学 B	4.6%	2.5%	9.8%	11.0%	9.0%	6.2%	2.4%	8.4%	2.8%	41.8%	1.5%		
国立共学中学 C	1%	2%	9%	9%	9%	6%	2%	7%	7%	49%	0%		
私立共学中学 D	8%	6%	15%	11%	12%	4%	2%	16%	5%	21%	0%		
私立男子中学 E	4.7%	3.2%	15.4%	9.7%	13.2%	5.1%	3.2%	12.4%	3.0%	27.4%	0.0%		
私立女子中学 F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
学校図書館メディア基準 ^{*1} 中学校	6%	3%	17%	10%	15%	6%	5%	8%	5%	25%	0%		
私立共学 IS・中高一貫 G ^{*2}	2.9%	3.9%	12.8%	14.2%	13.8%	5.2%	2.4%	8.0%	4.2%	29.8%	2.4%		
私立共学中高一貫 H	2.5%	8.4%	12.7%	12.2%	14.6%	6.9%	5.5%	13.4%	3.6%	19.8%	0.5%		
私立男子中高一貫 I	8.6%	5.4%	13.6%	15.0%	13.1%	3.6%	1.8%	8.7%	3.5%	26.5%	0.0%		
私立男子中高一貫 J ^{*3}	3.5%	4.3%	11.2%	14.3%	8.4%	4.1%	2.8%	8.1%	2.5%	31.8%	9.0%		
学校図書館メディア基準 ^{*1} 中等教育学校	6%	9%	15%	11%	16%	6%	5%	7%	6%	19%	0%		
出版点数 ^{*4} 1954-2010	3.5%	4.9%	6.6%	21.3%	7.9%	9.6%	4.4%	11.7%	2.4%	18.9%		6.9%	2.1%

*1 “学校図書館メディア標準”. 公益社団法人 全国学校図書館協議会. (URL は本文脚注 3 を参照) より、「標準配分比率」を抜粋。

*2 コレクション中の洋書を除く和書 40,000 冊のみを対象に NDC 配分比を算出している。

*3 J 校の独自分類である「Y: 読み物」は 9 類、「J: 職業」は 3 類に含めた。

*4 本文脚注 4 を参照。

*5 「その他」の分類に含まれる資料は、J 校では、阪神大震災・英語科ライブラリ・時事問題・絵本など。A 校、G 校、H 校では、絵本など。

(3) 選書基準・方針

選書基準や選書方針を明文化していると回答したのは J 校のみであった。文章としては存在するが実務では使っていない 3 校を入れても半数に満たないことから、必ずしも文章化されていないことが分かった。また、選書やコレクション形成に関わる計画を策定している館はなかった。文献調査（第 2 章）で述べたように、北米では、コレクション形成でマネジメント・サイクルを回すために学校図書館で方針・計画を策定することの重要性が意識されていたが、日本の学校図書館では方針・計画を策定するのは一般的ではないことがうかがえる。

選書方針等は明文化されていなくても、何を意識して選書をしているかを尋ね、表 3-2 (3)-1 に整理した。多くの学校で、授業で使う資料を優先しているが、生徒の興味関心に基づき選書している館や、カリキュラムに即したメディアの導入を希望するなど、重視する部分は学校ごとに異なっている。また、資料選定だけでなく収集後のデータ整備に力を入れていると答えた館もあった。

表 3-2(3)-1 選書基準・方針の明文化、担当者の意識

学校	明文化	選書基準・方針に関する担当者の意識（要約）
公立共学 中学 A	×	今年から"授業で使えるコーナー"を常設したこともあり、教科書や資料集に掲載されているもの、発展教材として参考になるものを重点的に収集している。教員には年2回、図書希望調査を実施。教員用図書費が別にあるので、学校図書館で購入するものは授業で使うものに限っている。
公立共学 中学 B	△	事業説明用に作成した収集方針文書はあるが、抽象的なので実務では使っていない。 授業用資料は、(市内の)他の学校図書館や公共図書館から借りることを前提としている。どうしても必要な資料や借りられない資料を購入する。購入に当たっては、「あったら、いいな。使うかも・・・」の資料ではなく、「実際、授業で使ってみて、使える」資料を選んでいく。現在のところ、(調べもの用の資料よりも)蔵書回転率の高い読書センター用の資料(読書材)を多く購入。学習センターとして、読書センターとしての機能は両輪と考えているので、どちらかに偏らず収集するように心掛けている。
国立共学 中学 C	△	説明用に作成した収集方針(下記)はあるが、抽象的なので実務では使っていない。 「図書館の蔵書収集に関する基本方針：中学時代に本を読む楽しさを充分味わってほしい。そのためには、中学生にとって魅力ある資料をできるだけ揃え、自ら足を運ぶような図書館を目指しています。同時に、この時期ぜひ読んでほしい資料や授業に役立つ本も積極的に収集し、様々な工夫をこらし提供するよう心掛けています。」 以前は読書センターを主として活動していたが、今は学習情報センターも同じくらいの比重で活動しており、蔵書バランスも半々くらいになっている。3類4類の本を重点収集分野と考えている。児童書から成人用の一般書まで、幅広いレベルの資料が必要なのが、中学校の学校図書館だと思う。
私立共学 中学 D	△	授業や行事に応じて図書館委員会(司書教諭、管理職、各教科から教員1名で構成)で選書している。選書では、可能な限り多様な価値観に応じることを意識している。選書基準を、生徒会図書部(生徒によるクラブ活動)が中心となって策定中である。
私立男子 中学 E	×	図書館を使う授業や自由研究課題のための資料を優先して揃えている。ライトノベルや漫画(学習漫画含む)、ケータイ小説、タレント本は原則として購入しない。 図書館の資料を、生徒が使いやすく・見つけやすくするためのOPACのデータ整備に力を入れており、OPACによく使われる図書の目次やキーワードを入れている。
私立女子 中学 F	×	図書館では、授業で使う資料を優先して揃えている。図書館を使っている教科の資料は豊富だが、使っていない教科の資料は少ないのは当然だと考えている。読書材の選書では、生徒に「生きていることは素晴らしい」「生きていくと良いことがある」と伝えられる本であることを意識している。読書材の選定では、本を通読して購入可否を判断している。
私立共学 IS・ 中高一貫 G	×	日本及びアメリカ・オーストラリアなどの学校図書館協議会が示すガイドラインを参考にしつつ、本校のカリキュラムに即した学習に役立つ図書・雑誌・各種メディア・オンラインDBの導入に努めている。分野別の配分比率は、特に重視していない。和書では、全国SLAの学校図書館基本図書目録をコアとし、カリキュラム上必要とされる分野、テーマの本を加える。 分野や学年、言語レベルによって、有効と思われるメディアが異なるため、あらゆるメディアを考慮しつつ、費用対効果が妥当になるメディアの選択を心がけている。英語は概してネット資料が先んじて開発される傾向があり、それに対応した日本語メディアにも気を配る。件名の付与などOPACデータ整備にも力を入れている。

学校	明文化	選書基準・方針に関する担当者の意識（要約）
私立共学 中高一貫 H	×	生徒の興味関心をスタートとして選書。中学の総合や高校の探究の授業で、生徒が調べたいと言ったテーマに応じて選書している。 “1,000人に1人の生徒の興味・ニーズに良書で応える”を全般的な原則としており、蔵書全体のバランスはあまり考えない。生徒の探究学習の成果のうち、優秀な作品は蔵書にしている。 9類は、学校司書が中身を確認して購入することが多い。
私立男子 中高一貫 I	×	選書基準を説明するのは難しいが、極めて抽象的には、生徒たちが良き社会人（しっかりと物事を考えられる市民・国民）としての教養を培うものとも言えようか。知ってほしい、読んでほしい本ということだが、それは学校図書館として教科学習を厚く支えるものでもあると思う。一方で、面白く楽しく知見を広げるといった観点にも気を配っている。 また、学校図書館はそれ自体百科事典であるべきだと思うので、調べるべき項目をOPACで検索したときに、本として見つかることを目指している。
私立男子 中高一貫 J	○	明文化した収集方針及び除籍基準があり、学校図書館のホームページで公開している。収集方針では、次の種類の資料を図書館の基本資料と規定している。 ①レファレンスツール、②各分野資料（読みもの、郷土資料、学園資料、国際交流関連資料、英語科ライブラリ関連資料、職業・資格関連資料、時事問題関連資料）、③授業関連資料、④教員推薦資料、⑤教育研究資料。 偏りのない蔵書構成になるように留意し、利用者が疑問を感じたときに解決の助けとなるような資料を常に用意しておく。ただし、宗教・政党等に著しく偏りが見られるもの、人権を侵害するものなどは収集の対象外とする。リクエストに関する規定もある。

(4) 資料選定に影響を持つ授業・イベント

全ての対象校で資料選定に影響を持つ授業・イベントが確認できた。総合的な学習の時間や国語、社会だけでなく、美術、家庭科、理科等、幅広い教科の名前が挙がった。また、長い期間をかけて調査を行い論文を仕上げていく授業（修了論文など）との連携と、通常の授業との単発的・短期的な連携の両方を、多くの学校図書館で実践している。

表 3-2(4)-1 資料選定に影響を持つ授業・イベント

学校	資料選定に影響を持つ授業・イベント
公立共学 中学 A	<ul style="list-style-type: none"> ・中1～中3 図書館を使った調べ学習 ・主に国語科、社会科、家庭科、美術科、理科 ・校外学習や修学旅行の事前学習 ・朝の読書タイム
公立共学 中学 B	<ul style="list-style-type: none"> ・中1～中3 総合学習 ・数学科以外の教科全てと連携。 国語、社会、理科、英語、家庭、保健体育、道徳、美術等 ・必読書リスト
国立共学 中学 C	<ul style="list-style-type: none"> ・中2～中3 テーマ研究 ・国語、社会 ・その他の教科 家庭科、保健体育 ・英語の多読用図書
私立共学 中学 D	<ul style="list-style-type: none"> ・中1～中3 読書科 ・国語、数学、理科、美術、技術など ・推薦図書リスト

学校	資料選定に影響を持つ授業・イベント
私立男子 中学 E	<ul style="list-style-type: none"> ・労作展 ・中1 図書 ・授業時間内の「調べ学習」ではなく、課題（宿題）としての利用が多い。理科や数学、社会科などのレポート。 ・国語科では「生徒によるブックトーク」や「アニメーション」の授業が行われることもある。
私立女子 中学 F	<ul style="list-style-type: none"> ・中1 国語、社会 など ・中2 職業インタビュー、国語、音楽、家庭科、宗教科等 ・中3 美術、国語、社会、理科、家庭科など ・必読書リスト
私立共学 IS・ 中高一貫 G	<ul style="list-style-type: none"> ・中1 知の探検隊 ・中2 保健総合（保健の授業との合同） ・高校 情報の技術 ・その他の教科 ・国際バカロレア授業への対応 ・幼小 図書館の時間 ・どちらの学校にも、学年相当ではない、日本語や英語の初学者がいるため留意している。
私立共学 中高一貫 H	<ul style="list-style-type: none"> ・中1～中3、高2～高3 リブラリア・カリキュラム ・中学1年生向け読み物文庫
私立男子 中高一貫 I	<ul style="list-style-type: none"> ・中3 国語卒業論文（作品論） ・中3 英語 extensive reading コーナー ・高1 社会科基礎課程修了論文 ・高1 生活総合課題図書 ・図書館企画のイベント 「ブックフェア」、「夏休みに読んでおきたい本のリスト」、著者を囲む会、「戦争」と「平和」を考える読書会など
私立男子 中高一貫 J	<ul style="list-style-type: none"> ・中1～中3 情報活用 ・高2～高3 E-study ・その他の教科 保健、国語、社会など ・英語 多読用リーダー

(5) 資料選定の方法・選書関与者

資料選定の関与者について尋ねたところ、学校図書館の専任担当者は必ず関わっているが、それ以外の教員や管理職の関与方法は学校によって異なっていた。専任担当者が選書発注の全てを行うというのが4校（C、E、F、G）、教員や管理職も関与しているのは6校（A、B、D、H、I、J）であった。

資料選定のために特別な委員会を設けている学校図書館はなかったが、学校図書館の運営全般を扱う校内委員会を利用して資料選定を行っているところは多かった。見計らいでの選書や、特定シリーズ（例：岩波ジュニア新書、岩波文庫）の継続発注を行っている図書館もあった。

表 3-2(5)-1 資料選定方法・選書関与者

学校	資料選定の流れ（主と思われるものを抜粋）	選書関与者
公立共学 中学 A	資料選定のために、校務分掌に規定された図書選定担当教員を1名配置している。（司書教諭ではない国語科教員） 市内の学校図書館は、資料の選書発注ができる時期が決まっている（5月、7月、11月）。1回目で年間予算の80%を執行する取り決めがあるため、年間の利用状況や利用頻度を見極めた上で5月の資料選定を行うように気を付けている。	読書指導員 図書選定担当教員
公立共学 中学 B	資料選定は、随時行っている。学校司書が、候補資料をリスト化し、司書教諭、事務主幹、教頭、校長の承認を受けてから発注する。	学校司書、司書教諭、事務主幹、 教頭、校長
国立共学 中学 C	学校司書が、選書から発注まで全て行っている。ただし、教科用図書の選書は、必要に応じて教員と相談。	学校司書
私立共学 中学 D	図書館委員会（司書教諭、管理職、各教科から教員1名で構成）が選書の補助をしている。0～8類の選書では、新刊書誌を図書館委員会に回覧し、要望のあった資料は原則として購入。9類の選書は、主に司書教諭が行う。	司書教諭 0～8類：図書館委員会（司書教諭の他、管理職、教科教員）
私立男子 中学 E	司書教諭と学校司書が、選書から発注まで全て行っている。	司書教諭、学校司書
私立女子 中学 F	司書教諭が、選書から発注まで全て行っている。選書の判断に迷う資料があった場合は、教科教員が集まる教科会で諮ってもらっている。	司書教諭 （迷う際は教科教員）
私立共学 IS・ 中高一貫 G	資料選定の検討・確定は、全て司書教諭2名が行っている。教科教員の図書委員には、各種新刊案内を回覧して必要な資料を推薦してもらう。資料選定の委員会を定期的には開催していない。	司書教諭 推薦のみ：図書委員（教科教員）
私立共学 中高一貫 H	資料選定は、探究科教諭、司書教諭、学校司書で実施している。9類の本の選書は、主に、司書教諭が行っている。	探求科教諭、司書教諭、学校司書
私立男子 中高一貫 I	選書を担当する司書教諭が作成したリストを、図書館部（司書教諭2名及び図書館部担当教科教員7名で構成）が部会で検討・確認（毎週）。	司書教諭 図書館部（司書教諭のほか、教科教員）
私立男子 中高一貫 J	資料選定は基本的に図書館スタッフで実施。教科教員（各学年＋各教科から一人ずつ）・館長・司書教諭・学校司書で構成される図書館運営委員会（月例）では見計らい資料を選定。運営委員及び学校司書のうち3人が同意した資料を、購入決定。	図書館スタッフ（司書教諭・学校司書） 見計らい：図書館運営委員会（司書教諭、学校司書のほか、教科教員、館長）

(6) 利用者ニーズへの対応

教員や生徒からのリクエストは全ての学校で受け付けていた。生徒からのリクエストは、無条件に購入するのではなく購入可否を担当者が検討してから購入している学校がほとんどである。一方、教員からのリクエストは、全て購入している学校が多い。保護者からのリクエストを受け付けているのは、G校とH校であった。

生徒を選書に関与させている学校も見られた。方法は様々で、生徒・教員全員に図書希

望調査（アンケート）を行っている A 校や、書店に行き行う選書（店頭選書）に生徒が参加する機会を設ける C 校、E 校、J 校、生徒からのリクエストの審査に生徒が参加する A 校、C 校、D 校などがあった。

表 3-2(6)-1 生徒や教員によるリクエストへの対応

学校名	リクエスト
公立共学 中学 A	教員への図書希望調査（欲しい資料名を聞くアンケート）を、5月と10月に行っている。教員からの希望に対しては、読書指導員が類似資料の有無などを調べてリストを作り、図書選定担当教員に相談して発注。 生徒向けには、年1回図書希望調査を行うとともに、常時リクエスト箱を設置。9類のリクエストは、読書指導員が生徒の図書委員会と協議して決めている。
公立共学 中学 B	教員からのリクエストには全て応えている。生徒からのリクエストも受け付けている。原則として、漫画は入れないが、それ以外は可能な限り入れている。
国立共学 中学 C	教員からのリクエストを受け付けている。教員の希望で、授業で必要なテーマの資料を探して収集することも多い。生徒からのリクエストを受け付けている。ライトノベルは、既に入っているものは続刊が出れば購入、新シリーズは、詳しい生徒の意見を参考に、数を限定して購入。図書委員会の生徒による店頭選書（選書会）も実施している。
私立共学 中学 D	教員からのリクエストには、全て応じている。 生徒からのリクエストには、「生徒がつくる図書館」に重点を置いているため、生徒会図書部に責任を持たせて、購入可否の審査をしている。
私立男子 中学 E	教員からのリクエストを受け付けているが、教材研究図書費が別にあるので、図書館では子どもたちが使う本に限っている。 生徒からのリクエストも受け付けている。司書教諭が内容を検討して購入。図書委員会の生徒による店頭選書（選書会）も実施している。
私立女子 中学 F	教員からのリクエストは、授業で生徒が使う資料に限定して受け付けている。 生徒からのリクエストのうちチェックが必要と判断されるものは、見計らいで取り寄せ、現物を読んでから入れる。原則として、漫画やケータイ小説、ライトノベルはあまり入れない。
私立共学 IS・ 中高一貫 G	教員によるリクエストや相談は随時対応し、原則として購入する。 生徒のリクエストも受け付けている。リクエストを書くノート（自由記述）を置き、原則購入の方向で、司書教諭が資料内容を検討。
私立共学 中高一貫 H	教員・生徒からのリクエストを受け付けている。審査・検討の上で決定する。
私立男子 中高一貫 I	教員からの選書は原則的にはそのまま発注する。 生徒からのリクエストは、図書館部会で検討して諾否を決める。原則的に漫画本やライトノベルは購入しない。
私立男子 中高一貫 J	教員・生徒からのリクエストは原則応えることにしているが、判断に迷うものは図書館ミーティングや図書館運営委員会で検討する。漫画、逐次刊行物、視聴覚資料はリクエストの対象外。生徒による店頭選書は年1回。

(7) オンライン・データベース・PC環境

全ての学校に OPAC 検索端末が用意されている。インターネット端末も多くの学校で設置されているが、常時使用が可能ではない E 校などもある。また、授業貸出用の PC を揃えている学校 G 校、J 校や、図書館に隣接してクラス単位で利用できるパソコン・ルームを設置している学校が多い。

オンライン・データベースについては、利用していない学校が 4 校あった。利用している 6 校のうち、多くは新聞・参考図書関係のデータベース（スクールヨミダスやジャパン

ナレッジなど) を利用している。インターナショナル・スクール併設校である G 校のみ、英語の論文データベース (例: EBSCOhost) を契約している。文献調査 (第 2 章) で述べたとおり、北米では電子資料の選定が、学校図書館のコレクション形成に関する文献で頻繁に取り上げられるテーマであったが、我が国では、あまり導入が進んでいないことが見て取れる。英語圏とは異なり、中学生に適した日本語のオンライン資料があまり存在していないという理由が考えられる。

表 3-2(7)-1 オンラインデータベースの契約状況

学校	PC・ネットワーク環境	オンライン DB
公立共学 中学 A	<ul style="list-style-type: none"> ・館内に調べ学習用 PC3 台 (インターネットと校内 LAN が使用可)。校内 LAN からは各生徒用の学習用フォルダを見ることができる。 ・自校 OPAC 端末 1 台 (スタンドアローン) ・館外の PC 教室に PC40 台。(市内小中学校蔵書を検索可能) 	契約していない
公立共学 中学 B	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館の隣にコンピュータ室あり ・無線 LAN 整備 	契約していない
国立共学 中学 C	<ul style="list-style-type: none"> ・館内に、OPAC・インターネット接続 PC8 台 ・図書館の階下にコンピュータ室あり ・無線 LAN 整備 	スクールヨミダス
私立共学 中学 D	<ul style="list-style-type: none"> ・館内の閲覧室隣に 1 クラス分の PC を設置した「メディアスペース」がある。 ・館内に PC52 台 (メディアスペースの 48 台を含む)。うち 1 台は OPAC 専用端末。 	ジャパンナレッジ、ブリタニカオンライン、朝日けんさくくん、スクールヨミダス、聞蔵
私立男子 中学 E	<ul style="list-style-type: none"> ・館内に OPAC 端末 2 台、インターネット接続 PC3 台 (常時使用可にはしていない) 	契約していない
私立女子 中学 F	<ul style="list-style-type: none"> ・館内に検索用 PC2 台 (契約データベースと OPAC 利用可) ・図書館の隣にコンピュータ室あり 	朝日けんさくくん、スクールヨミダス、ジャパンナレッジ、ポプラディアネット
私立共学 IS・ 中高一貫 G	<ul style="list-style-type: none"> ・館内に生徒用 PC39 台 (デスクトップ 15 + ノート 24; うち 6 台は OPAC 優先) ・授業貸出用ノート PC40 台 ・学内 LAN で校内どこからでも OPAC、データベースが利用可能。 ・館内 2 階に、ラボ教室あり (デスクトップ PC10 台) ・昨年度から段階的に、インターナショナルスクール 6・7 年生と高等部の生徒全員に iPad を配布して使用させる試みが開始。 	百科事典:ポプラディアネット、ジャパンナレッジ、ブリタニカ・オンライン・ジャパン新聞:朝日けんさくくん、聞蔵(スクール版)、スクールヨミダス 英語:Newsbank Science、Britannica Online、EBSCOhost、Questia、BrainPOP
私立共学 中高一貫 H	<ul style="list-style-type: none"> ・館内の閲覧室に生徒検索端末 3 台 (OPAC 利用可) ・閲覧室の上階の総合学習室に PC49 台 (OPAC とインターネット利用可) ・無線 LAN 整備 	朝日けんさくくん
私立男子 中高一貫 I	<ul style="list-style-type: none"> ・館内にインターネット接続 PC20 台、OPAC 端末 4 台 ・校内への個人 PC 持込み可 	契約していない

学校	PC・ネットワーク環境	オンライン DB
私立男子 中高一貫 J	<ul style="list-style-type: none"> ・館内にインターネット接続 PC9 台、OPAC 端末 2 台 ・貸出用 PC80 台（クラス単位などで貸し出す） ・無線 LAN 整備 ・校内への個人 PC の持込みも可能 	朝日けんさくくん、スクールヨミダス、日経テレコン 21 教育用データベース普及版

3.3 資料選定の情報源に関する補足調査の結果

本節では、資料選定の情報源に関する補足調査の結果（9校分）を整理する。まず全体の傾向をまとめる。続いて、全体及び六つの情報源の種類ごとに、具体的な情報源名を挙げるとともに、各校のコメントを付して使用方法などを述べる。

(1) 全体の傾向

どの学校も、資料の選定には 23 種から 46 種、平均すると 33 種といった多数かつ多様な情報源を資料選定に利用している。そのうち、9校全てに共通する情報源は、「教員からのリクエスト」と「生徒からのリクエスト」である。次いで使用していると答えた学校数が多いのが、「Amazon.co.jp」「校内教員との会話」「新聞各紙の書評」であった。さらに、「学校図書館関係者の口コミ」「出版社の出版カタログ、パンフレット」「『ヤングアダルト図書総目録』」「生徒が作成したレポートの参考文献、注記」がその後に続く。

これらの傾向は、前述の「2012 年度学校図書館調査」⁵で示された、全国の学校図書館の状況と類似しているといえる。なお、「2012 年度学校図書館調査」によれば、「教員や生徒の希望や意見を図書選定に反映させている」と答えた学校は、全体の 9 割前後と報告されている。また、全国の中学校図書館の図書選定で利用されているツールは、“出版社・出版団体・取次会社刊行の目録”（利用率 74.6%）、“インターネットによる書誌情報”（55.2%）、“新聞・雑誌の書評や図書紹介”（62.4%）である。

表 3-3(1) 使用校数が多い資料選定の情報源

使用校数	情報源の名称等	情報源の種類
9	教員からのリクエスト	その他
9	生徒からのリクエスト	その他
8	Amazon.co.jp	インターネット
8	校内の教員との会話	その他
8	新聞各紙の書評	書評－逐次刊行物
7	学校図書館関係者の口コミ	その他
7	『ヤングアダルト図書総目録』（ヤングアダルト図書総目録刊行会）	書誌－逐次刊行物
7	出版社の出版カタログ、パンフレット	書誌－逐次刊行物
7	生徒が作成したレポートの参考文献、注記	その他

5 全国学校図書館協議会研究調査部「特集'12 子どもの読書と学校図書館の現状：2012 年度学校図書館調査報告」『学校図書館』no.745, 2012.11, pp.44-61.

使用校数	情報源の名称等	情報源の種類
6	『子どもの本この一年を振り返って』（NPO 図書館の学校）	書誌－逐次刊行物
6	『青春と読書』（集英社）	書評－逐次刊行物
6	『ダ・ヴィンチ』（メディアファクトリー）	書評－逐次刊行物
6	TOOLi-S	その他
6	新刊書店（店頭）	現物選書
5	『学校図書館のためのブックカタログ』（図書館流通センター）	書誌－逐次刊行物
5	『図書』（岩波書店）	書評－逐次刊行物
5	e-hon（トーハン）	インターネット
5	教文館ナルニア国 新刊情報メールマガジン	インターネット
5	ひこ・田中 個人書評サイト（児童文学書評）	インターネット

今回の補足調査では、情報源ごとに、当該情報源を使用して選定する資料の用途ごとに設定した選択肢〔(1)授業・学習用資料と読書材のどちらも／(2)授業・学習用資料／(3)読書材／(4)その他〕への回答を求めた。「授業・学習用資料」とは、カリキュラムに位置付けられている学習過程（授業や課題）で用いる資料を意味している。また「読書材」とは、カリキュラムから離れて、生徒がいわゆる“楽しみのため”に読む資料を指す。状況により異なるが、「読書材」は、文学や小説・エッセイ等の文芸書である場合が多い。

調査の結果、特定の資料種類（例えば「授業・学習用資料」）の選定だけに使われている情報源はあまり多くなく、多くの情報源は授業・学習用資料と読書材のどちらの選定にも使われていた。ただし、『朝日中学生ウィークリー』、『朝日新聞』、『ダ・ヴィンチ』の書評欄、「ひこ・田中」などの児童文学書評サイトは、読書材の選定に使われることが多かった。

また今回の調査では、各情報源の使用頻度を、四つの選択肢〔(1)刊行の都度、必ず使う／(2)ときどき使う（使わない時もある）／(3)必要な時だけ使う／(4)その他〕を用いて尋ねた。しかし、結果として「刊行の都度、必ず使う」と全9校が回答した情報源はなかった。参考までに、各校が「刊行の都度、必ず使う」情報源として挙げたものを示す。

- ・公立共学中学 A：特になし
- ・公立共学中学 B：（挙げた情報源）全て
- ・国立共学中学 C：『こどもとしょかん』、『社会科教育』、『ダ・ヴィンチ』、『教文館ナルニア国新刊情報メールマガジン』、『ちくま』、『波』
- ・私立共学中学 D：『SLA 速報版』、『週刊全点案内』
- ・私立男子中学 E：『ヤングアダルト図書総目録』、『子どもの本 この一年を振り返って』、『学校図書館のためのブックカタログ』、出版社パンフレット、『ダ・ヴィンチ』、『読書人』、『ひこ・田中』
- ・私立女子中学 F：『SLA 速報版』、『SLBA 会報』、『教文館ナルニア国新刊情報メールマガジン』
- ・私立男子中高一貫 I：『これから出る本』、『出版ニュース』、『図書』、『ちくま』、新聞各紙
- ・私立男子中高一貫 J：『SLA 速報版』、『これから出る本』、各出版社パンフレット

(2) 資料選択の情報源：書誌—逐次刊行物

表 3-3(2) 資料選定の情報源「書誌—逐次刊行物」*

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	刊行頻度	選書種別				使用頻度			
					選択肢×回答校数				選択肢×回答校数			
					(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
①選択書誌	4	学校図書館速報版	全国学校図書館協議会	月2回	3	1			3	1		
	3	学校図書館基本図書目録	全国学校図書館協議会	年刊	2	1			2	1		
	1	選定図書速報	日本図書館協会	年間42～43回	1						1	
②児童資料を収録した書誌	7	ヤングアダルト図書総目録	ヤングアダルト図書総目録刊行会	年刊	7				2	1	4	
	6	子どもの本 この一年を振り返って	NPO 図書館の学校 [図書館振興財団]	年刊	6				2	2	2	
	4	学校図書館図書整備協会会報	学校図書館図書整備協会 (SLBA)	年3回	3	1			2	1	1	
	1	この本 読んで	JPIC	季刊			1				1	
	1	●●年に出了た子どもの本	教文館	年刊			1		1			
	1	図書館教育ニュース	少年写真新聞社	隔週			1				1	
③一般書誌	3	これから出る本	日本書籍出版協会	月2回	3				3			
	1	週刊新刊案内	トーハン	週刊	1				1			
	1	週刊新刊全点案内	図書館流通センター	週刊	1				1			
	1	新刊ニュース	トーハン	月刊	1				1			
④入手可能な図書の書誌	5	学校図書館のためのブックカタログ	図書館流通センター	年刊	4	1			1		4	
	3	TRC 基本在庫カタログ(知識と学習資料編・読み物編)	図書館流通センター	年刊	3				1	1	1	
⑤出版社や出版業界のパンフレット	8	出版社の出版カタログ、パンフレット		随時	6	2			2		6	
	1	書店の冊子・パンフレットなど		不定期	1				1			

*表 3-3(2)～表 3-3(7)において、表中の[選択肢]は、それぞれ以下の意味を表す。

「選書種別」の選択肢：当該情報源で選書する資料の種別を表す

(1)授業・学習用資料と読書材のどちらも／(2)授業・学習用資料／(3)読書材／(4)その他

「使用頻度」の選択肢：当該情報源を使う頻度を表す

(1)刊行の都度、必ず使う／(2)ときどき使う(使わない時もある)／(3)必要な時だけ使う／(4)その他

①選択書誌

学校図書館に適した図書を選択して掲載している文献リストを、「選択書誌」という。このような書誌のうち、『学校図書館基本図書目録』は、“教科関連資料の選定の際に教科担任に提示する”(A校)など教員に提示する用途で使われていた。『学校図書速報版』は、「刊行の都度必ず使う」と3校が回答した。資料選定では、“『学校図書速報版』のリストのうち、「小学校高学年」「中学校」がついている資料のみチェックするが、9類はここから選ばない”(F校)という利用方法もあった。

②児童資料を収録した書誌

児童・生徒を対象にした図書を収録対象にしている書誌のうち、『ヤングアダルト図書総

目録』は、利用校が7校と利用率が高い。『子どもの本 この一年をふりかえって』については、“それぞれジャンルの専門家によるきちんとしたコメントがあるので信頼がおける”(B校)という評価であった。『学校図書館図書整備協会会報』は、“自然科学系が比較的多く、授業・学習用資料として中学部門をチェックする”(F校)という利用がされている。

③一般書誌

一般的な新刊情報が入手できるのが「一般書誌」である。『これから出る本』については、「刊行の都度、必ず使う」と3校が回答した。

⑤出版社や出版業界のパンフレット

ほとんどの学校が、出版社から送られてくる新刊案内のパンフレットを利用している。“全てのパンフレットに目を通す”(A校)、“パンフレットは参考程度で、あまり見ていない”(I校)、“最新刊のみチェックする”(F校)など利用状況は様々であった。

(3) 資料選択の情報源：書評－逐次刊行物

表 3-3(3) 資料選定の情報源「書評－逐次刊行物」*

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	刊行頻度	選書種別				使用頻度			
					選択肢×回答校数				選択肢×回答校数			
					(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
①書評－児童資料雑誌	4	こどもとしょかん	東京子ども図書館	季刊	3		1		1	1	2	
	4	子どもの本棚	日本子どもの本研究会	月刊	2		2		1	1	1	1
	3	子どもと科学よみもの	科学読物研究会	月刊	2	1				2	1	
	2	子どもと読書	親子読書・地域文庫連絡会	隔月			2			1	1	
	2	MOE (モエ)	白泉社	月刊	1		1			1	1	
	1	子供と科学	誠文堂新光社	月刊		1					1	
	1	ジュニアアエラ	朝日新聞社	月刊	1					1		
②書評－出版社PR誌	6	青春と読書	集英社	月刊	4		4	4	2	1	3	
	5	図書	岩波書店	月刊	3			2	1	1	3	
	4	ちくま	筑摩書房	月刊	2	1		1	2	1	1	
	4	波	新潮社	月刊	2		1	1	1	1	2	
	1	UP	東京大学出版会	月刊	1						1	
	1	YA朝の読書ブックガイド180選プラス	ヤングアダルト出版会	年刊			1				1	
	1	あうる「図書館の学校」	図書館振興財団	季刊	1						1	
	1	出版ニュース	出版ニュース社	旬刊	1				1			
	1	本の雑誌	本の雑誌社	月刊			1				1	
	1	中学生に読んでほしい30冊	新潮社	年刊			1				1	

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	刊行頻度	選書種別				使用頻度			
					選択肢×回答校数				選択肢×回答校数			
					(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
③書評－一般雑誌	2	Katsukura(カツクラ)	新紀元社	季刊	1		1			1	1	
	1	Newton	ニュートンプレス	月刊	1						1	
	1	Sports Graphic Number	文芸春秋社	週刊	1						1	
	1	いける本・いけない本	ムダの会	季刊	1						1	
	1	週刊東洋経済	東洋経済新報社	週刊	1						1	
	1	ナショナルジオグラフィック	日経ナショナルジオグラフィック社	月刊	1						1	
	1	学校で購入している雑誌など			1				1			
	1	週刊金曜日	金曜日	週刊				1		1		
	1	日経サイエンス	日経サイエンス社	月刊	1						1	
1	いつも決まって読む雑誌はない			1						1		
④書評－教員向け雑誌	1	学校図書館	全国学校図書館協議会	月刊	1						1	
	1	教員向け雑誌			1				1			
	1	社会科教育・歴史地理教育		月刊		1			1			
⑤書評－書評誌	6	ダ・ヴィンチ	メディアファクトリー	月刊	4		2		2	1	3	
	4	週刊読書人	読書人	週刊	3			1	2	1	1	
⑥書評－新聞	8	朝日新聞	朝日新聞社	日刊	5		2	1	1	3	4	
	7	日本経済新聞	日本経済新聞社	日刊	5		1	1	1	2	4	
	6	読売新聞	読売新聞社	日刊	3		2	1	1	3	2	
	6	毎日新聞	毎日新聞社	日刊	4		1	1	1	2	3	
	3	東京新聞	東京新聞社	日刊	2		1		1	1	1	
	2	朝日中学生ウィークリー	朝日学生新聞社	週刊			2			1	1	
	2	産経新聞	産経新聞社	日刊	1		1		1		1	
	1	山陰中央新報	山陰中央新報	日刊	1				1			

* [選択肢] は、それぞれ以下の意味を表す。

「選書種別」の選択肢：当該情報源で選書する資料の種別を表す

(1) 授業・学習用資料と読書材のどちらも / (2) 授業・学習用資料 / (3) 読書材 / (4) その他

「使用頻度」の選択肢：当該情報源を使う頻度を表す

(1) 刊行の都度、必ず使う / (2) ときどき使う(使わない時もある) / (3) 必要な時だけ使う / (4) その他

①書評－児童資料雑誌

児童資料雑誌の書評は、“(小学生以下向けの本が多く) 中学生高校生向けの本があまり載っていないものの、書評がしっかりしている”(F校)と評価されていた。『こどもとしょかん』『子どもの本棚』『子どもと読書』を、読書材選定の参考にする学校が目立つ。“東京子ども図書館の『こどもとしょかん』の書評は信頼がおける”(F校)。理科系資料を選定する情報源に、『子どもと科学よみもの』を3校が、『子供の科学』は1校が使用している。

②書評－出版社PR誌

出版社PR誌の書評を利用している学校は多いが、学校によって使用方法が異なる。選

書種別で「(4) その他」を選んだ学校は、教員用資料の選定に用いている館が目立った。

③書評—一般雑誌

小説ファン・ブックを名乗る雑誌『Katsukura』は、“読書材の選定で参考程度に用いている”(F校、H校)。また、“学校図書館で購入している雑誌の書評欄は、資料選定の参考にしている”(E校)との回答があった。

④書評—新聞

新聞の書評欄を活用している学校は多いが、学校によって使用方法が異なる。学習・授業用資料の選定、読書材の選定に用いているほか、「その他」の用途として「教員用資料の選定」を挙げている学校もあった。『朝日中学生ウィークリー』の書評は、2校しか使用していないものの使用者の評価は高い。“様々な人が選んでいるので必ず読み、面白い本は購入する”(F校)、“書評は読みごたえがある”(A校)とのコメントがあった。

(4) 資料選定の情報源：図書

表 3-3(4) 資料選定の情報源「図書」*

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	選書種別				使用頻度				
				選択肢×回答校数				選択肢×回答校数				
				(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	
①図書	1	12歳からの読書案内	すばる舎			1		1				
	1	12歳からの読書案内 海外作品	すばる舎			1		1				
	1	12歳からの読書案内とれたて！ベストセレクション	すばる舎			1		1				
	1	SFが読みたい！	早川書房			1		1				
	1	TEEN'S BOOK GUIDE	日本書店商業組合連合会			1		1				
	1	お〜い中学生！！本はよかバイ	玄遊舎			1		1				
	1	こころの傷を読み解くための800冊の本	自由国民社			1		1				
	1	だれでもできるブックトーク 1. 2	国土社			1		1				
	1	とっておきの道徳授業 中学校編 1〜8	日本標準			1		1				
	1	ファンタジーブックガイド	国書刊行会			1		1				
	1	メニューにない本ください	フェリシモ出版			1		1				
	1	絵本のある暮らし	吉備人出版			1		1				
	1	私たちの選んだ子どもの本	東京子ども図書館			1		1				
	1	大人のためのヤングアダルト絵本ガイド	サンタポスト			1		1				
	1	中学生はこれを読め 1. 2	北海道新聞社			1		1				
1	自分が読んだ本から（注記や参考文献等を参照）			1					1			

*[選択肢]は、それぞれ以下の意味を表す。

「選書種別」の選択肢：当該情報源で選書する資料の種別を表す

(1) 授業・学習用資料と読書材のどちらも / (2) 授業・学習用資料 / (3) 読書材 / (4) その他

「使用頻度」の選択肢：当該情報源を使う頻度を表す

(1) 刊行の都度、必ず使う / (2) ときどき使う(使わない時もある) / (3) 必要な時だけ使う / (4) その他

B校のみが、読書材選定の情報源として図書を用いていた。また、「自分が読んだ本から(注記や参考文献等を参照)」と回答したのは、探究的な学習の支援に積極的に取り組んでいるH校である。

(5) 資料選定の情報源：インターネット

表 3-3(5) 資料選定の情報源「インターネット」*

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	刊行頻度	選書種別				使用頻度			
					選択肢×回答校数				選択肢×回答校数			
					(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
①書店や団体によるウェブ・サイト等	8	Amazon.co.jp	アマゾンジャパン	随時	7	1			2		6	
	5	e-hon	トーハン	随時	4	1			1	1	3	
	5	教文館ナルニア国新刊情報メールマガジン	教文館	週刊	5				3		2	
	2	紀伊國屋書店 BookWeb	紀伊國屋書店	随時	2						2	
	2	先生のための授業に役立つ学校図書館データベース	東京学芸大学学校図書館運営専門委員会	随時	2						1	1
	1	Honya Club	日販	随時	1						1	
	1	Webcat Plus	国立情報学研究所	随時		1					1	
	1	カーリル	株式会社カーリル	随時		1					1	
	1	Nii (国立情報学研究所)	国立情報学研究所	随時	1						1	
②公共図書館のウェブ・サイト	2	荒川区立図書館		随時			2			1	1	
	1	大阪府熊取町立熊取図書館		随時	1					1		
	1	大阪府河内長野市立図書館		随時	1					1		
	1	区立図書館		随時	1					1		
	1	千葉県浦安市立図書館		随時	1					1		
	1	芦屋市立図書館など阪神地区及び神戸市立図書館		随時	1					1		
	1	杉並区立図書館		随時			1			1		
	1	世田谷区立図書館		随時		1				1		
	1	東京都立図書館		随時	1					1		
	1	府中市立図書館(司書教諭の地元)		随時	1					1		
③大学図書館のウェブ・サイト	1	早稲田大学図書館		随時	1					1		
	1	東京学芸大学		随時		1				1		
	1	東京大学図書館		随時	1					1		
	1	慶應大学図書館		随時	1					1		
	1	甲南大学図書館		随時	1					1		
	1	関西学院高等学校		随時	1					1		
	1	甲南中・高等学校		随時	1					1		

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	刊行頻度	選書種別				使用頻度			
					選択肢×回答校数				選択肢×回答校数			
					(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
④書評－個人ウェブ・サイト等	5	ひこ・田中		随時	2		3		1	1	2	1
	3	金原 瑞人		随時	1		2				3	
	2	WEB 本の雑誌 (目黒 考二)	本の雑誌社	随時			2			1	1	
	1	ブックログ		随時			1				1	
	1	よい絵本	全国学校図書館協議会	随時	1						1	
	1	斎藤 美奈子		随時			1				1	
	1	松田 哲夫		随時			1				1	
	1	赤木 かん子		随時			1				1	
	1	本を検索キーにして サイトを訪れる		－	1						1	

*[選択肢]は、それぞれ以下の意味を表す。

「選書種別」の選択肢：当該情報源で選書する資料の種別を表す

(1)授業・学習用資料と読書材のどちらも／(2)授業・学習用資料／(3)読書材／(4)その他

「使用頻度」の選択肢：当該情報源を使う頻度を表す

(1)刊行の都度、必ず使う／(2)ときどき使う(使わない時もある)／(3)必要な時だけ使う／(4)その他

①書店や団体によるウェブ・サイト等

オンライン書店「Amazon.co.jp」のウェブ・サイトは8校が使用しているが、学校によって使用方法が異なっていた。“主題ごとにどんな本があるかチェックする。読者レビューを見る”(E校)、“なか見検索を使う”(J校)、“書評を見る”(A校)、“知らない本を調べる時にチェックする”(C校)、“生徒の選書の際に、モニターに映してシェアする”(D校)など、各校のコメントから、「Amazon.co.jp」の読者レビューやなか見検索機能を、現物を見ることができない時の補完材料に使っている様子が見受けられる。「e-hon」(トーハンのオンライン書店)の使用方法も学校によって異なる。“週間ランキングを確認する”(B校)、“ジャンル別の最新情報が充実しており、新刊情報と書評を見る”(A校)など、最新の最新情報を得るために使用している。

児童書専門書店である教文館ナルニア国の「新着情報メールマガジン」は、5校が利用していると回答した。“個人でメルマガ登録して読んでいる。きちんと読み込み評価されているので、信頼を置いている”(B校)、“必ず読み、面白そうな資料は購入している”(F校)、“メルマガを購読しており、必要なものがあれば購入している”(E校)、“必ず目を通す”(C校)とあり、その評価は高い。

「先生のための授業に役立つ学校図書館データベース」も活用されている。“学校図書館が活かされた授業実践をコピーして教員に読んでもらう”(A校)。“記事を入力しつついろんな本を知ることが出来る”(C校)など、教員に手渡す手段としても利用されている。

②公共図書館のウェブ・サイト

多くの学校は、近隣の公共図書館のウェブ・サイトをよく利用している。近隣以外の公共図書館ウェブ・サイトでは、「荒川区立図書館ティーンズページ」を2校が挙げている

(A校、F校)。なお、両校共に荒川区内の学校ではない。

③大学図書館等のウェブ・サイト

“大学図書館のウェブ・サイトの新着情報を参考にしている”(I校)との回答があった。

④書評－個人のウェブ・サイト等

次のような個人の書評ウェブ・サイトが活用されている。ひこ・田中氏（児童文学評論家）、金原瑞人氏（児童文学研究家）、WEB本の雑誌（目黒考二氏）、松田哲夫氏（ブックコメンテーター）、赤木かん子氏（児童文学評論家）。“児童文学書評は信頼が置ける”(A校)というコメントがあるなど、ひこ・田中氏の個人書評ウェブ・サイトは5校で使われている。金原瑞人氏のウェブ・サイトは、読書材の選定での利用が2校、学習・授業用資料と読書材のどちらでも利用するのは1校から回答があった。その他、読んだ冊数や感想など記録することで読書記録を通じたコミュニケーションができるウェブ・サイト「読書メーター」も挙げられていた。

(6) 資料選定の情報源：現物選書

表 3-3(6) 資料選定の情報源「現物選書」*

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	刊行頻度	選書種別				使用頻度				
					選択肢×回答校数				選択肢×回答校数				
					(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	
①展示会	3	子どもたちの学びを支援する図書館のためのブックフェア	図書館流通センター	随時	2	1						3	
②書店	4	新刊書店(三省堂書店、ジュンク堂など)		随時	6							6	
	4	新古書店(BOOKOFFなど)		随時	1	1	1	1				4	
	1	ノトス・ライブからの新刊案内や現物の持込み及び取寄せ見計らい		随時	1							1	
③学校図書館の蔵書	1	他校の学校図書館の書架		随時	1					1			

*[選択肢]は、それぞれ以下の意味を表す。

「選書種別」の選択肢：当該情報源で選書する資料の種別を表す

(1) 授業・学習用資料と読書材のどちらも / (2) 授業・学習用資料 / (3) 読書材 / (4) その他

「使用頻度」の選択肢：当該情報源を使う頻度を表す

(1) 刊行の都度、必ず使う / (2) ときどき使う(使わない時もある) / (3) 必要な時だけ使う / (4) その他

新刊書店に行つての現物選書(「店頭選書」と呼ばれる)は6校が行つている。新古書店を用いる学校も目立つ。

(7) 資料選定の情報源：その他

表 3-3(7) 資料選定の情報源「その他」*

情報源の種類	回答校数	情報源の名称	発行元	刊行頻度	選書種別				使用頻度				
					選択肢×回答校数				選択肢×回答校数				
					(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)	
①図書館業務支援システム	6	TOOLi-S	図書館流通センター	随時	6					1	5		
②地方自治体刊行物	1	公共図書館が作成した『おすすめの100冊』など					1				1		
③その他	1	他の学校図書館の新刊案内			1								1
	1	公共図書館および学校図書館関係団体の発行物			1						1		
④校内配布物	1	教科書		年度初		1							1
	1	クラブ活動予定表		年度初		1							1
	1	授業シラバス		年度初		1							1
⑤生徒	6	生徒が作成したレポートの参考文献、注記		随時	4	2			1		4	1	
	9	生徒からのリクエスト		随時	7		2		3	2	3	1	
⑥教員	9	教員からのリクエスト		随時	8	2		1	4		3	1	
	8	校内の教員との会話		随時	7	1			2	1	4	1	
⑦口コミ	1	自校関係者以外の種々の人々からの情報		随時	1					1			
	7	学校図書館関係者の口コミ		随時	7				1	1	4	1	

*[選択肢]は、それぞれ以下の意味を表す。

「選書種別」の選択肢：当該情報源で選書する資料の種別を表す

(1)授業・学習用資料と読書材のどちらも／(2)授業・学習用資料／(3)読書材／(4)その他

「使用頻度」の選択肢：当該情報源を使う頻度を表す

(1)刊行の都度、必ず使う／(2)ときどき使う(使わない時もある)／(3)必要な時だけ使う／(4)その他

①図書館業務支援システム

図書館業務支援システム「TOOLi-S」を学校図書館に導入している学校は6校であった。“日常的に分類・刊行年月で検索し、チェックをしている”(E校)、“新着資料のデータ登録に利用している”(J校)など、日常的にデータ整備と共に利用されている。

⑤生徒

「生徒からのリクエスト」は、全9校が挙げた。学校のカリキュラムとして、生徒にレポート作成を課している学校も多いことから、6校が、「生徒が作成したレポートの参考文献、注記」を挙げている。参考文献に挙げられた資料については、“蔵書になく入手できるものは購入する”と4校が回答した。

⑥教員

教員も大切な情報源で、どの学校でも「教員からのリクエスト」の重要性が認識されて

いる。

⑦ 口コミ

「学校図書館関係者からの口コミ」、「自校の関係者以外の様々な人々からの情報」を合わせて、8校が口コミを情報源にしている。

3.4 考察：学校図書館のコレクション形成に影響を与える志向性

訪問調査と補足調査によって、各館の状況及び担当者の考え方、影響を与えている授業・イベント、資料選定で用いる情報源等、学校図書館のコレクション形成に関する事例を明らかにすることができた。調査前に立てた仮説では、資料選定に関して各校に共通して見られる手法があり、それが学校図書館における資料選定のベスト・プラクティス（最も効率的・効果的な手法）に相当するのではないかと考えていた。しかし、調査結果を俯瞰すると、学校図書館のコレクション形成は、学校の教育方針や学校での使われ方など図書館が置かれた状況に応じてなされているため、実際の手法は学校ごとに様々であり、どの学校図書館にも当てはまる単一の特徴や傾向は見出せないことが分かった。

しかしながら、結果の考察を進める中で、学校図書館のコレクション形成に影響を与えている要因を複数にまとめることができた。この要因を“志向性”として整理したのが、下記表 3-4 である。志向性とは、コレクション形成や資料選択の背景にある、調査対象校の学校図書館担当者の意識（コレクション形成をする上で目指していること、意識していること）である。この志向性をまとめるに当たっては、インタビュー調査（第 5 章）の中で、学校図書館担当者に中間報告案を示し、各人の認識との相違等について尋ねた。下記の志向性は、そこで得られた意見を反映させたものである。「志向性」の分類は相互に排他的でないなどの問題はあるが、学校図書館の担当者が自校のコレクション形成を振り返る際の判断の枠組みとして使用可能だと考えられるため、本調査の結論として、あえてここで提示したい。

下記の五つの志向性は、実際の学校図書館と一対一に対応する事項ではなく、学校の教育方針や図書館の使われ方などに応じて複数の事項が様々な比率で組み合わせられて（例：志向性 i 50% + 志向性 ii 25% + 志向性 v 25%）、各校のコレクション形成に影響を及ぼすものだと考えられる。

なお、今回の調査校は中高一貫校も含まれているが、ここでは、報告書の主対象である中学校を意識した整理を行っている。さらに、下記表以外の要因として、生徒の性別の違い（男子校／女子校／共学校）も大きいと考えられるが、整理の焦点を担当者の意識に絞るために、表には含めなかった。

表 3-4 学校図書館のコレクション形成に影響を与える五つの志向性

<p><志向性 i> 利用者ニーズの重視</p> <p>生徒や教員の要求を重視する志向性。志向性 ii～vとは異なり、全調査校に見られた意識で、学校図書館における基礎的志向性と考えられる。この志向性には、生徒や教員の資料リクエスト（顕在化した要求）への対応だけでなく、彼らが持つ曖昧な情報要求や学校カリキュラム（潜在的な需要）への対応も含まれる。ただし、資料リクエストに応えるやり方や潜在的な需要の掘り起こしを行っているか否かなど、具体的な対応レベルは各校の方針や予算規模によって異なる。</p> <p>【調査結果に表れた事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料選定に当たって、生徒のリクエスト、教員のリクエスト、生徒や教員への図書希望調査（欲しい資料名を聞くアンケート）を用いる。 ・図書館を使う教員の授業に必要な資料を揃えることを重視する。 ・資料選定の際、新刊書誌を図書委員会（司書教諭の他、管理職や教科教員で構成）に回覧し、要望のあった資料は原則として購入する。 ・資料選定の情報源として、生徒が作成したレポートの参考文献、教科書、授業シラバスを用いる。
<p><志向性 ii> 読書材提供の重視</p> <p>カリキュラムに限定されない、楽しみのための読書で用いる資料群（読書材）を重視する志向性。特に、国公立校の担当者に強く見られた。</p> <p>【調査結果に表れた事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読書材の収集を重視し、その選定に当たっては、本を通読して購入有無を判断している。 ・公共図書館の児童サービスでよく用いられている情報源（『子どもの本 この一年をふりかえって』、東京子ども図書館や教文館ナルニア国の出版物）に信頼を置く。児童文学評論家の書評を参考にする。 ・資料選定の情報源として、公共図書館のヤングアダルト向けウェブ・サイトを用いる。
<p><志向性 iii> 情報リテラシー育成への貢献</p> <p>情報リテラシー育成に資することを意識する志向性。情報リテラシー関連の授業を行っている担当者に強く見られた。</p> <p>【調査結果に表れた事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料選定に影響を与えている、情報リテラシー関連の授業がある。 ・図書以外のメディアの選択を意識している。 ・資料のデータ整理（OPACへの件名・キーワード付与）を重視する。
<p><志向性 iv> 大人の読書への橋渡しの意識</p> <p>公共図書館の成人サービスへの橋渡しを意図する志向性。全ての調査校で見られたが、特に国公立校で強く見られる。この志向性を広く捉えると、シチズンシップ（市民性）の育成に資する意識も含まれる。</p> <p>【調査結果に表れた事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童書から成人資料（一般書）まで、幅広いレベルの資料を集めることを重視する。 ・一般書の選定の情報源として、一般紙・雑誌の書評欄を用いる。
<p><志向性 v> 大学教育への知的継続性</p> <p>大学教育（特に、そのうちの教養教育）につながるコレクションを意識する志向性。全校ではなく、私立校で見られた志向性。（志向性 iv よりも）学術色の強い資料を重視する。</p> <p>【調査結果に表れた事例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選書の情報源として、大学図書館の到着情報を用いる。 ・岩波文庫や岩波ジュニア新書を全点購入している。

4. 蔵書データから見る共通する資料群と学校図書館の特徴

4.1 学校図書館の蔵書分析

(1) 分析調査の概要

コレクション形成や資料の選定が意識化されており、かつ充実した図書館活動を行っている学校図書館を対象に「学校図書館事例調査」を実施した（第3章参照）。その調査で対象とした学校図書館等から、平成24年10月に、ほぼ全ての蔵書目録データ（以下、「蔵書データ」という。）の提供を受けて「学校図書館の蔵書データの分析調査」を行った。この調査の目的は、第一に、国際子ども図書館の「調べものの部屋」のコレクション形成の参考に資するために学校図書館コレクションの核となる資料群（学校図書館の基本図書リスト）を明らかにすることであった。調査開始当初、調査対象館（後述）全てが所蔵するタイトルを明らかにすることで、核となる資料群を明らかにできるのではないかと考えていたが、調査の結果、対象館全てに共通するタイトルは少なく、また、実務者インタビュー調査（第5章）の結果、それらのタイトルがいわゆる基本図書には当たらないことが学校図書館の担当者から指摘された。そこで、第二の目的として学校図書館の蔵書の傾向を明らかにすることを設定し、蔵書分析を通じて、データの提供を受けた学校図書館の蔵書の特徴や、ある2館の間の資料的な近さ（蔵書の類似度）なども分析の対象とした。

調査対象となる13館の概要（事例調査の結果）を表4-1に示した。各数字の説明は第3章28ページを御参照いただきたい。

なお、第3章の[公立共学中学A]に関しては、事例調査の対象館だけでなく、同じ自治体の他の4つの中学校の学校図書館からも蔵書データの提供を受けた。しかし、そのうち1館分については、蔵書データの一部が欠損しており他館のデータと同様に扱うことができなかつたため、対象から外した。したがって、本調査の対象は（[公立共学中学A]と合わせて）同じ自治体の学校図書館4館となった。これらの学校図書館を同じ自治体の別の館であることを示すため、第3章で[A]と記号化していた学校を[A-1]とし、他の学校を[A-2]、[A-3]、[A-4]と記号化した。

表 4-1 調査対象館の概要

学校	生徒数	図書館 の対象	蔵書数	1人あたり 冊数	貸出数
	【概数】		(図書のみ)	【概数】	(/年) 【概数】
公立共学中学 A-1	450	中	13,000	29	6,000
公立共学中学 A-2	500	中	10,000	20	7,200
公立共学中学 A-3	300	中	不明 (未回答)		4,800
公立共学中学 A-4	140	中	不明 (未回答)		3,600
公立共学中学 B	500	中	17,000	34	20,000
国立共学中学 C	480	中	22,000	46	12,200
私立共学中学 D	600	中	55,000	92	20,000
私立男子中学 E	720	中	32,000	44	23,000
私立女子中学 F	350	中	28,000	80	10,000
私立共学 IS・中高一貫 G	450/700	幼～高	69,000	99	6,000
私立共学中高一貫 H	2,000	中高	41,000	21	40,000
私立男子中高一貫 I	1,800	中高	82,000	46	11,000
私立男子中高一貫 J	1,100	中高	79,000	72	14,000

表 4-1 について補足しておくとして、[私立共学 IS・中高一貫 G] の蔵書数は約 69,000 冊であるが、これには洋書約 29,000 冊、視聴覚資料約 1,000 件が含まれている。本調査では、G 校からは洋書等の蔵書データの提供を受けなかったため、G 校は、洋書、視聴覚資料等を除く日本語図書約 39,000 冊分のデータを分析の対象としている。

(2) 今回の調査の意義と限界

従来の蔵書分析は、多くの場合、チェック・リストを用いた小規模なサンプリングによる所蔵調査であった。しかし、どの図書館に対しても有効かつ適切なチェック・リストを作成することは非常に難しい。また、小規模なサンプリングでは、蔵書の特徴づける重要な資料がカバーできない恐れもある。

一方で、近年、図書館の多くが OPAC をウェブ上で公開するようになり、ウェブ上の OPAC を検索して蔵書データを抽出することで、蔵書全体を対象とした大規模な所蔵調査が実施できるようになった。ただし、OPAC 検索によって蔵書データを抽出する手法の所蔵調査には、検索に用いる網羅的な資料リストが必要である。全出版物を網羅したリストは（日本全国書誌などそれに近いものはあっても）存在しないし、また、OPAC に対する負荷を考慮したときに、全出版物を対象とした調査の実施は難しい。そのため、一定期間に刊行された出版物を対象とした調査¹や、特定ジャンルを対象とした調査²が行われてきた。

今回の蔵書データの分析調査では、OPAC 検索でデータを抽出する形ではなく、複数の学校図書館から提供を受ける形で、ほぼ全ての蔵書データを得た。これは、蔵書全体を対

1 大場博幸ほか「図書館はどのような本を所蔵しているか：2006 年上半期総刊行書籍を対象とした包括的所蔵調査」『日本図書館情報学会誌』 vol.58 no.3, 2012, pp.139-154.

2 小山信弥ほか「日本の大学図書館におけるマンガの所蔵状況」『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集』2012 年度, pp.33-36.

象としている点で、蔵書の一部しか対象としていなかった従来の調査とは異なる。

一方で、今回の分析の限界として、調査対象館は無作為に選択したわけではなく、全国の学校図書館の代表という面では問題がある。また、蔵書データの整理を行ってみた結果、データの同定をある程度の精度でしか行うことができなかった（後述）が、その点も大きな課題と言える。

4.2 蔵書分析の手順

調査対象の学校図書館から提供された蔵書データは書誌記述のデータ（以下、「書誌データ」という。）の精粗のレベルや形式が様々であったため、以下のような手順でデータの整理を行った。

(1) データ分析の前処理

今回、学校図書館から提供を受けた蔵書データは、図書館独自で入力しているものが多く、また、用いている OPAC のシステムによって出力形式が異なっていた。そのため、同一資料に対する書誌データを同定するためには、前処理としてデータの整理が必要となった。

データの整理で実際に行った処理手順は、以下のようなものである。

- ・ CSV 形式への統一：蔵書データは CSV 形式、TSV 形式、MS Excel 形式、Access 形式など様々な形式であったが、これを CSV 形式に統一した。
- ・ 文字コードの統一：多くの館の蔵書データが Shift JIS であったため、他の文字コードのデータについては Shift JIS に変換し、文字コードを揃えた。
- ・ データ項目の識別：独自形式の書誌データについては、区切り記号に基づいてデータ項目の識別を行った。
- ・ データ項目の統一：書誌データの項目が館によって異なっていたため、共通項目に揃えた（具体的には、著者名、書名、副書名、出版社、出版年、NDC 分類記号、ISBN、価格）。
- ・ 著者の統一：区切り記号を除去し、第一著者のみとした。
- ・ 巻号データの統一：シリーズ名において、ローマ数字、アラビア数字の全角半角、桁数の揃え方等、各蔵書データで様々であったのを半角アラビア数字に統一した。
- ・ データの修復：一部欠損や不適切な形式の箇所を修復した。
- ・ データの統合：1校の中で資料種別、管理種別によってデータが複数に分割されていた学校は、複本を考慮した上でデータを統合した。
- ・ データの削除：所蔵する視聴覚資料が明らかに識別できる館は視聴覚資料を削除した。

この処理の結果、各学校図書館の蔵書データ数は、次の表のとおりとなった。

表 4-2 調査対象校の蔵書データ数

学校	蔵書データ数	うち、ISBN ありデータ数
公立共学中学 A-1	10,503	8,560
公立共学中学 A-2	11,162	9,434
公立共学中学 A-3	10,422	7,870
公立共学中学 A-4	10,655	8,710
公立共学中学 B	16,241	15,137
国立共学中学 C	23,320	15,396
私立共学中学 D	52,653	0
私立男子中学 E	35,996	26,029
私立女子中学 F	28,404	612
私立共学 IS・中高一貫 G	39,109	0
私立共学中高一貫 H	44,468	34,147
私立男子中高一貫 I	69,646	35,663
私立男子中高一貫 J	72,905	15

ちなみに表 4-1 の蔵書数と表 4-2 の蔵書データ数は一致しない。原因としては、全てのデータが適切に同定・統合できたわけではない（後述）こと、視聴覚資料等を除いたこと等が挙げられる。

(2) データの統合

複数の図書館の蔵書を比較するためには、同一資料に対する書誌データを同定することが必要となる。書誌データの同定において、最も容易かつ有用なデータ項目は ISBN である。そこで、目録提供を受けた図書館のうち、ISBN が付与されている書誌データ数が最も多かった[私立共学中高一貫 I]のデータを基準とし、他の図書館のデータを追加する形でデータの統合を行い、分析用統合データを作成した。書誌データの同定及び統合において用いた手順は、以下のとおりである。

- ① 全ての書誌データにおいて、ISBN-13 は ISBN-10 に変換する。
- ② 分析用統合データ上の ISBN と比較する図書館のデータ上の ISBN が同じであれば、同じ資料として分析用統合データに追加館の所蔵（所蔵冊数）を追加する。
- ③ (ISBN で同定されなかったもののうち) 追加館のデータが、分析用統合データ上の書誌データと書名と同じで、かつ著者・出版社・出版年の三つのうちいずれかが空白でなく同じであった場合は、同じ資料として分析用統合データに追加館の所蔵（所蔵冊数）を追加する。
- ④ 同定された分析用統合データの書誌データに足りないデータ項目があった場合には、追加館の書誌データから当該項目の内容を追記する。
- ⑤ 追加館の書誌データのうち、同定されなかったデータを分析用統合データに追加する。
- ⑥ ②から⑤を、I 校以外の館のデータを使って、繰り返す。

なお、上記の手順で機械的にデータのマッチングを行って分析用統合データを作成した

結果、13館分の分析用統合データのデータ数は、異なりタイトルでカウントすると237,512点、また、その延べ資料数は425,484点であった。

なお、前述したように、ISBNがないデータは書名、著者名等を用いて同定を行っているため、ISBNでの同定と比較して必ずしも確実とは言えない。ここから、前掲した表4-2で「ISBNありデータ数」が多い図書館ほど、この後の蔵書分析の精度が高くなる、ということも補足しておく。

(3) 手作業による書誌分かれの同定

各館の蔵書データの作成や入力方法の違いから、機械的な同定には限界がある。特に、多巻ものの参考図書類については、書名や副書名、巻号の入力の仕方が様々であった。そこで、機械的に統合したデータに対して、参考図書類を中心に手作業で書誌分かれの統合を行った。

機械的に統合したデータでは異なりタイトル数が237,512点であったものを、500タイトル以上を手作業で統合した結果、異なりタイトル数は237,001点となった。以下の分析ではこのデータを用いる。

(4) 国立国会図書館目録からの書誌データの付与

各学校図書館では、その館の事情（例：職業調べで使う資料は特定の書架に集める）に従って、蔵書データを作成している。そのため、同じ資料であっても全く異なる日本十進分類法（以下、「NDC」という。）記号が付与されることがある。また、館によって書誌データの精粗のレベルが異なっていた。さらに、書誌事項が最小限しか分からないデータも数多くあった。そこで、共通したNDC記号と詳細な書誌データを入手するため、国立国会図書館の書誌データを参照した。国立国会図書館サーチへの負荷を考慮し、平成16年以前の出版物はJ-BISCのデータを、平成15年以降のものは国立国会図書館サーチの検索APIを用いた。

具体的な書誌データの付与手順は以下のとおりである。

- ① ISBNがあるデータはISBNを検索キーとして検索し、検索結果が返ってくれば国立国会図書館目録からデータを取得する。
- ② 書名（と出版年が判明しているデータについては出版年も）を検索キーとして検索し、国立国会図書館目録の検索結果の1件目を取得する。

統合データ237,001点のうち、J-BISCないし国立国会図書館サーチでヒットし書誌データを付与できたのは183,000点である。

国立国会図書館目録でヒットしなかったもの54,001点のうち、45,800点は所蔵館数が1館のみの資料であった。ヒットしなかったデータを目視で確認したところ、ヒットしなかった主たる原因としては、百科事典などの多巻資料で巻号数をきちんと処理できていなかった、非図書資料や学校作成資料（例：卒業アルバム）で国立国会図書館が所蔵していない等があった。

なお、これ以後のデータ分析においては、J-BISC ないし国立国会図書館サーチで書誌データが検索できた資料については国立国会図書館の書誌データを、ヒットしなかった資料については個々の図書館の書誌データを用いる。なお、ヒットしなかった資料のデータには、NDC のないものが 37,000 件近く含まれていた(詳しくは、61 ページの表 4-6 参照)。

(5) データに関する異なる集計方法

各館の蔵書データは、複本も含まれているため、「カバーしているタイトル数」、「所蔵館数」、「所蔵冊数」という 3 点から集計をしている。それぞれ観点の定義は以下のとおりである。

- ・カバーしているタイトル数：調査対象館のうち 1 館以上が所蔵するタイトルは何点か
- ・所蔵館数：調査対象館のうち、ある資料を所蔵しているのは何館か
- ・所蔵冊数：調査対象館全体で、ある資料を何冊所蔵しているか

「カバーしているタイトル数」については、調査対象とした 13 館全体でカバーしているタイトル群の特徴を明らかにするために集計している。また、複本をあまり持たない学校図書館では、「所蔵館数」と「所蔵冊数」は同じ値になることが多い。しかし、指定図書等の理由で複本がある場合は、ある資料の「所蔵館数」と「所蔵冊数」は大きく異なることになる。

(6) 重複率の算出とクラスター分析

学校図書館 2 館の間の蔵書の類似度を測定するために、蔵書を比較する尺度である「重複率」と「包含率」を用いた。

「重複率」は図書館の蔵書同士の重なりを示す指標であり、図書館評価の著作を多く発表している戸田³による先行研究と同様、以下の計算式のように図書館 i と図書館 j の所蔵資料の和集合に対する積集合の形で算出している。つまり、図書館 i と図書館 j において、いずれかの図書館が所蔵する資料群に対する、いずれの図書館も共通して所蔵する資料群の割合である。

$$\text{重複率 (所蔵}_i, \text{所蔵}_j) = \frac{\text{所蔵}_i \cap \text{所蔵}_j}{\text{所蔵}_i \cup \text{所蔵}_j}$$

「重複率」は、所蔵に対して Jaccard 係数⁴と同じ意味を持つ。ただし、「重複率」は比較する図書館の一方の規模がもう一方の規模よりも極端に大きい場合、値が低くなる傾向がある。例えば、大規模な図書館は小規模な図書館が所蔵する資料をほぼ全て持っているのに、前者が所蔵し、かつ、後者が所蔵しない資料の割合がそれより大きくなってしまいうために、両者の重複は少ないと判定される。

3 戸田あきら「蔵書の重複分析による公共図書館ネットワーク効果の研究」『図書館界』vol.47 no.1, 1995.5, pp.2-12.

4 Jaccard 係数とは、集合間の類似度を示す係数で、マーケット分析や情報システムにおける文書間の類似性判定など様々な分野で使われている。

上のような「重複率」の欠点を補完するため、今回は、以下の計算式のような「包含率」も算出している。なお、下記の Min とは図書館 i と図書館 j のうち、所蔵冊数が少ない図書館の所蔵冊数を意味する。

$$\text{包含率 (所蔵}_i, \text{所蔵}_j) = \frac{\text{所蔵}_i \cap \text{所蔵}_j}{\text{Min (所蔵}_i, \text{所蔵}_j)}$$

「包含率」は、所蔵が少ない館の所蔵冊数に対する重複冊数の割合となっている。これにより、規模の違いに起因する見かけ上の低い重複率を避けることができる。

また、最後に、蔵書の類似度を図示するためにクラスター分析⁵を行った。なお、クラスター分析とは、対象（今回の場合は各校の蔵書）の間に何らかの距離を定義し、その距離を用いて対象を集団にまとめる、つまりクラスター化することによって、潜在的な構造を明らかにするという分析法である。

(7) チェック・リストとの照合

『学校図書館基本図書目録 2011年版』⁶に掲載された中学校分 1,031 点や青少年読書感想文全国コンクール第 8 回（昭和 37 年）から第 59 回（平成 25 年）における課題図書リスト 743 点についても、識別できる範囲で蔵書データとの照合を行った。ISBN があるものに関しては ISBN を優先して照合し、それ以外については著者、書名、出版年で照合した。

ただし、課題図書リストには著者と書名しか書誌情報が含まれなかったため、著者と書名での照合も行った。課題図書は全集等に含まれる作品である場合も多く、図書の書名との照合を適切に行うことができないものが多く含まれていた。

4.3 蔵書分析の結果

(1) 共通する資料群（全体）

共通する資料群の特徴を分析するため、年代や主題を問わず、調査対象館全体で、所蔵館数や所蔵冊数が多いタイトル、著者、出版社の上位を集計した。

① 所蔵の多い（11 館以上所蔵）タイトル

表 4-3 は、所蔵が多いタイトルの上位を集計したものである。所蔵館数が同数のものの中は所蔵冊数順に並べた。

所蔵が最も多いタイトルは、調査を行った 13 館全てで所蔵が確認された『13 歳のハローワーク』、『きみの友だち』、『素数ゼミの謎』であった。それぞれが、以前に話題になったタイトルである。『13 歳のハローワーク』は、出版社から全国の学校図書館への寄贈があったタイトルである。同様に寄贈があった『ニッポンの嵐』も、調査対象館のうち 9 館が所蔵していた。課題図書として取り上げられることが多い、『沈黙の春』、『あのころはフリードリヒがいた』などのタイトルは 1 館当たりの所蔵冊数、つまり複本も多い。

5 クラスター分析の手法には Ward 法を用いた。なお、距離係数には蔵書同士の重複率を 1 から減算したものをを用いた。

6 全国学校図書館協議会基本図書目録編集委員会編『学校図書館基本図書目録 2011年版』全国学校図書館協議会, 2011.

②共通する資料群の著者の上位 25 位

著者については、書誌データの制約から第一著者のみを集計した。延べ所蔵館数の多い著者の上位 25 位を表 4-4 に示す⁷。

延べ所蔵館数は、その著者の著作が延べ数で何館に所蔵されているかを示すが、結果として多くの著作を持つ著者が上位に来るのは当たり前である。そこで、カバーしているタイトル数、延べ所蔵冊数、1 タイトル当たりの平均所蔵館数（延べ所蔵館数をカバーしているタイトル数で除した数値）と、平均複本数（延べ所蔵冊数を延べ所蔵館数で除した数値）も算出した。

最も延べ所蔵館数が多い著者は、三毛猫ホームズシリーズの赤川次郎であった。ただし、表 4-4 から分かるとおり、赤川次郎は所蔵されている著作（カバーしているタイトル数）も多い。

1 タイトル当たりの平均所蔵館数は、『日本国勢図会』の矢野恒太記念会、ショートショート SF の星新一が多かった。どちらも、他に比べてカバーしているタイトル数は少ないが、多くの学校図書館が購入する著者（組織）であることが分かる。

なお、平均複本数が多い著者は、夏目漱石（所蔵館数の多い順では 33 位、平均複本数 1.72 冊）、手塚治虫（同 6 位、同 1.64 冊）、吉川英治（同 27 位、同 1.47 冊）であった。これらは、複本がよく購入される著者と言える。

③共通する資料群の出版社上位 25 位

表 4-5 は、調査対象館において延べ所蔵館数が多かった出版社を示している。ポプラ社や小学館、学習研究社など児童書出版に力を入れている出版社が目立つことが分かる。また、カバーしているタイトル数は講談社が多いにもかかわらず、延べ所蔵冊数は岩波書店が多いことにも気付く。ここからは、学校図書館は講談社よりも岩波書店から出版された資料の購入率が高い傾向があり、複本も多く購入していると推察される。なお、今回対象とした分析用統合データ全体で最も所蔵数が多い発行年の資料は平成 16 年のものである。『出版年鑑』によれば、平成 16 年の出版新刊点数の 1 位は講談社であり、岩波書店は 7 位である⁸。

表 4-3 所蔵の多いタイトル

所蔵館数	所蔵冊数	タイトル	著者	出版社	出版年
13	25	13 歳のハローワーク	村上龍	幻冬舎	2003
13	21	きみの友だち	重松清	新潮社	2005
13	14	素数ゼミの謎	吉村仁	文藝春秋	2005
12	28	いのちの食べかた	森達也	理論社	2004
12	24	沈黙の春	レイチェル・カーソン	新潮社	1974
12	22	世界を信じるためのメソッド：ぼくらの時代のメディア・リテラシー	森達也	理論社	2006

7 出版社が編集している図鑑等の資料については、書誌データの第一著者（責任表示）に出版社名が挙がっていることが多い。そのため、表 4-4 の著者には、出版社名も含まれている。

8 出版年鑑編集部編『出版年鑑 2005』出版ニュース社, 2005.

所蔵館数	所蔵冊数	タイトル	著者	出版社	出版年
12	18	ぼくを探しに	シルヴァスタイン	講談社	1977
12	16	化石	ポール・D.テイラー	同朋舎出版	1991
12	14	魔法使いハウルと火の悪魔	ダイアナ・ウィン・ジョーンズ	徳間書店	1997
12	13	鬼の橋	伊藤遊	福音館書店	1998
12	12	弟の戦争	ロバート・ウェストール	徳間書店	1995
11	41	あのころはフリードリヒがいた	ハンス・ペーター・リヒター	岩波書店	2000
11	29	塩狩峠	三浦綾子	新潮社	1968
11	24	西の魔女が死んだ	梨木香歩	新潮社	2001
11	22	クローディアの秘密	E.L.カニグズバーグ	岩波書店	2000
11	21	黒い雨	井伏鱒二	新潮社	2003
11	21	ごんぎつね	新美南吉	講談社	1986
11	19	ことばの力	大岡信	花神社	1978
11	19	盗賊会社	星新一	理論社	2003
11	19	高村光太郎	福田清人	新潮社	1984
11	17	詩のころを読む	茨木のり子	岩波書店	1979
11	17	黒い兄弟	リザ・テツナー	あすなる書房	2002
11	17	14歳からの哲学	池田晶子	トランスビュー	2003
11	16	声に出して読みたい日本語	齋藤孝	草思社	2001
11	16	ドリームバスター	宮部みゆき	徳間書店	2001
11	16	世にも美しい数学入門	藤原正彦	筑摩書房	2005
11	16	ダレン・シャン 2	Darren Shan	小学館	2002
11	15	ごみから地球を考える	八太昭道	岩波書店	1991
11	15	ローワンと魔法の地図	エミリー・ロッダ	あすなる書房	2000
11	15	ダレン・シャン 3	Darren Shan	小学館	2002
11	15	トラベリング・パンツ	アン・ブラッシュェアーズ	理論社	2002
11	14	ダレン・シャン 5	Darren Shan	小学館	2004
11	14	東京が燃えた日	早乙女勝元	岩波書店	1979
11	14	鉄道員	浅田次郎	集英社	1997
11	14	ダレン・シャン 4	Darren Shan	小学館	2002
11	14	夜明けの覇者	Darren Shan	小学館	2003
11	14	坂本竜馬	古川薫	小峰書店	2000
11	13	種をまく人	ポール・フライシュマン	あすなる書房	1998
11	13	みんなのなやみ	重松清	理論社	2004
11	13	グッドラック	アレックス・ロビラ	ポプラ社	2004
11	13	風が強く吹いている	三浦しをん	新潮社	2006
11	13	ダレン・シャン 1	Darren Shan	小学館	2001
11	13	夜の山道で	星新一	理論社	2002
11	13	南総里見八犬伝 第1の物語 (妖刀村雨丸)	滝沢馬琴 原	偕成社	2002
11	13	手塚治虫がねがったこと	斎藤次郎	岩波書店	1989
11	13	宇宙の男たち	星新一	理論社	2004
11	13	アブドラと空飛ぶ絨毯	ダイアナ・ウィン・ジョーンズ	徳間書店	1997
11	12	のはらうた	工藤直子	童話屋	1987

所蔵館数	所蔵冊数	タイトル	著者	出版社	出版年
11	12	100万回生きたねこ	佐野洋子	講談社	1986
11	12	一億百万光年先に住むウサギ	那須田淳	理論社	2006
11	12	いつでも会える	菊田まりこ	学習研究社	1998
11	12	裁き司最後の戦い	ラルフ・イーザウ	あすなろ書房	2001
11	12	センス・オブ・ワンダー	レイチェル・カーソン	新潮社	1996
11	12	温室デイズ	瀬尾まいこ	角川書店	2006
11	12	ひとしずくの水	ウォルター・ウィック	あすなろ書房	1998
11	12	ジョナサン	片川優子	講談社	2005
11	12	14歳からの仕事道	玄田有史	理論社	2005
11	12	さもないと	星新一	理論社	2003
11	11	天と地を測った男	岡崎ひでたか	くもん出版	2003
11	11	ローワンと黄金の谷の謎	エミリー・ロッド	あすなろ書房	2001
11	11	セカンド・ショット	川島誠	角川書店	2003
11	11	包帯クラブ	天童荒太	筑摩書房	2006
11	11	こどものためのドラッグ大全	深見埴	理論社	2005
11	11	数え方の辞典	飯田朝子	小学館	2004
11	11	ドリームバスター	宮部みゆき	徳間書店	2003

表 4-4 延べ所蔵館数の多い著者上位 25 位

順位	著者	延べ所蔵館数	カバーしているタイトル数	延べ所蔵冊数	1タイトル当たりの平均所蔵館数	平均複本数
1	赤川次郎	775	476	872	1.63	1.13
2	学研	745	329	871	2.26	1.17
3	司馬遼太郎	732	420	1,002	1.74	1.37
4	NHK 取材班	710	387	773	1.83	1.09
5	講談社	654	347	723	1.88	1.11
6	手塚治虫	535	277	876	1.93	1.64
7	旺文社	531	414	689	1.28	1.30
8	星新一	494	142	713	3.48	1.44
9	あさのあつこ	457	177	545	2.58	1.19
10	朝日新聞社	448	376	573	1.19	1.28
11	宮沢賢治	443	192	556	2.31	1.26
12	宮部みゆき	439	149	555	2.95	1.26
13	池上彰	429	226	524	1.90	1.22
14	石ノ森章太郎	404	140	551	2.89	1.36
15	東野圭吾	367	116	438	3.16	1.19
16	横山光輝	349	173	446	2.02	1.28
17	安野光雅	349	140	375	2.49	1.07
18	大岡信	335	179	428	1.87	1.28
19	重松清	328	115	466	2.85	1.42
20	井上靖	327	206	401	1.59	1.23
21	矢野恒太記念会	312	72	358	4.33	1.15
22	宗田理	300	142	400	2.11	1.33

順位	著者	延べ所蔵館数	カバーしているタイトル数	延べ所蔵冊数	1タイトル当たりの平均所蔵館数	平均複本数
23	村上春樹	296	125	409	2.37	1.38
24	アイザック・アシモフ	289	180	357	1.61	1.24
25	早乙女勝元	287	114	313	2.52	1.09

表 4-5 延べ所蔵館数の多い出版社上位 25 位

順位	出版社	延べ所蔵館数	構成比	カバーしているタイトル数	構成比	延べ所蔵冊数	構成比
1	岩波書店	29,156	8.3%	15,241	6.4%	34,419	8.4%
2	講談社	26,331	7.5%	16,389	6.9%	29,756	7.3%
3	新潮社	10,897	3.1%	6,414	2.7%	13,561	3.3%
4	筑摩書房	9,560	2.7%	5,924	2.5%	10,708	2.6%
5	ポプラ社	7,821	2.2%	4,015	1.7%	9,106	2.2%
6	小学館	7,296	2.1%	4,374	1.8%	8,681	2.1%
7	角川書店	7,001	2.0%	4,550	1.9%	8,428	2.1%
8	平凡社	6,936	2.0%	4,706	2.0%	7,845	1.9%
9	集英社	6,726	1.9%	4,473	1.9%	8,041	2.0%
10	中央公論社	5,582	1.6%	3,434	1.4%	6,408	1.6%
11	河出書房新社	4,568	1.3%	2,973	1.3%	5,127	1.3%
12	学習研究社	4,544	1.3%	2,776	1.2%	5,474	1.3%
13	偕成社	4,506	1.3%	2,303	1.0%	5,089	1.2%
14	日本放送出版協会	4,341	1.2%	3,077	1.3%	5,323	1.3%
15	岩崎書店	4,314	1.2%	2,340	1.0%	4,786	1.2%
16	朝日新聞社	3,860	1.1%	2,904	1.2%	4,720	1.2%
17	理論社	3,515	1.0%	1,599	0.7%	3,904	1.0%
18	文藝春秋	2,874	0.8%	1,737	0.7%	3,265	0.8%
19	PHP 研究所	2,703	0.8%	1,977	0.8%	2,844	0.7%
20	農山漁村文化協会	2,521	0.7%	1,419	0.6%	2,563	0.6%
21	中央公論新社	2,475	0.7%	1,688	0.7%	2,681	0.7%
22	ほるぷ出版	2,467	0.7%	1,247	0.5%	2,876	0.7%
23	角川グループパブリッシング	2,422	0.7%	1,567	0.7%	2,733	0.7%
24	早川書房	2,417	0.7%	1,968	0.8%	2,695	0.7%
25	小峰書店	2,221	0.6%	1,167	0.5%	2,729	0.7%

(2) 共通する資料群 (分類別)

主題別の特徴を得るために、NDC の類別に集計を行った。各類での共通する資料群について紹介する前に、統合された蔵書データ全体について、NDC 類別の構成比を表 4-6 に示した。

表 4-6 分析用統合データの NDC 類別のタイトル数とその構成比

NDC 類	タイトル数	構成比
総記 (0 類)	5,705	2.4%
哲学 (1 類)	10,197	4.3%
歴史 (2 類)	24,681	10.4%
社会科学 (3 類)	28,502	12.0%
自然科学 (4 類)	23,321	9.8%
技術 (5 類)	13,334	5.6%
産業 (6 類)	6,990	2.9%
芸術 (7 類)	25,210	10.6%
言語 (8 類)	7,848	3.3%
文学 (9 類)	54,540	23.0%
NDC なし	36,673	15.5%
総計	237,001	100.0%

全体として 9 類 (文学) の資料が多く、ほぼ 4 分の 1 の 23% が 9 類である。そして、それに 3 類 (社会科学)、7 類 (芸術)、2 類 (歴史) が続いている。

以下、NDC の各類別に所蔵上位タイトルを集計した。なお、集計の性格上、NDC が付与されていないタイトル (表 4-6 の「NDC なし」) は集計から外れるが、所蔵館数が 9 館以上のタイトルに関しては全て NDC が付与されていたので、上位タイトルを確認するには問題ないと思われる。

13 館中 11 館以上が所蔵している、ほぼ共通して所蔵されていると言える資料群は 65 タイトルであった。そのうち、類別に分析すると、文学 (9 類) が 46 タイトルであった。9 類の次に多かったのは自然科学 (4 類) で、5 タイトルと極端に減る。ほぼ共通して所蔵される資料群は 9 類に集中している。

類別に集計したもののうち、本報告書では調べものに特に関係すると思われる、社会科学 (3 類)、自然科学 (4 類)、技術 (5 類) に関して、所蔵館数が 9 館以上あった上位タイトルを表 4-7-1 から表 4-7-3 に示した。社会科学 (3 類)、自然科学 (4 類) と比べると、技術 (5 類) に関しては多くの図書館が所蔵するタイトルが少ないことが分かる。

表 4-7-1 社会科学 (3 類) の所蔵上位タイトル

タイトル	出版年	所蔵館数	所蔵冊数
13 歳のハローワーク	2003	13	25
14 歳からの仕事道	2005	11	12
こどものためのドラッグ大全	2005	11	11
政治家になるには	2002	10	13
バカの壁	2003	10	13
食べ物と自然の秘密	2003	10	11
子どもの人身売買	2008	10	11
盲導犬クイールの一生	2001	10	10
なぜ、おきたのか?	2000	10	10
さっちゃんのまほうのて	1985	10	10

タイトル	出版年	所蔵館数	所蔵冊数
不登校、選んだわけじゃないんだぜ!	2005	10	10
南の島へいこうよ	1991	9	18
世界国勢図会 2011	1985	9	16
豊かさのゆくえ	1990	9	13
ぼくは 13 歳職業、兵士。	2005	9	12
いかそう日本国憲法	1994	9	10
砂糖の世界史	1996	9	10
日本国憲法	2005	9	10
世界がもし 100 人の村だったら 3	2004	9	9
私は 13 歳だった	1996	9	9
気分はもう、裁判長	2005	9	9
服飾	1992	9	9
昔のくらしの道具事典	2004	9	9
ストリートチルドレン	2003	9	9

表 4-7-2 自然科学（4 類）の所蔵上位タイトル

タイトル	出版年	所蔵館数	所蔵冊数
素数ゼミの謎	2005	13	14
化石	1991	12	16
世にも美しい数学入門	2005	11	16
センス・オブ・ワンダー	1996	11	12
ひとしずくの水	1998	11	12
科学の考え方・学び方	1996	10	12
花	1994	10	12
植物	1990	10	11
驚異の小宇宙・人体 2	1994	10	10
数の悪魔	1998	10	10
今森光彦昆虫記	1988	10	10
宇宙のかたちをさぐる	1988	10	10
魚類	1991	9	16
せいめいのれきし	1965	9	14
ぼくらはガリレオ	1987	9	13
ツルはなぜ一本足で眠るのか	1984	9	12
科学の先駆者たち	1985	9	12
解剖学教室へようこそ	1993	9	12
エイズと STD(性感染症)	1992	9	11
宇宙のドラマ	1985	9	11
世界で一番いのちの短い国	2002	9	10
楽しい気象観察図鑑	2005	9	10
驚異の小宇宙・人体：脳と心 2	1993	9	10
タバコってなんだろう	1992	9	9
和算	2006	9	9
ジュニアダイエット	2006	9	9

タイトル	出版年	所蔵館数	所蔵冊数
ミジンコはすごい!	2006	9	9
海中記	1995	9	9
小さな博物誌	1991	9	9
生命とはなんだろう	1987	9	9
世界一おいしい火山の本	2006	9	9

表 4-7-3 技術（5 類）の所蔵上位タイトル

タイトル	出版年	所蔵館数	所蔵冊数
ごみから地球を考える	1991	11	15
わかもとの知恵	2001	10	10
チェルノブイリから広島へ	1995	9	10
船	1992	9	10

(3) 共通する資料群（参考図書類）

①参考図書類：タイトル別（版単位）

参考図書と考えられるタイトルに関して、所蔵が多いタイトルを所蔵館数が 9 館以上まで挙げたのが表 4-8 である。なお、今回は、参考図書の書名に多く用いられる言葉（例：事典、辞典、百科、年鑑）で分析用統合データを検索し、ヒットしたものの中から、主たる利用が調べものであると判断できるタイトルを参考図書類として集計した。

表 4-8 参考図書類の所蔵館数上位タイトル

タイトル	出版社	所蔵館数
数え方の辞典	小学館	11
ギネス世界記録 2006	ポプラ社	10
日本国勢図会 2010	矢野恒太記念会	10
日本国勢図会 2011	矢野恒太記念会	10
ギネス世界記録 2007	ポプラ社	9
ギネス世界記録 2011	角川グループパブリッシング	9
昔のくらしの道具事典	岩崎書店	9
朝日ジュニア学習年鑑 2009	朝日新聞出版	9
まるごとわかる「モノ」のはじまり百科 1	日本図書センター	9
世界国勢図会 2002	矢野恒太記念会	9
世界国勢図会 2011	矢野恒太記念会	9
日本国勢図会 2009	矢野恒太記念会	9
ジュニア朝日年鑑 1999	朝日新聞出版	9

表からは 13 館全てが所蔵する参考図書タイトルはないことが分かる。ただし、『日本国勢図会』『ギネス世界記録』などのように、対象年だけが異なるタイトルが多くあった。

②参考図書類：著作別

9 館以下所蔵の参考図書リストを見ると、巻号や版次が異なるだけのタイトルが数多くあった。そこで、書名を使って名寄せをして、対象年・巻号・版次が異なるものをまとめ、

(版単位ではなく) 著作単位による上位リストも作成した。そのリストが、表 4-9 である。

表から分かるとおり、著作単位では、『広辞苑』『ギネス世界記録』『日本国勢図会』『世界国勢図会』『朝日ジュニア学習年鑑』といったよく知られた参考図書が、全ての図書館で所蔵されていることが明らかとなった。これらの資料は版次、年次等を外せば、少なくとも 1 冊はどの学校図書館も所蔵していると言える。資料購入費が潤沢にない場合が多い学校図書館の現状を踏まえると、学校図書館では、参考図書に関して、旧版を所蔵していれば、(最新版の購入ではなく) 他の資料の購入を優先していると推察される。

表 4-9 所蔵館数の多い参考図書 (著作単位)

タイトル	出版社	所蔵館数
ギネス世界記録	ポプラ社 など	13
日本国勢図会：日本がわかるデータブック	矢野恒太記念会	13
世界国勢図会：世界がわかるデータブック	矢野恒太記念会	13
朝日ジュニア学習年鑑	朝日新聞出版	13
広辞苑	岩波書店	13
日本のすがた：表とグラフでみる社会科資料集	矢野恒太記念会	12
数え方の辞典	小学館	11
世界大百科事典	平凡社	11
教科書にでる人物学習事典	学習研究社	11
総合百科事典ポプラディア	ポプラ社	10
どの本で調べるか：中学生のための図書館活用ブックガイド	リブリオ出版	10
植物の生態図鑑 (大自然のふしぎシリーズ)	学研教育出版	10
世界各国地理：データブック (岩波ジュニア新書)	岩波書店	10
食材図典：FOOD'S FOOD	小学館	10
元素の小事典 (岩波ジュニア新書)	岩波書店	10
原色日本海岸動物図鑑 (保育社の原色図鑑シリーズ)	保育社	10
データでみる県勢：日本国勢図会地域統計版	矢野恒太記念会	10
昔のくらしの道具事典	岩崎書店	9
楽しい気象観察図鑑	草思社	9
現代用語の基礎知識 学習版	自由国民社	9
日本史モノ事典	平凡社	9
世界で一番美しい元素図鑑	創元社	9
生命とはなんだろう：新しい生物学の小事典 (岩波ジュニア新書)	岩波書店	9
世界全地図：ライブアトラス	講談社	9

(4) 調査対象館の蔵書の特徴

調査対象館の蔵書の特徴を、規模、資料の新しさ、専門性、『学校図書館基本図書目録』と読書感想文の課題図書の所蔵状況等から明らかにするため、全体と NDC の類ごとの集計を行った。

① 全体的な集計

表 4-10 は、調査対象 13 館の各蔵書を対象として、所蔵タイトル数、所蔵冊数、出版年の中間値、ページ数・大きさ・価格の平均値について、集計を行ったものである。

所蔵冊数が表 4-2 の蔵書データ数よりも若干少ないが、これはデータの手作業による整

理や同一資料の同定といった処理を経る中で、他のデータとの統合や一部のデータを除去した結果である。

調査対象館の中では蔵書の規模が大きい[私立男子中高一貫 I]は、出版年の中央値が他の図書館と比較して古い。I校には、従来、書架に余裕があり、除籍を行ってこなかったという事情があり、古い資料を多く所蔵していることが表れている。また、I校では、所蔵資料の平均ページ数は最も多く、平均単価も最も高額である。このことは、単価が高い専門書の類を多く所蔵していることを示唆している。

資料の平均単価に関しては、上位5位(D、E、F、I、J)までは全て私立学校であり、下位4位(A-2、A-3、B、C)までは全て公立学校である。ただし、資料の平均単価は、少数の高額資料に影響を受けるため、全体的な傾向であるかどうかの判断は難しい。

表 4-10 調査対象館の蔵書の特徴(全体)

学校	所蔵 タイトル数	所蔵冊数	出版年 (中央値)	ページ数 (平均)	大きさ[cm] (平均)	価格[円] (平均)
公立共学中学 A-1	8,381	9,676	1998	192.0	22.2	1725.9
公立共学中学 A-2	8,949	10,461	1998	188.7	22.2	1675.1
公立共学中学 A-3	8,120	9,486	1996	202.4	21.9	1577.3
公立共学中学 A-4	7,896	9,673	1997	180.4	22.7	1773.2
公立共学中学 B	14,830	16,128	2003	207.8	21.2	1528.7
国立共学中学 C	19,100	21,214	1999	242.2	19.6	1490.0
私立共学中学 D	36,506	50,275	2001	256.8	20.9	2164.0
私立男子中学 E	31,331	33,779	1997	251.7	21.0	2158.5
私立女子中学 F	22,599	25,656	1998	197.5	21.8	1789.3
私立共学 IS・中高一貫 G	28,525	31,382	1993	229.1	20.8	1730.3
私立共学中高一貫 H	38,786	43,704	2001	242.5	20.2	1698.4
私立男子中高一貫 I	56,987	65,968	1989	285.1	20.6	2466.0
私立男子中高一貫 J	61,855	71,421	1997	269.7	19.9	1974.3

②基本図書目録、課題図書リスト掲載タイトルの所蔵状況

学校ごとに、全国 SLA の『学校図書館基本図書目録 2011年版』(以下、『基本図書目録』という。)に掲載された中学校分 1,031 点や青少年読書感想文全国コンクール第 8 回(昭和 37 年)から第 59 回(平成 25 年)における課題図書リスト 743 点について所蔵タイトルと照合し、集計を行った結果を表 4-11 に示す。

表 4-11 学校図書館基本図書目録及び課題図書の掲載タイトルの所蔵状況

学校	所蔵 タイトル数	学校図書館基本図 書目録のタイトル数	読書感想文課題 図書のタイトル数	基本図書目録+ 課題図書のタイトル数
公立共学中学 A-1	8,381	111	82	193
公立共学中学 A-2	8,949	83	89	172
公立共学中学 A-3	8,120	72	88	160
公立共学中学 A-4	7,896	57	68	125
公立共学中学 B	14,830	120	81	201

学校	所蔵 タイトル数	学校図書館基本図 書目録のタイトル数	読書感想文課題 図書のタイトル数	基本図書目録+ 課題図書のタイトル数
国立共学中学 C	19,100	88	77	165
私立共学中学 D	36,506	204	74	278
私立男子中学 E	31,331	220	90	310
私立女子中学 F	22,599	198	74	272
私立共学 IS・中高一貫 G	28,525	147	93	240
私立共学中高一貫 H	38,786	196	130	326
私立男子中高一貫 I	56,987	54	44	98
私立男子中高一貫 J	61,855	147	134	281

全体として、『基本図書目録』や課題図書リストに関して、ほとんどの学校図書館では蔵書規模が大きくなるにつれ、所蔵タイトル数も多くなる傾向があった。この関係を、横軸に所蔵タイトル数、縦軸に『基本図書目録』と課題図書リストに掲載されたタイトルに関する所蔵数をとって散布図として図示したのが、図 4-1 である。全体として右肩上がりの分布となっている。しかし、[私立男子中高一貫 I]は、蔵書規模が調査対象館の中で上位 2 位にあるにもかかわらず、『基本図書目録』や課題図書リストに掲載されたタイトルの所蔵が最も少なかった。[私立男子中高一貫 I]は『基本図書目録』や課題図書リストによらない資料選択を行ってきたと推測される。

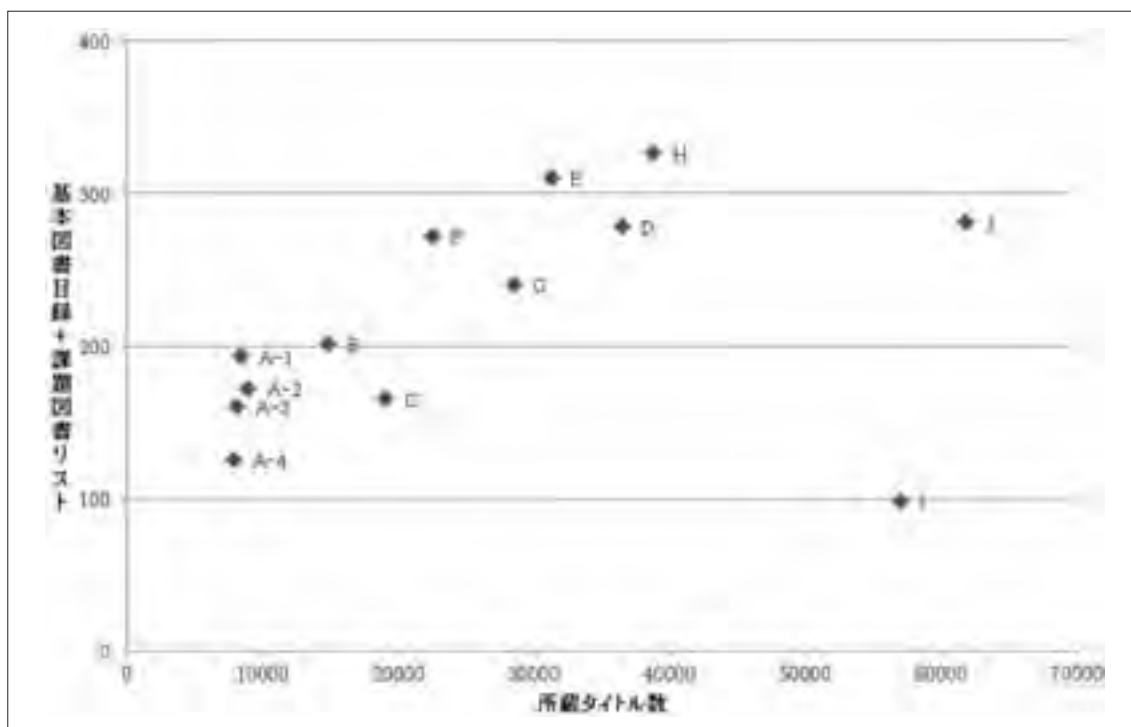


図 4-1 所蔵タイトル数と基本図書目録等の所蔵状況

③学校図書館別の集計

NDC が不明であったタイトルを除き、学校図書館別に、NDC 類ごとに、タイトル数や構成比、出版年の中央値等を集計したものを、表 4-12⁹⁾に示す。

各館の特徴全てに言及するのは難しいため、出版年の中央値に違いがあった、[公立共学

学 B] と[私立男子中高一貫 I] を比較してみたい。規模が小さく資料購入費が少ない B 校は読み物（9 類）中心の蔵書であった一方、I 校は 3 類の割合が 9 類に続いて高い。また、B 校の 9 類は、他の類に比べて新しい資料を、逆に I 校の 9 類は、他の類よりも古い資料を所蔵しているという傾向が見られた。

表 4-12 学校図書館ごとの蔵書の特徴

学校	項目	NDC 類									
		0 類	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類
公立共学 中学 A-1	タイトル数	162	246	849	780	820	418	194	941	174	2,632
	構成比	1.8%	2.7%	9.4%	8.7%	9.1%	4.6%	2.2%	10.5%	1.9%	29.2%
	出版年(中央値)	2000	1997	1997	2000	1997	1998	2001	1997	1997	2002
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012
	出版年(最小値)	1977	1956	1900	1949	1954	1939	1961	1949	1951	1948
公立共学 中学 A-2	タイトル数	201	206	953	851	819	455	189	1,073	189	2,614
	構成比	2.1%	2.2%	10.1%	9.0%	8.7%	4.8%	2.0%	11.4%	2.0%	27.7%
	出版年(中央値)	2000	1997	1995	2000	1997	2000	2000	1997	1997	2002
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2011	2012	2012
	出版年(最小値)	1972	1953	1958	1951	1948	1957	1956	1949	1955	1941
公立共学 中学 A-3	タイトル数	198	209	668	718	791	468	173	1,069	178	2,360
	構成比	2.2%	2.3%	7.5%	8.1%	8.9%	5.3%	1.9%	12.0%	2.0%	26.5%
	出版年(中央値)	2000	1999	1995	1999	1995	1999	2001	1996	1998	2000
	出版年(最大値)	2012	2011	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2013
	出版年(最小値)	1973	1955	1946	1953	1951	1950	1954	1949	1955	1948
公立共学 中学 A-4	タイトル数	168	153	603	778	752	449	195	1,043	174	2,127
	構成比	2.0%	1.8%	7.1%	9.2%	8.9%	5.3%	2.3%	12.3%	2.0%	25.0%
	出版年(中央値)	1999	2000	1996	2000	1998	2000	2003	1998	1997	1998
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2013	2012	2012
	出版年(最小値)	1956	1956	1958	1949	1948	1950	1956	1948	1948	1948
公立共学 中学 B	タイトル数	417	374	1,494	1,648	1,421	905	430	1,533	394	6,196
	構成比	2.8%	2.5%	10.1%	11.1%	9.6%	6.1%	2.9%	10.3%	2.7%	41.7%
	出版年(中央値)	2002	2003	2001	2002	1999	2002	2003	2000	2003	2005
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012
	出版年(最小値)	1952	1952	1949	1958	1948	1969	1980	1956	0	203
国立共学 中学 C	タイトル数	340	528	1,843	1,927	1,786	1,176	437	1,726	520	9,339
	構成比	1.7%	2.7%	9.4%	9.8%	9.1%	6.0%	2.2%	8.8%	2.6%	47.6%
	出版年(中央値)	2000	1999	1996	2000	1998	1999	2000	1998	2001	1999
	出版年(最大値)	2013	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2031
	出版年(最小値)	1975	1965	1941	1900	1952	1950	1960	1953	1953	203

9 なお、最小値に関して 8 類と 9 類の出版年の一部に外れ値（欠損値[0]や異常値[203]）がある。ここでは中央値を中心に分析を行い、最小値に関しては参考値としていたため、特に外れ値の除去は行わなかったためである。

学校	項目	NDC 類									
		0 類	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類
私立共学 中学 D	タイトル数	1,292	2,055	4,471	4,685	4,306	1,710	949	3,866	1,101	7,256
	構成比	3.4%	5.5%	11.9%	12.5%	11.5%	4.6%	2.5%	10.3%	2.9%	19.3%
	出版年(中央値)	2001	2000	2000	2003	2004	2005	2004	2002	1999	2000
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2013	2012	2012	2012	2013	2012	2031
	出版年(最小値)	1927	1923	1898	1922	1931	1939	1953	1929	1907	1893
私立男子 中学 E	タイトル数	1,343	969	4,714	3,204	4,086	1,784	952	4,218	1,978	8,368
	構成比	4.2%	3.0%	14.7%	10.0%	12.7%	5.5%	3.0%	13.1%	6.2%	26.0%
	出版年(中央値)	1987	1995	1993	1999	1998	2001	2000	1996	2001	1998
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012
	出版年(最小値)	1931	1932	1892	1950	1941	1949	1956	1942	0	203
私立女子 中学 F	タイトル数	372	661	2,129	2,250	2,058	1,648	657	2,180	611	4,453
	構成比	1.6%	2.9%	9.4%	9.9%	9.1%	7.3%	2.9%	9.6%	2.7%	19.6%
	出版年(中央値)	2001	1998	1998	2001	2001	2000	2001	1997	1999	1999
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012
	出版年(最小値)	1953	1954	1938	1949	1950	1949	1941	1950	1949	203
私立共学 IS・中高一 貫 G	タイトル数	649	1017	3437	3629	3350	1479	694	2398	1025	5556
	構成比	2.8%	4.4%	14.8%	15.6%	14.4%	6.4%	3.0%	10.3%	4.4%	23.9%
	出版年(中央値)	1994	1993	1993	1994	1993	1994	1994	1994	1993	1993.5
	出版年(最大値)	2010	2009	2010	2010	2012	2010	2010	2011	2010	2011
	出版年(最小値)	1964	1957	1948	1963	1952	1950	1974	1955	1956	1950
私立共学 中高一貫 H	タイトル数	1,052	2,232	3,471	4,995	4,953	2,673	1,981	4,409	1,076	11,935
	構成比	2.7%	5.7%	8.9%	12.8%	12.7%	6.8%	5.1%	11.3%	2.8%	30.5%
	出版年(中央値)	2000	1990	1993	2003	2003	2005	2007	2002	1999	1996
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012
	出版年(最小値)	1951	1926	1921	1900	1938	1900	1936	1900	1921	1885
私立男子 中高一貫 I	タイトル数	1,473	2,698	7,057	7,702	6,665	2,601	1,358	5,777	1,323	13,667
	構成比	2.6%	4.7%	12.3%	13.5%	11.7%	4.5%	2.4%	10.1%	2.3%	23.9%
	出版年(中央値)	1989	1989	1990	1993	1990	1992	1991	1990	1994	1985
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012
	出版年(最小値)	1937	1911	1892	1923	1940	1941	1910	1930	1886	1903
私立男子 中高一貫 J	タイトル数	1,473	3,128	7,271	8,615	5,832	3,212	1,892	5,883	2,614	15,793
	構成比	2.4%	5.0%	11.6%	13.8%	9.3%	5.1%	3.0%	9.4%	4.2%	25.3%
	出版年(中央値)	1998	1990	1993	1999	1998	2001	2001	1995	2001	1992
	出版年(最大値)	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012	2012
	出版年(最小値)	1900	1900	1899	1900	1900	1885	1937	1900	1927	1806
(参考)学校 図書館 メディア 基準*	中学校構成比	6%	3%	17%	10%	15%	6%	5%	8%	5%	25%
	中等教育学校 構成比	6%	9%	15%	11%	16%	6%	5%	7%	6%	19%

* 全国学校図書館協議会「学校図書館メディア基準」より、「標準配分比率」を抜粋。

また、全国 SLA の「学校図書館メディア基準」(メディア基準)と比較すると、(9 類の構成比が最も大きいという傾向を除くと) 同基準で示された配分比率に近い構成比を示す学校はなかった。この結果について、実務者インタビュー調査(第 5 章)で、対象館の学

校担当者にどう考えるか尋ねたところ、実際の資料選定はメディア基準の全体比率に基づいては行われておらず、各館の事情に応じてその都度（一点一点）行われている傾向があることが示唆された。

(5) 学校図書館の重複分析

重複分析では、13館の全図書館ペアに関して重複率と包含率を算出した。

重複率は、最も高い館同士でも16%程度であり、1%未満の館同士もあった。重複率が最も高いペアであった[公立共学中学A-1]と[公立共学中学A-2]、最も低いペアであった[公立共学中学A-4]と[私立男子中高一貫I]に関して、コレクションの規模と重なりをベン図で図4-2及び図4-3に示した。



図4-2 公立共学中学A-1とA-2のコレクションの重なり

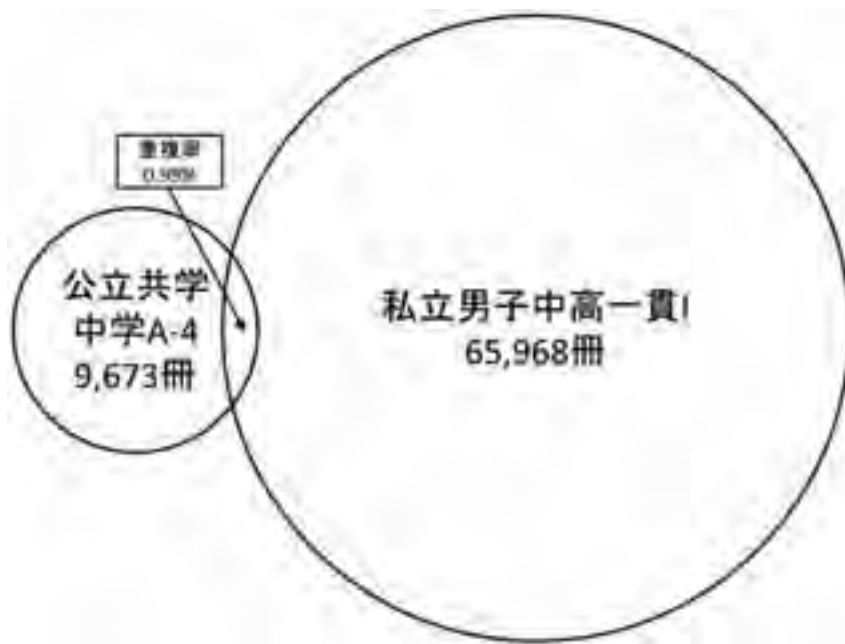


図4-3 公立共学中学A-4と私立男子中高一貫Iのコレクションの重なり

表4-13に、重複率の高い上位10位までの図書館ペアを挙げた。

同じ自治体内にある[公立共学中学A-1]から[公立共学中学A-4]までの学校図書館で重複率が高いことが分かる。A-1校からA-4校までのペアを除くと、重複率は10%未満となり、そのうち上位に来るのは、[公立共学中学B]と[国立共学中学C]のペア、[私立男子

中学 E] と[私立女子中学 F] のペアとなる。

包含率に関しても、A-1 校から A-4 校までの学校図書館の類似度が高いという結果となった。規模の大きい[私立男子中高一貫 I] や[私立男子中高一貫 J] ペアも上位に出てきたが、全体としては重複率と同様の傾向であった。

表 4-13 重複率の高い図書館ペア

学校①	学校②	重複率	包含率
公立共学中学 A-1	公立共学中学 A-2	16.0%	27.8%
公立共学中学 A-1	公立共学中学 A-3	15.2%	26.6%
公立共学中学 A-1	公立共学中学 A-4	14.5%	26.6%
公立共学中学 A-2	公立共学中学 A-3	14.4%	25.8%
公立共学中学 A-2	公立共学中学 A-4	13.7%	25.5%
公立共学中学 A-3	公立共学中学 A-4	13.7%	24.9%
公立共学中学 B	国立共学中学 C	9.3%	19.6%
私立男子中学 E	私立女子中学 F	8.6%	19.3%
公立共学中学 A-1	公立共学中学 B	8.0%	19.7%
公立共学中学 A-2	公立共学中学 B	7.9%	19.2%

次に、重複率に基づきクラスター分析を行った結果を、図 4-4 に示す。

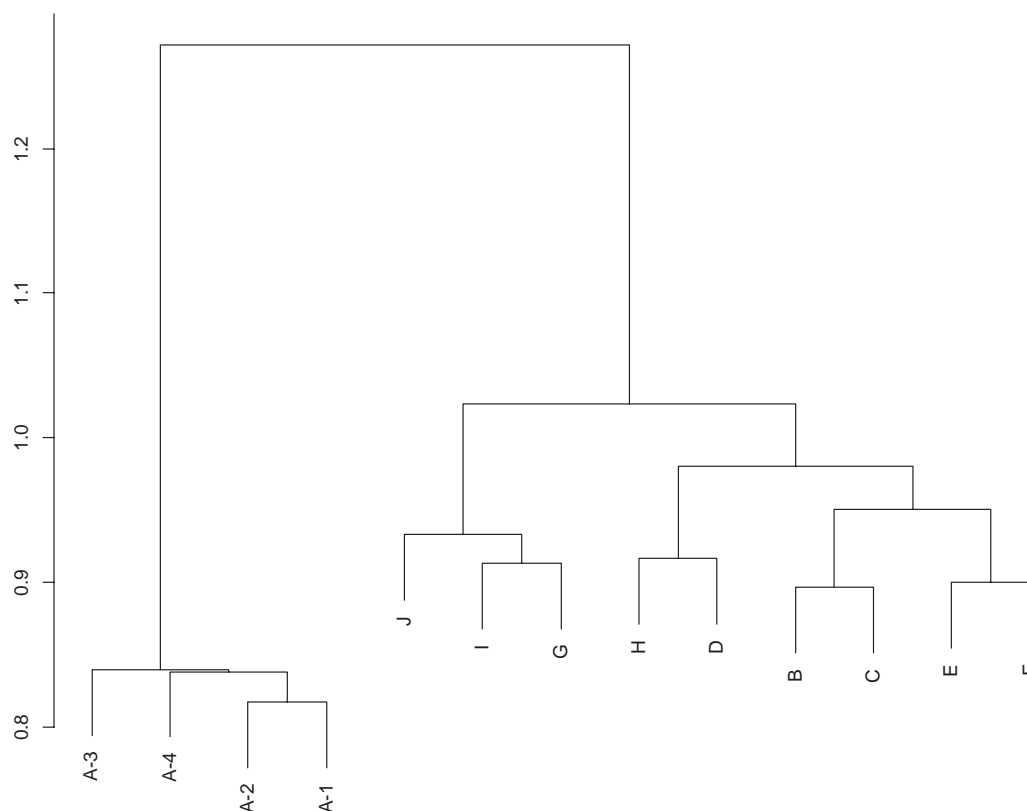


図 4-4 学校図書館コレクション同士の重複に基づくクラスター分析

図 4-4 を見ると、13 館が全体に大きく 2 つに分かれ、さらに[公立共学中学 A-1] から[公立共学中学 A-4] という同じ自治体の学校図書館が、他の図書館群と比較して、低い位置で

クラスターがまとまっていることが分かる。

これは、A-1校からA-4校の図書館群が、他の図書館群よりも類似性が高いことを示している。類似性が高い理由には、この自治体の学校図書館では、この自治体に設置されている学校図書館支援センターが積極的に活動し選書担当者の情報交換が活発に行われていること、また、資料を購入する際に複数館で一括購入していることなどが考えられる。また、全体的に、国公立同士、私立同士で固まる傾向にある。これには、調査対象とした図書館群では、私立学校の図書館は規模が大きいこと、公立学校の図書館は規模が小さく近隣の公共図書館との連携を前提とした資料群となっていること、といった理由が考えられる。

4.4 まとめ

事例調査で対象とした学校図書館等13館を対象として、学校図書館の中核となる資料群（学校図書館の基本図書リスト）を明らかにすることを中心に、ほぼ全ての蔵書データの提供を受けて蔵書分析を行った。しかし調査の結果、13館全てに重複するタイトルは限られており、したがって、「調べものの部屋」で揃えるべきと考えられる中核となる資料群も、(9類以外では)ほとんど特定できなかった。

ただし、参考図書に限って言えば、(タイトル単位ではなく)版次等をまとめた形(著作単位)で集計した時には、所蔵館数が多い資料群がはっきりと浮かび上がってきた(64ページ表4-9)。これは、予算がそれほど潤沢でない学校図書館の場合、参考図書のあるタイトルを1冊所蔵していれば、(最新版が出版されても)必ずしも最新版に更新しないという実情を反映していると推察される。

また、表4-9のリストは、本研究会の委員の青山氏(関西学院千里国際中等部・高等部司書教諭)によれば、学校図書館における参考図書の基本図書に近い可能性があるという。そのことを踏まえても、表4-9に限って言えば、「調べものの部屋」の参考図書コレクションを作っていく土台として用いることができ、学校図書館においても参考図書を選書する際の参考リストとして使用できるであろうと考えられる。

5. 学校図書館実務者へのインタビュー ：中学校に適したコレクション形成とは

5.1 インタビュー調査の概要

(1) 調査の目的・方法

学校図書館の実務者が持つコレクション形成に関する暗黙知を探るために、学校図書館事例調査（第3章）の対象館の担当者に対して、グループ・インタビューを行った。学校図書館（特に中学校図書館）の実際の調べものの支援にはどのような方法があり、それを可能とするコレクションはどのようなものなのかについて、各学校でコレクション形成に深く関わってきた実務者の方々に意見を聞いた。実務者の方々の勤務校は、公立・私立、男子校・女子校・共学校、中学のみ・中高一貫など学校の設置の形態は異なるが、そうした違いがある中でも、充実した学校図書館活動を行う教職員の共通する認識を探ることとなった。

本調査を実施するに当たり、中高生向け「調べものの部屋」の開室準備に資するという観点から国際子ども図書館職員が持っていた問題意識は、次のようなものである。

- ・中高生を対象とした読書及び調べもの支援の図書館サービスがどのように行われているか。
- ・義務教育を終えた高校生は大人向けの一般書も使うことができるが、小学生と高校生の中間に当たる中学生に一般書は難しいと思われる。彼らのためにどのような資料を選択すべきか。また、中学生に使いやすいように図書館として工夫すべきところは何か。

調査は、近畿圏の学校図書館実務者5名へのインタビューと首都圏等の学校図書館実務者6名へのインタビューの2回に分けて実施した。インタビューは、半構造化インタビューの手法を取った。これは、おおまかな質問事項を事前に用意しておくが、インタビュー中は質問事項への回答に縛られず、参加者同士の会話の流れを活かして発展的に質問事項を深めていくという質的調査法である。インタビューでは2回とも同じ質問事項を用いた。

本章では、まず2回のインタビューの議論に共通して登場した論点について整理する。その上で、近畿圏・首都圏等のそれぞれのインタビューについて要旨を示す。要旨で示した個々人の意見は、各実務者が持つ暗黙知そのものと考えられる。各校の事情や個人の経験に基いた暗黙知は、一見それぞれの状況を反映して学校図書館の多様性を示しているが、考え方としては共通するものがあり、同じ課題を持つ者にとって大きな示唆が得られる貴重な情報だと思われる。そして、この要旨に続いて、両インタビューから見えてきた実務者に共通する知見を、中学校の学校図書館のコレクション形成の留意点としてまとめる。

また本章では、最後に、インタビューの議論を深める参考情報として、生徒がよく取り上げる自由研究テーマ¹（後述）について事例を示し考察する。生徒がよく取り上げる自由研究テーマは、学校図書館のコレクション形成に影響を与える要因の一つとして両インタビューで指摘があったもので（後述）、その事例を知ることは、具体的なコレクションを考える上で有用であろう。

(2) インタビューの要点

インタビューでは、最初に学校図書館事例調査（第3章）及び蔵書データの分析調査（第4章）のインタビュー実施時点での結果を提示し、それについて参加者の意見を聞くことによって、学校図書館コレクションの在るべき姿について議論した。この議論において、2回のインタビューに共通する話題には、以下のような事項があった。

<中学生の特性について>

- ・「中学生」という年齢層の子どもたちの言語的・心理的特性
- ・自由な探究学習で生徒が選ぶテーマの傾向

<指導の留意点について>

- ・資料の提示方法や、利用のさせ方、テーマ設定や情報の取り出し方の指導
- ・授業での図書館や図書館資料の効果的な利用法（一斉授業と調べ学習・探究学習の違いを含む）を一般教員に浸透させるために、学校図書館担当者（司書・司書教諭）ができること。教科教員との協働の仕方

<コレクション形成の留意点について>

- ・中学生に適した資料の出版状況
- ・上記のような生徒の特性と指導の留意点を踏まえたコレクション形成の方法
- ・網羅的コレクションと生徒がよく取り上げる自由研究テーマ（後述）に関する図書の収集
- ・年齢・言語レベルに適した中学生向け図書と一般書（利用指導の工夫）

また、今回のインタビューでは、学校図書館のコレクションの在り方を議論するうちに、コレクション形成の話題だけでなく、国際子ども図書館に新設される「調べものの部屋」において、中高生の探究的な学習²に対してどのような支援活動を展開し得るかという議論に発展した。ここでは、経験のある実務担当者ならではの中学生の行動、教員の反応への予測や中学生が使う図書の出版状況などの問題点が指摘され、制約のある条件下でどのように図書館が機能できるのか等、白熱した議論となった。

これらの議論は、国際子ども図書館の「調べものの部屋」の開室準備に大いに参考にな

1 本章の「テーマ」という用語が指すものは、厳密に考えると「トピック」と「テーマ」に分けられると考えられる。例えば、「トピック」の例は「地球温暖化」であり、研究「テーマ」の例は「温暖化防止のために私達ができること」である。今回のインタビューでは「トピック」という用語を使った参加者はおらず、また、学校図書館の現場でも両者を指して「テーマ」と呼ぶ傾向があることを踏まえ、本章では両者を区別せず、「テーマ」と表記している。

2 「探究的な学習」という用語について、インタビュー参加者の一致したイメージは「大人の研究活動につながる調べもの」つまり「正解が示されるとは限らないタイプの調べもの」だと思われた。学校現場で「探究的な学習」「調べ学習」と呼ばれる学習活動の中には、こうした「正解が示されるとは限らないタイプの調べもの」と「一つの正解を探す単純な調べもの」の二種がおそらく存在している。本報告書では、前者を「探究的な学習」または「探究学習」、後者を「調べ学習」という用語で区別し、また両者を指す用語として「調べもの」を用いている。

なお、この二者は並行して存在し得るし、学習を進めるプロセスとしてどちらも重要である。本インタビューにおいても、「正解が示されるとは限らないタイプの調べもの」については、ある程度の発達段階に至らないと難しく、指導上も注意が必要と言及されている。

るものであった。ただし、本章では、学校図書館のコレクション形成に焦点を当てて要旨を整理することとし、インタビュー後半で示された「調べものの部屋」における探究学習の支援に関する議論は分析範囲に含めなかった。

なお、要旨は、本調査でファシリテーターを務めた筆者（青山比呂乃：関西学院千里国際中等部・高等部 司書教諭）がインタビューの記録から抽出し再構成したものである。記録は、国際子ども図書館のホームページ³に掲載する予定であるので、興味のある方は御参照いただきたい。

5.2 近畿圏の学校図書館実務者へのインタビュー要旨

日時：平成 25 年 6 月 15 日 16 時～19 時

場所：国立国会図書館関西館 共同研究室

参加者：（所属は実施当時のもの。）（各校の概要は第 3 章 28 ページ参照。）

a 氏（私立共学中学 D 校 司書教諭）

b 氏（私立共学中高一貫 H 校 探究科教諭）

c 氏（私立共学中高一貫 H 校 司書教諭）

d 氏（私立男子中高一貫 J 校 司書教諭）

e 氏（私立男子中高一貫 J 校 学校司書）

青山比呂乃（私立共学インターナショナルスクール・中高一貫 G 校 司書教諭）

ファシリテーター

橋詰秋子（国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係）事務局

高宮光江（国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係）事務局

堤真紀（国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係）事務局

(1) 学校図書館事例調査及び蔵書データの分析調査の結果について

「学校図書館のコレクション形成に影響を与える志向性（中間報告）」（75 ページ参照）を見て

- ・どの志向性が影響しているかは、学校自体のニーズ（何に重きを置いてどういう教育をしようとしている学校なのか）に対応しており、学校によっていろいろだ。もっとも、今日のインタビュー参加者は私学の実務者ばかりなので、公立校の場合は少し違う認識になるかもしれない。（青）【編集補記：箇条書きの最後に、（ ）に入れて発言者を示す。以下同じ。】
- ・蔵書構成には、目に見える形で学校図書館の姿勢が現れる。（e）

3 国立国会図書館国際子ども図書館『中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト』< <http://www.kodomo.go.jp/promote/school/room.html> >（最終アクセス 2013 年 12 月 1 日）

(参考 1) インタビューで提示した「学校図書館のコレクション形成に影響を与える志向性
(中間報告)」

※インタビュー調査では、学校図書館事例調査（第 3 章）のインタビュー実施時点での中間報告を参加者に提示した。

※本報告書の第 3 章には、参加者の意見を受けて修正・再整理した最終版を掲載している。

- ✓ 訪問調査と情報源に関する補足調査によって、各校の学校図書館の状況や専任担当者のコレクション形成に関する考え方、授業での使い方、資料選定で用いる情報源等を明らかにできた。これらの結果と各校のコレクションを比較・考察すると、学校図書館のコレクション形成には、影響を与えている志向性（要因）が複数あると推察された。
- ✓ この志向性を、下記 $a \sim \delta$ の 4 つに整理した。（この他に、男子校／女子校／共学校の別も要因の一つに考えられるが、ここでは対象としない。）実際の学校図書館では、これらの四つが様々な比率で組み合わされて、各校のコレクション形成に影響を及ぼしていると推測される。

学校図書館のコレクション形成に影響を与える 4 つの志向性
<p><志向性 a> 児童図書館サービスの延長・発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 読書材の選書に現れることが多い志向性。読書材は、本の中まで読んで判断している ・ 選書の情報源として、東京子ども図書館や教文館ナルニア国の出版物に信頼を置く ・ この志向性は全ての調査校で見られた。特に、勤続年数が長い専任担当者がある図書館や中学校のみを対象とした図書館で強い
<p><志向性 β> 大学図書館への知的継続性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学の教養学部につながる資料を揃えている（例：岩波文庫等を全点購入している） ・ 選書の情報源として、大学図書館の新着情報や新聞の書評欄を用いる ・ この志向性は、歴史のある私学の中高一貫校の図書館で強い
<p><志向性 γ> (公共図書館的?) 利用者ニーズの重視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒や教員のニーズに応えることを重視している ・ 図書館を使う教員の授業（カリキュラム）に必要な資料を揃えることを意識している ・ 選書の情報源として、生徒や教員のリクエスト、生徒が作成したレポートの参考文献・注記等を用いる。公共図書館のヤングアダルト向けホームページも参照する ・ この志向性も全ての調査校で見受けられたが、ニーズに応える程度は各校の方針や予算によって異なる
<p><志向性 δ> 生徒の情報リテラシー養成の重視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ データ整理（OPAC への件名・キーワード付与）を重視 ・ 図書以外の資料（新聞・雑誌・データベース等）の収集・提供を意識 ・ この志向性を明言する学校は少なかった(G校のみ)。司書教諭が情報リテラシー関連の授業を行っている図書館で見受けられる

(参考 2)インタビューで提示した「表 所蔵が多いタイトル (中間報告)」

※インタビュー調査では、学校図書館の蔵書データの分析調査（第 4 章）のインタビュー実施時点での中間報告を参加者に提示した。

※本表の内容は、第 4 章の表 4-3 と同様である。分析調査の対象館 13 館分の蔵書データを計量的に分析し、所蔵館数が多いタイトルの上位を集計した結果である。

所蔵館数	所蔵冊数	タイトル	著者	出版社	出版年
13	25	13 歳のハローワーク	村上龍	幻冬舎	2003
13	21	きみの友だち	重松清	新潮社	2005
13	14	素数ゼミの謎	吉村仁	文藝春秋	2005
12	28	いのちの食べかた	森達也	理論社	2004
12	24	沈黙の春	レイチェル・カーソン	新潮社	1974
12	22	世界を信じるためのメソッド	森達也	理論社	2006
12	18	ぼくを探しに	シルヴァスタイン	講談社	1977
12	16	化石	ポール・D.テイラー	同朋舎出版	1991
12	14	魔法使いハウルと火の悪魔	ダイアナ・ウィン・ジョーンズ	徳間書店	1997
12	13	鬼の橋	伊藤遊	福音館書店	1998
12	12	弟の戦争	ロバート・ウェストール	徳間書店	1995
11	41	あのころはフリードリヒがいた	ハンス・ペーター・リヒター	夕岩波書店	2000
11	29	塩狩峠	三浦綾子	新潮社	1968
11	24	西の魔女が死んだ	梨木香歩	新潮社	2001
11	22	クロディアの秘密	E.L.カニグズバーグ	岩波書店	2000
11	21	黒い雨	井伏鱒二	新潮社	2003
11	21	ごんぎつね	新美南吉	講談社	1986
11	19	ことばの力	大岡信	花神社	1978
11	19	盗賊会社	星新一	理論社	2003
11	19	高村光太郎	福田 清人	新潮社	1984
11	17	詩のこころを読む	茨木のり子	岩波書店	1979
11	17	黒い兄弟	リザ・テツナー	あすなろ書房	2002
11	17	14 歳からの哲学	池田晶子	トランスビュー	2003
11	16	声に出して読みたい日本語	齋藤孝	草思社	2001
11	16	ドリームバスター	宮部みゆき	徳間書店	2001
11	16	世にも美しい数学入門	藤原正彦	筑摩書房	2005
11	16	ダレン・シャン 2	Darren Shan	小学館	2002
11	15	ごみから地球を考える	八太昭道	岩波書店	1991
11	15	ローワンと魔法の地図	エミリー・ロッダ	あすなろ書房	2000
11	15	ダレン・シャン 3	Darren Shan	小学館	2002
11	15	トラベリング・パンツ	アン・ブラッシュェアーズ	理論社	2002
11	14	ダレン・シャン 5	Darren Shan	小学館	2004
11	14	東京が燃えた日	早乙女勝元	岩波書店	1979
11	14	鉄道員	浅田次郎	集英社	1997
11	14	ダレン・シャン 4	Darren Shan	小学館	2002

所蔵館数	所蔵冊数	タイトル	著者	出版社	出版年
11	14	夜明けの覇者	Darren Shan	小学館	2003
11	14	坂本竜馬	古川薫	小峰書店	2000
11	13	種をまく人	ポール・フライシュマン	あすなろ書房	1998
11	13	みんなのなやみ	重松清	理論社	2004
11	13	グッドラック	アレックス・ロビラ	ポプラ社	2004
11	13	風が強く吹いている	三浦しをん	新潮社	2006
11	13	ダレン・シャン 1	Darren Shan	小学館	2001
11	13	夜の山道で	星新一	理論社	2002
11	13	南総里見八犬伝 第1の物語	滝沢馬琴 原	偕成社	2002
11	13	手塚治虫がねがったこと	斎藤次郎	岩波書店	1989
11	13	宇宙の男たち	星新一	理論社	2004
11	13	アブダラと空飛ぶ絨毯	ダイアナ・ウィン・ジョーンズ	徳間書店	1997
11	12	のはらうた	工藤直子	童話屋	1987
11	12	100万回生きたねこ	佐野洋子	講談社	1986
11	12	一億百万光年先に住むウサギ	那須田淳	理論社	2006
11	12	いつでも会える	菊田まりこ	学習研究社	1998
11	12	裁き司最後の戦い	ラルフ・イーザウ	あすなろ書房	2001
11	12	センス・オブ・ワンダー	レイチェル・カーソン	新潮社	1996
11	12	温室デイズ	瀬尾まいこ	角川書店	2006
11	12	ひとしずくの水	ウォルター・ウィック	あすなろ書房	1998
11	12	ジョナさん	片川優子	講談社	2005
11	12	14歳からの仕事道	玄田有史	理論社	2005
11	12	さもないと	星新一	理論社	2003
11	11	天と地を測った男	岡崎ひでたか	くもん出版	2003
11	11	ローワンと黄金の谷の謎	エミリー・ロッダ	あすなろ書房	2001
11	11	セカンド・ショット	川島誠	角川書店	2003
11	11	包帯クラブ	天童荒太	筑摩書房	2006
11	11	こどものためのドラッグ大全	深見埴	理論社	2005
11	11	数え方の辞典	飯田朝子	小学館	2004
11	11	ドリームバスター	宮部みゆき	徳間書店	2003

- ・コレクション形成は、一つの作業をやって終わりではなく、過程が大切だと思う。図書館や図書館担当者だけではなく、他の教員をいかに巻き込んでいくかが大切だ。(コレクション形成の過程の中には) 教員に図書館の役割を考えてもらうステップも必要だろう。(e)
- ・学校図書館の担当者としては、ある志向性のみで特化することはなく、図書館ならではの多様性を意識してコレクションを作っていると思う。例えば、「志向性β：大学図書館への知的継続性」のような教養主義的志向が強い学校でも、古典的な資料だけでなく軽い読み物も入れよう、という意識があると思う。(e)
- ・学校図書館は利用者が非常に限定されている。そのため、教員が変わると具体的に必要とされる資料ががらりと変わるのが、ありがちな状況だ。(青)

- ・規模的にも1~2名の職員で運営している図書館が多いので、恣意的に変えようとしなくても、担当者の得意分野がかなり反映されてしまう。ただし、予算配分について学内の信頼を得るには、きちんと収集方針を明示するなど、恣意的にならない仕組みを作る必要もあると考えている。(d)
- ・「志向性γ：利用者ニーズの重視」に当たるのは、単なる利用者リクエストに応える意識だけではない。(潜在的なニーズの充足や資料の利用促進を含めた)啓蒙的な意味合いを持つ資料収集が中心なのか、授業での使用という顕在化したニーズを満たすことが資料提供の中心なのか、学校によりそれぞれ主張があっというし、それが明らかになってもいいと思う。(青)

「表 所蔵が多いタイトル (中間報告)」(76~77 ページ参照) を見て

- ・(表に出ているタイトルには)全国規模の寄贈本や読書感想文の課題図書の本が見られる。学校図書館の基本図書と呼べる内容だから所蔵が多いタイトルに挙がっているとは言えないようだ。(a,b,c,d,e,青)
- ・逆に、実際はどこでも持っている基本図書なのに版次違い等で別書誌扱いになり、上位に挙がっていないものもあるようだ。(橋)
- ・ランク上位の本は、読書材が多い。(所蔵数ではなく)貸出数の多い本をリスト化した方が、基本図書リストに近いものができるかもしれない。ただし、貸出しをしないがよく使われている資料(例：参考図書)もあるので、分析が難しい。(d,青)

(2) 中学生向けの資料とコレクションについて

探究的な学習に使える基本図書

・調べものに有用な図書の種類

- ・レファレンスや調べ学習や探究学習の初期段階で、オールマイティに使える百科事典のような資料はある。(e)
- ・しかし、探究が進んだ時点で使う本は、かなりケースバイケースで違うものになる。特に高校生は、個々のテーマに深く入っていく資料が必要だ。中学生はもう少し緩やかかもしれない。(e)

中学生向けの資料

・内容・レベル・装丁の問題

- ・調べものの本は、小学校高学年までの本はあるが、その上は急に大人向けの一般書になる。中学生向けが抜けているというのが正直な実感だ。児童書と一般書の間にある。(e)
- ・中学生にとって魅力的で読めそうな本がどれだけあるか、が問題だ。(a,b,c,d,e)
例：『よりみちパン！セ』シリーズ(イーストプレス社)は、確かに中学生ターゲットで良い本だが、読み物なので調べるといふ点では使えない。
例：調べものでは雑学本が一番使われる。PHP社の『〇〇の大研究』シリーズも使う。
- ・中学生向け図書の出版事情・出版点数の問題

- ・ポプラ社の『ポプラディア情報館』のような内容の本が、中学生の興味のあるレベルで、500種類くらいのテーマで出版されるとよい。ただし、『ポプラディア情報館』よ

りも) もっと軽く持って帰れるサイズで、装丁は一般書のようにしてほしい。中学生は重い本を使わない。(b)

- ・良い本や必要な本は、買っておかないとすぐに絶版になる。(b)
- ・新規開校(開館)してゼロからコレクションを構築した学校図書館担当者が、絶版などの理由で、基本図書を揃えるのが難しかったと言っていた。(d)
- ・学校図書館員が見て欲しいと思う本はなかなか出版されず、また生徒から見てもピンポイントにヒットする本もほとんどないと感じる。(e)
- ・中学生向け出版物は、実際に中学生が調べものを実施する回数・規模等が少なく、結果としてマーケットが小さいため、あまり出版されていないと思う。こうした学習がある程度広く実施されている、小学生に向けた出版物は多い。これは、よく購入されるので採算ベースに乗るからではないか。(b)
- ・中学生向けの内容で、情報量があり、かつ分かりやすい本は、正直言ってほぼない。テーマによっては全くない(例: 広告、テレビ、インスタントラーメン、コンクリート)。(b)
- ・最近では出版されてもすぐに買えなくなる。良い本なのになぜか。多分、出版社が「3,000部刷って増刷はしません」という本の作り方をしているからではないか、と推測している。特にセットものは、出た時にすぐには買わないと無くなる。(b)
- ・アニメーションに関する本で子ども向けの良い本があるが、今は絶版になっている。これだけ社会的にクール・ジャパンだ、日本文化の輸出だと叫ばれていても、中学生に分かるようにアニメーションをきちんと説明した資料がないのが現状だ。専門学校生向けのレベルまでいけば、基礎的な本が出されているが。こういうテーマは、どこかきちんとした出版社がしっかり作って、それを全国の学校図書館が買うようにしないといけないと思う。(b)
- ・全国学校図書館協議会(以下「全国SLA」という。)などが、こういう本を出版して欲しいと出版社に伝えられる組織になればよいと思ったりする。例えば、「この本は中学校で非常に役に立ちますリスト」を作って、それが出版側へ伝わるようにする。「出版助成」というか「出版の後押しプロジェクト」はできないか。学校図書館と出版社、お互いの利害が一致するとよい。(b)
- ・中学生が知りたがるテーマと実際に存在する使える本との間にギャップがある。中学生が知りたがるテーマは、学校図書館の現場にいると、ある程度予測がつく。ただそれを中学生の調べるテーマにすると、「そういうテーマの資料はなく、あっても難しすぎる」ということになる。生徒が言うテーマ自体はとても面白い。調べものを支援する(ためにこのギャップを埋めなければならない)私たち学校図書館員に対して難題が突き付けられている、とも感じている。(青)
- ・例えば『図解 牢獄・脱獄』(新紀元社)のような一般書は、中学1年生でも喜んで予約を入れる。ただ、その本を検索してたどり着けないと、借りられないし読めない。「刑務所」は人気のテーマだ。きっと、アナザー・ワールドをのぞいてみたいのだろう。“臭い飯”の意味や内容を知りたがる子は多い。(d,e)

貸出比率の性別による差⁴

- ・学校図書館研究会の兵庫支部で「学校図書館の蔵書構築を考える」というような研修会を企画した。そこで、各校の日本十進分類法（以下、「NDC」という。）の類ごとの貸出比率を調べたら、発達段階（中学校と高等学校）より性別（男子校と女子校）の方が、差が大きかった。(e)

各校の具体的な選書基準

- ・[私立男子中高一貫 J]では、私学で比較的予算があるため、「いつか使うかも」と思って資料を買う場合がある。(d)
- ・[私立共学中高一貫 H]では、使う生徒がイメージできない本は買わないようにしている。使う子の顔が浮かぶか、その子のレポートの参考文献一覧にその本が載るかが、判断基準だ。(b,c)

(3) 探究的な学習の支援方法について

資料の使わせ方の指導上の問題

- ・中学生は能力の個人差が大きい年代－難しくても読みこなす生徒は存在する
 - ・中学生は、生徒の能力の個人差が大きいので、資料の読解レベルについてターゲットを絞るのが難しい。易しく単純な本でないと手に取らない生徒がいる一方で、難しい新書を渡しても黙って読む子もいる。(b,d)
 - ・全体的に知的要求の意欲が低くなりがちな高校生より、中学生の方が、好奇心に火がつくと熱心に取り組む。その子の知的要求にテーマが合えば、大人向けの資料であっても適切に使うことができる。(青)
- ・図書の使わせ方－自分で必要な情報を切り出すための使い方の指導が必要
 - ・生徒自身で、長い文章から必要な部分を切り出すのはかなり難しい。最初から情報が切り出しているような本でないと、中学生には使えない。(b)
 - ・中学生用と思われる調べものの本の中には、出版側の事情からか、1冊に複数のテーマを集めたものがあるが、こうした本は個別のテーマが切り出し難いので、使う側にとっては使い難い。そうした本を「複数テーマが入っているから購入しない」と判断することも多い。(b,d,e)
 - ・大人向けの統計資料を読みこなす力が中学生にはない。読みこなす方法も、きめ細かく教えないと生徒が腑に落ちる所までいかない。統計は、教材となる資料を準備するのにとても手間がかかる。(d)
 - ・生徒に、資料を見つけ出す方法や、見つけた本が自分のテーマと関連するかどうか判断する力を付けさせる必要がある。図表の見方や統計の読み方までも、丁寧に解説する。難しい事も教えればちゃんとできるようになる。(d,e)
- ・中学生の調べものに対する典型的反応とそれへの指導
 - ・子どもは単純で、オーロラを調べるなら、背表紙に「オーロラ」と書いてなければ駄

4 ここで述べられていることは、無意識なジェンダー・バイアスにつながらないように、十分に注意して扱う必要がある。ただし、中学生は、発達的にも性差が大きく、また性差を意識し始める年齢であるため、男子らしい・女子らしい（と自分達が思う）ものを選ぶ傾向があることは、学校図書館担当者の共通認識であろう。

目。「天気」や「気象」というタイトルでは本を開かず、読もうともしない。図書館の OPAC で本を探す時も、思いついた単語を入れて書名でヒットしなければ、図書館にはないと思ってしまう。「違う本ばかりヒットする」と言われることもある。(b,c,青)

- ・実際の調べ学習・探究学習では、(思い付いたキーワードで OPAC 検索して本がヒットしない場合) そこから一歩進むために工夫するよう教員が指導する場合と、よく分からずそのまま通り過ぎてしまう場合とがある。その場で指導されなかった生徒は、ついインターネットで調べてしまう。インターネットのサーチエンジンは、キーワード検索で情報がピックアップしやすいから。(d, 青)

生徒の知りたいことと資料を結び付けるための“概念の体系化”の指導

・概念間のつながりをどう理解させるか－図書館は“知の体系”を見せる装置

- ・インターネット情報では、生徒は、ピンポイントで「オーロラ」なら「オーロラ」という単語だけを検索し、そこに出てきた情報しか見なくなる。(青)
- ・中学生は“知の体系”、つまり、物事や概念同士のつながり(関係)が見えていない。中学生に、概念の広がりやつながりをどう理解させられるか、それを見せる装置の一つに、図書館での分類順の資料排架があると思っている。(青)

・検索指導の手がかりとなるシソーラス－“知の体系”を示すものとしてのシソーラス

- ・シソーラスは、概念の体系(上位・下位概念)を示しているので、検索指導の手がかりとして使うことができる。インターネット検索でも同様に使えると思う。(d)
- ・[私立男子中高一貫 J]では、探究学習のきっかけ作りの一環でイメージ・マップやマインド・マップを作らせているが、中学生は言葉を結び付けられない。だからマップが書けない。

しかしその一方で、生徒は知りたいものを持っていないわけではない。心の中にある知りたいもの(知的要求)をどうやって表に出すのか(表現するか)、が中学生には難しい。概念の体系化ができている生徒は、複数テーマを扱った図書や一般書から必要な情報を抜き出すことができる。(d)

- ・知りたいテーマが図書館の知識の体系表(具体的には NDC)とどうつながっているか(体系表のどこに該当するか)は、中学生にとって更に難しいことだ。彼らが知りたいものと図書館の体系表とのつながりが見えるような仕組み(体系表)があるとよい。生徒がふだん使う言葉で組まれた体系表やシソーラスがあれば、検索の役に立つと思う。例えば、「刑務所」は、法に反した人が行くところだから上位概念は「法」になる。NDC はちゃんとそうなっている。関連するのは、「犯罪」とか「麻薬」などの概念。刑務所で作成した「工芸品」とか、他にもいろいろな言葉とのつながりがあると思う。生徒の使う言葉で作られた、これが一覧できる体系表が欲しい。(d)

発達段階と指導方法の留意点

・中学生の発達段階－反抗期と他者性・多様性への気付き

- ・中学生は、自分と他人の見方が違う、自分と異なる意見があるということに気付き、悩みだす時期だ。つまり、自分と他人の二者関係から始めて、世の中の多者関係につないでいく指導が必要な時期だと考えている。(e)
- ・言葉と言葉の関係性に気付き始めるのが、中学生。小学生で教える NDC は、9 類は文

学とか、記号の数字とテーマが一对一对応までのところが多い。中学生から、自分のテーマがいろいろな分類番号の中に含まれていて一つの分類番号にカチッと収まらないことが分かってくる。(e)

・ 調べもののタイプの違いー一つの正解を探す小学生から、多様性を受け入れる大人へとつなぐ時期

- ・小学生は、正しい答えがあるという前提で学習が成り立っている（教員が正しいことを教えているイメージ）ので、答えは一つという感覚を持っている。中学生でも1年生だと、複数の資料を見比べて書かれている主張が異なると「どっちが正しいのですか」と聞いてくる。高校に入るまでは、生徒は、調べて明確な結論（正しいと思える唯一の答え）が出ないと、調べものが失敗したと思ってしまう。(青)
- ・大人になると、「こういう面ではこの説もあり」とか「今の段階ではここまでしか言えない」と捉えられるようになる。中学生は、小学生と大人の間地点にいる。どのように指導するかは難しい。(青)
- ・資料評価でも同様で、生徒は「この資料はこういう面では使える」という目で資料を評価できない。大切なのは、「いろいろな資料にいろいろなことを書いてあって嫌だ」と言わずに、それらいろいろなことを整理してまとめられるようになることだ。(青)
- ・教科の授業では、(小学生的な)唯一の正解を見つけるという目的で図書館を使うこともあるが、そもそも図書館で調べるということは、本質的にそうではないものだと思う。つまり、図書館での調べものは、「答えは多様である」という方向で行うのがよいと考えている。ただし、教員を含め、学校の中でそのことがどれくらい認知されているかは疑問だ。(青)
- ・[私立共学中学 D]の図書館の授業では、基本的には、小学校の調べ学習の少しレベルが上がったものをやっている。中学3年生くらいから、少しずつ「異なる多様な意見があって、その中で自分の意見を出していこう」ということに取り組んでいる。(a)
- ・[私立共学中学 D]の授業で、生徒にキーワードを自由に考えさせる課題を設けている。NDCを教える時に([私立共学中学 D]の図書館は2次区分までしか取っていないので、100分類を教えることになるが)、①まず100の中から自分の好きな分類番号を三つ選ばせる、②そして、その分類番号が付いた資料を持ってこさせる、③さらに100の中に入っていないテーマを三つ考えさせる、という内容だ。③の段階で、生徒が分類に無いと思って挙げてくるテーマが、実はこの分類に入っているよと教えているのだが、生徒は比較的のってくる。提示されていないものに気付かせることは大切だと感じている。(a)

中学生向き資料構成のポイントー網羅性とコレクションの核となるテーマ

- ・コレクションの網羅性には、“知の体系”を見せる場＝百科事典的装置としての図書館の意義を示す、という意味合いがある。様々な分野の本が並んでいる書架を生徒が見て歩くことで、一通り背表紙が目に入り「こんな本があるんだ」と無意識に生徒が吸収してくれるかも…という意識もある。(e)
- ・一般書も含めて取りあえず全分野を網羅して、その中で教材として取り上げられるような分野とか、指導として深められるような分野、生徒が興味を持つ分野については、

もう少し深く調べられる資料を置くという方針がよいのではないか。もちろん学校によって、取り上げる分野の力点は変わってくる。おそらく、多くの学校がそういうコレクション形成をすれば、分野網羅的なコレクションの部分では、最大公約数的な基本図書群が現れてくる気がする。(a)

生徒のテーマ選びに対応するために

・生徒がよく取り上げる自由研究テーマ

- ・[私立共学中高一貫 H]で、これまでの生徒が選んできた自由研究テーマを整理して統計を取ったのだが、中学生からは1,000個もテーマは出てこない。だから、最大1,000テーマの本を用意すれば間に合うと思っている。そして冊数については、今までの経験からテーマごとに3冊ずつ本を用意すれば大丈夫だろうと見積もっている。この数値が妥当かどうか分からないが。(b)
- ・毎年必ず生徒が選んでくるテーマがある。例えば、自動車、色、地震、コメ、映画、栄養、チョコレート、ネコ、野球、薬、コンビニ、サッカー、天気、方言、味覚、犬など。最近、これらのテーマのことを“ありがちテーマ”と呼んでいる。女子は、紅茶もありがちテーマだ。(b)
- ・[私立共学 IS・中高一貫 G]の実感として、中学生が思い付くテーマは、1,000どころか20くらいだと思う。20であっても、そのテーマをどう切り込んで調べるかで、調べた結果は変わってくる。(青)

・生徒にとってのテーマ選びの困難さ

- ・高校1年生でも、なかなか本当に調べたいテーマを思い付くことができない。(青)

資料がないとき：図書以外の資料の提供

・鮮度のいい人気のあるテーマの資料収集の困難さ

- ・「映画」「広告」「テレビ番組作成」のような、鮮度が重要なテーマはほとんど本がない。新版が欲しくても改訂されず、絶版になっている場合も多い。

・公開されている大学卒論の利用

- ・[私立共学中高一貫 H]では、「アイドル」や「パチンコ」などを調べている生徒がいると、(当該テーマに関する図書が少ないので)「パチンコ 卒論」でインターネットを検索して見つけた大学の卒論(PDF)を印刷して、生徒に手渡している。生徒には、「これより良いものを書け」とプレッシャーをかけたりにしている。(b)
- ・卒論には参考文献の一覧があるので、そこから関連資料を特定して、本を手に入れることもある。(b,c)

実物資料の持つ力 - 探究学習のきっかけとして

- ・紙資料の提供だけでは、生徒の探究学習への興味の持続につながらないと感じている。実物資料(例：化石や標本)を提供するのもよいと考えている。ドイツのミュンヘン市立図書館に行った時、資料と実物資料や視聴覚資料を一緒に排架している本棚があり、とても楽しめた。こんな排架があるのだと思った。日本でも、学校図書館支援センターなどでテーマに関係する実物資料を貸し出しているところがある。学校図書館のコレクションは本が中心だが、実物があってもよい。触るという感覚は、実物でないといけない。読むだけでなく、触って考える。(d,e)

- ・[私立共学中高一貫 H]でも、星座早見盤や簡易望遠鏡が欲しいと思っていた。本の形で売られていたらうれしい。本棚に収まるサイズで、耐久性があるものだとおよい。昆虫のアクリル標本、世界のコイン・紙幣、恐竜、化石。あると図書館が魅力的な空間になる。実物資料は欲しいと思った時になかなか買えないから、コレクションの必要がある。(b)
- ・一方で、実物資料で全部解説しているつまらないと思う。「これはなんだろう」と言って調べる、というのが楽しいだろう。実物資料は探究学習のきっかけでよい。また、図書館に来るきっかけやディスプレイにも使える。(d,e)

(4) その他の議論

全国 SLA の「学校図書館メディア基準」について

- ・[私立男子中高一貫 J]では、「学校図書館メディア基準」で示されている NDC の配分比率を、自校の配分比率と比べて極端に少ない類があれば見つめ直す、という感じで使っている。NDC で排架しているし、たまには、コレクションを大きな視野で見直すのも悪くない。(e)
- ・この基準について司書仲間に聞いたことがあるが、「これに何の意味があるの?」という意見がほとんどだった。意識して、コレクションを基準の配分比率に近づけているという学校はなかった。(d,e)
- ・2001 年頃に[私立男子中高一貫 J]で選書方針を作った際、自館の配分比率をメディア基準の比率と比較したところ、自校の 6 類の比率が低かったのが驚いた、という経験がある。(d,e)
- ・[私立共学中高一貫 H]では、生徒に使われるテーマで資料を集めているので、NDC の類レベルの比率にはあまり意味がないと思っている。資料をどこに分類しているかによっても配分比率は変わってくる。(b)
- ・この基準は、網羅性や全体バランスを見るための、一つのリトマス試験紙ではないか。ある程度は意味があると思う。コレクションの経年変化を見ていく際の比較対象になる。経年変化と言え、私が(歴史が得意であるため)[私立共学中学 D]の担当者になったせいで 2 類が増えた。前任者の時代は、930 (英米文学)の割合が多かった。(a)
- ・メディア基準を使って、コレクション全体のバランスを見ている。この類はわざと集中して買っているからメディア基準より多いのだ、と理由が分かればよい。基準に合わせて買うことはしていない。(d,e)
- ・基準に合わせるといっても、出版状況により、こんなに量は買えないという類もある。例えば、出版点数の少ない 0 類について基準値がこんなに高いのは疑問がある。0 類に全集が入っているのではと思う。もしくは、新書に全部 080 を付けて 0 類にしているとか。[私立共学中学 D]の 0 類は、コンピュータ関係と図書館そのものの本が多い(新書と全集は 0 類の分類を振っていない)。(a)

NDC 類ごとの回転率(貸出数/所蔵冊数)を見る

- ・類ごとの回転率の算出

- ・[私立共学中高一貫 H]で回転率が高いのは5類と6類。この類は冊数自体が少ないので回転率が高いのだろう。コレクションの見直しをする際は、蔵書数より利用数を目安にしている。(b)
- ・歴史(2類)は、貸し出されるテーマが固定していて利用数自体は少ない。例えば世界史だと、使われるのは、古代エジプト文明・マリー・アントワネット・三国志・海賊ぐらいだ。しかし、産業(6類)は、アパレル・鉄道・経営・コメ・ペットなど人気のテーマがあるから回転率が上がる。企業研究をテーマに選ぶ生徒が多いと、6類の資料が回転する。(b)

除架・除籍の問題

- ・[私立共学中高一貫 H]では、所蔵資料を積極的に書庫に移動し、また除籍をしてきた。主な理由はスペース不足だが、開架は“平成の本棚”にしたいという願いもある。平成も四半世紀経っているので、なるべく昭和の本はなくして回転率を上げたい。古くても良い本ももちろんあるが、必要に応じて閉架から出すようにしたい。(b)
- ・子どもは古い本は手に取らない。古くても良い本はなるべく置いておきたいが、古くて汚い本があると(他の本も手に取られなくなり)逆効果。[私立男子中高一貫 J]は、分かっているが、除架し難いという悩ましい状態だ。古い本も必要だと思うのでバランスが大切だと思うが。(d,e)
- ・[私立共学中学 D]では、新しく書庫ができたため、ここ2,3年捨てていない。新しく(出版されていないので)買えない分野の本もある。例えば「養蚕」の本は、岩波の科学ライブラリーの1冊しかないので、古くても捨てられない。でも、蚕糸業はNDCの分類記号の一つを占めている。(a)
- ・分類は無味乾燥なようでいて、時代や社会を反映している。その時代に出版された本、設定されていた分類は、その時代に必要とされていた、または出版しなかったものなのだろう。そうした本を過去の遺物として廃棄するか、過去を物語る貴重な資料として保管しておくかは、判断が分かれるところだ。(e)

電子資料の問題

・英語圏での電子資料とコレクション形成の変化

- ・[私立共学 IS・中高一貫 G]では、英語の新聞や雑誌は、(紙だけでなく)電子版も買っている。英語の雑誌は、紙なしで電子のみというものも出てきているので、それを生徒にどう使わせるかという問題も発生している。(青)
- ・英語の資料群は今どんどん電子化されている。英語圏やスペイン語圏の学校図書館は、(図書館という場所自体が無くなり)電子図書館で済ませる所も出てきそうなほどだ。教科書もどんどん電子化されている。(青)
- ・日本は、紙への愛着が大きいと思う。(d)
- ・米国では、ライブラリアンの選書の意味が変わってきている
 - ・紙のコレクション形成は本を選んで並べることが中心だが、英語の調べものの資料はデータベースや電子書籍、電子雑誌に移行している。(青)
 - ・データベースなどの電子資料の購入は、データベース提供会社(ProQuest社など)が集めた複数タイトルが入ったパックを契約して、学校で使えるようにすることだ。つ

まり、図書館は（電子資料を）個別のタイトル単位では選べない。図書館が1点ずつ選んでコレクションを形成するのではなく、会社が提供するセット単位で、使えるかどうか判断して契約することになる。（青）

- ・電子資料のコレクション形成は、これまで紙でやってきたやり方とは全く違う。コレクション形成の仕事自体が変わってくる。また、電子資料は、利用方法がインターネットのサーチ・エンジンの使い方と近い。便利でワン・クリックで調べられるけれど、弊害もあり、生徒はヒットしない情報は無いと思ってしまう。（青）

電子資料の世界—概念の関係性の理解ができるのか

- ・デジタルの世界はフラットだと感じる。概念の関係性や概念間の距離（遠い・近い）が分からない。紙だと、NDCで排架された書架の中を動き回れば距離感が分かるが、電子は操作が全部一緒で、調べていく過程に身体的な感覚が伴わない。発達段階にある子どもが、電子資料だけでやっていってよいのかとも思う。（e）
- ・また、（データベースなどの電子資料はセット単位での契約になるので、図書館担当者が個別では選ばないタイトルも利用できることになる。）個別タイトルをきちんと選書するのではなく、生徒がキーワードを入れた時、たまたまデータベースに入っているからヒットする、という資料提供でよいのかとも感じている。クリックしてヒットしなかった生徒には、きちんとしたフォローが必要になるのだろう。（e）
- ・電子資料を使う人間は、デジタルの世界で完結するのか、インターネット上で見つけた論文を紙に印刷して読みたくならないのか疑問に思う。[私立共学中高一貫 H]で、アニメを卒論にしたい生徒がいて、クール・ジャパンの報告書（PDFで70枚くらい）を見つけたが、そういうものをデジタルで読む人はいるのか。（b）
- ・動き回る人にとっては、端末一つを持ち運べば済む電子資料が有利。今後は、動かない人にも電子資料が広まっていくかもしれない。紙が好きな人は、ずっと紙を使うとは思うが。日本でも、インターネットが普及した時のような流れで、電子書籍等の電子資料が一般化していくのかもしれない。（d）

・電子資料の危険性

- ・電子資料は多くなればなるほど、参照される情報の発信者は一握りになるのではないか。グーグルでも、クリック数の多いページがどんどん検索上位にいく仕組みになっている。ヒット上位の情報しか見ないと、結果として特定の人が発信する情報しか見ないことになってしまうところが怖い。そこは、教育の問題かもしれないが。（d）

・デジタル情報の見極め方を教える必要性

- ・教育で、紙の本のここに必要な情報があるというのを教えるように、デジタルでも、電子資料の使い方や見極め方を教える必要がある。（青）

・インターネットが嫌いな生徒

- ・インターネットが嫌いな子も多い。検索戦略なしにやると欲しい情報が見つかり難いからだろう。探しているテーマにピッタリなページがないと嫌なのだと感じる。（青）
- ・かゆいところに手が届く本に実際に触れる、ということも一つの体験かなと思う。インターネットにしる本にしる、使える情報が存在していて探し出せるということを経験させることが大切だ。（青）

- ・今の教員は紙の本が好きだから、世代が変わるまでは、日本の学校では紙が中心だろう。でも社会的には、紙の出版点数は減っていくだろうとも思う。(d)

5.3 首都圏等の学校図書館実務者へのインタビュー要旨

日時：平成 25 年 6 月 23 日 13 時～16 時

場所：国立国会図書館国際子ども図書館 研修室

参加者：(所属は事例調査の実施当時のもの) (各校の概要は第 3 章 28 ページ参照)

f 氏 (私立男子中高一貫 I 校 司書教諭)

g 氏 (国立共学中学 C 校 学校司書)

h 氏 (公立共学中学 B 校 学校司書)

i 氏 (公立共学中学 A 校 読書指導員)

j 氏 (私立女子中学 F 校 司書教諭)

k 氏 (私立男子中学 E 校 司書教諭)

青山比呂乃 (私立共学インターナショナルスクール・中高一貫 G 校 司書教諭)

ファシリテーター

橋詰秋子 (国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係) 事務局

高宮光江 (国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係) 事務局

堤真紀 (国立国会図書館国際子ども図書館 児童サービス課企画推進係) 事務局

(1) 学校図書館事例調査及び蔵書データの分析調査の結果について

「学校図書館のコレクション形成に影響を与える志向性 (中間報告)」(75 ページ参照) を見て

・「 β : 大学図書館への知的継続性」について=大人の読書への橋渡し：大人 (市民教育) か、大学 (研究者) か

- ・ β の志向性が、私の認識とそぐわない印象だ。中学校図書館には大人が読む本も揃えているので、「大人につながっていく知的継続性」としてはどうか。中高一貫校など大学に視野が向いている学校もあれば、地方の公立校のように就職する子が多い学校もある。「大学」というのは要らないのでは。(h)

- ・ β の志向性を「シチズンシップ教育を意識して」としては。すなわち、市民教育という意味で捉えてはどうか。(学校図書館にも) 生涯教育の一環という意識はある。(f)

- ・ 私学の司書教諭の中には、 β の志向性で示されたような教養派の人もいる。大人への成長段階ということと別に、大学の学部等の世界を見せるための資料選択はあり得る。「大人へのつながり」だけでは、説明できないコレクションは確かにある。大学受験を意識するような学校の図書館には、「大学への継続性」の意識があると思う。(k)

・「 γ : (公共図書館的な?) 利用者ニーズの重視」について-利用者ニーズとは

- ・ 志向性 γ は、どこでもやっていること。利用者からのリクエストと学校のカリキュラ

ムに必要な資料を購入することは基本だ。学校図書館活動の前提だろう。(f,g,青)
「公共図書館的な？」と書いてあるのが、しっくりこない。また「利用者ニーズ」とくくりに言うってしまうのは、どうなのか。「教員のリクエスト」も、教員が自分の読みたい本を要求するのではなく、生徒に読んでもらいたい本をリクエストしている。つまり「利用者ニーズ」と言われているものの中に、①個人のリクエスト、②生徒に与えるべきという哲学に基づくニーズ、の二つがある。(青)

「表 所蔵が多いタイトル（中間報告）」(76～77 ページ参照) を見て

・所蔵が多い=必要な図書 ではない

- ・上位に挙がっているタイトルは驚くものではない。図書館にあって当然な本だが、使える本という訳ではない。例えば、『13歳のハローワーク』（幻冬舎）は、以前、全国の学校に寄贈があったから、持っている館が多いのだと思う。よい本ではあるが、調べものには役に立たない。(h)
- ・むしろ少し下位のタイトルは、(いくつかの学校で選書されているため、それなりに意味がある有用な) 個性的な本で、他の学校が存在に気が付かなかつた名著かもしれない可能性があるなので、興味深い。(h)

・貸出件数には、禁帯出本の利用数は現れない

- ・(所蔵数ではなく、利用数で上位のタイトルの方が使える本をリスト化できる、という指摘に対して) 貸出件数はシステムから出せるが、分析が難しい。例えば、調べものによく使う本には禁帯出の参考図書がある。また、一時的に(例えば、授業でカエルの解剖をする期間だけ)、指定図書を禁帯出扱いにすることもある。こういう本の利用度は貸出件数に現れない。(f,k)

・全国 SLA 『学校図書館基本図書目録』 との比較

- ・ゼロからコレクションを作る時、最初のベースとなる資料は全国 SLA の『学校図書館基本図書目録』から選ぶこともある。各校の蔵書が、『学校図書館基本図書目録』とどう違うのか分析したら、面白いのではないか。(g,j)

(2) 中学生向けの資料とコレクションについて

選書の方針：各校の事情

・[国立共学中学 C] 利用の必要性、生徒のニーズと大人からの推薦

- ・自分の日々の選書を振り返って考えてみると、2種類の選書があると思う。(授業で使うなどの) 必要に迫られたものを選ぶことが一つで、もう一つは、子どもたちが必要としていると思われる本と大人として子どもたちに手渡したい本を、その時その時の状況を踏まえて判断して選ぶことだ。(g)

・[公立共学中学 B] 他館からの借受けが前提

- ・調べものをする時は、生徒数に対して自館の資料では足りないなので、基本的に地域の公共図書館から借りることになる。その際に、この本が使えるということが分かる。調べものの資料は、そうして1冊ずつ丁寧に調べて図書館に入れてきた。(h)

・[私立男子中学 E] 広く万遍なく収集、自由研究への対応

- ・授業での図書館利用はほとんどない。総合学習の時間割もない。以前は教員に働きか

けをしていたが、図書館を使った授業が教科の教員のやりたい授業の狙いと必ずしも合っていないと気づき、今はあまり熱心に教員へアピールしていない。教科の授業中に、図書館へ生徒が来る機会は年数回あるかないか。教科の教員のリクエストを選書の足掛かりにできないので、結果的に学校図書館コレクションは分野の偏りが無いものになっている。(k)

- ・図書館利用につながるイベントの一つに、学校行事として毎年行っている自由研究がある。生徒一人一人好きな教科で課題を設定し、秋の展覧会で研究成果を発表するという学習活動だ。歴史ある行事だが課外活動である。(k)
- ・教科の教員は、相談しに来る子にはサポートするが、相談に来ない子は勝手にやって勝手に秋に作品を出す、というような非常に自由度が高い生徒任せの活動。ただし、うまく彼らが自分の興味関心があるテーマを見つけられるように、必要な知識とか技能は教科教員が教えようといった姿勢は、どの教員も一貫して持っている。(k)
- ・生徒は、自由研究に必要な資料を図書館に借りに来る。一時期にわっと来るわけではない。ある分野が突出している訳でもない。ここからも、図書館はあらゆる教科・あらゆるテーマの資料を揃えることになる。(k)

中学生向けの資料とは

・易しい本も難しい本も、両方とも揃えることの意義

- ・一般書が読める高校生向けの選書は簡単だが、(適した本の出版が少ない)中学生向けの選書は本当に困る。困るというのは、(子どもたちに)背伸びをさせるか、しゃがませるか、どちらかになるからだ。背伸びをさせるというスタンスを取るのか、中学はこのレベルまでと決めるのか…。(f)
- ・本のレベルの幅広さが、むしろ中学生の良さではないか。[国立共学中学 C]では、調べものの必要性から、中学生向けに出版された資料だけでなく、(小学生向けの)易しい資料も置いている。中学生以下向けに出版された本に必要な情報が載っておらず、調べものに足りないなという時は、もうちょっと難しい、でもあまり難し過ぎない一般書も集める。(g)

中学生自身の本選びの傾向

・プライドと内容レベル

- ・子どもたちをしゃがませる本が必要ないという訳ではないが、中学生だから一般書は難しすぎるといって図書館の蔵書に入れるのをやめたら駄目だと思う。[私立男子中高一貫 I]では、個人的には、背伸びをさせたいと思っている。(f)
- ・[私立男子中学 E]では、内容的には十分使える本であっても、本の見え目、例えば字が大きくて振り仮名の振ってある資料は、中学生のプライドがあって使うのを嫌がる。中学生のレベルで止めたら絶対にいけないと思う。最近入れた領土問題の3巻本は、手に取られない。なぜかという見え目が小学生向けだから。内容もよく目配りされていて中学生でも十分使えるのだが、中学生は本の見え目で、「こういう本は要らない」と言う。(k)
- ・中学生にレベルの合った本を入れる必要はあるが、そこから先の部分は中学だから入れないと決めず、難しい本も入れたい。義務教育でその子の学生生活が終わるとする

なら、中学校は大人に向けた最後の準備期間なのだから、難しい本があってよいと思う。そういう観点がないと、図書館のコレクションがつまらなくなる。(f)

- ・公共図書館の児童室やヤングアダルトコーナーがつまらなく見えてしまう感じと似ているかもしれない。一般書がないと、コレクションの広がりや面白さが見えてこない。

(g)

・年齢による差

- ・私立と公立とでは、傾向が違うかもしれない。[公立共学中学 A]の1年生は、図があって説明がまとまっている本でないと手に取らない。中学2年の職業調べでも、文字ばかりの『なるには Books (ペリカン社)』シリーズでは駄目で、「もっと絵があるものが欲しい」と言っても『おしごと図鑑 (フレーベル館)』を見せると喜ぶ。ところが、中学3年生の後半で進路を考える頃になると、「先生、前に紹介してくれた『消防士になるには』はどこにある？」と聞いてくる。中3になってやっと『なるには Books』を見るようになる。(i)
- ・中学3年間で、生徒はものすごく成長する。3年の年齢の差は、非常に大きい。だから、図書館では、何種類かレベルの違う本を生徒に紹介するようにしている。(i)

内容の難しさのレベルの問題

・図による説明と文章による説明の違いと内容の難しさ

- ・『なるには Books』シリーズもそうだが、『●●を知る○章 エリア・スタディーズ (明石書店)』シリーズも、中学校では使いにくい。[私立男子中学 E]の地理の調べ学習で使うことがあったが、文章だけで説明されているので、基礎知識がない生徒は読めない。中学1年生には図解が必要。(k)
- ・中学校でも1年生は、児童書のように図解やまとめがある本でないと読めない。次の段階になると、文字ばかりの本が読めるようになる。1年生の最初から文字ばかりの本を読ませるのは難しい。文章を読む作業は、その内容に関する基礎知識がないとできない。(k)

・生徒のやる気と食いつきとの関係

- ・最近の生徒はあまりやる気がないと感じている。(成績に反映する等の) 切実感があると食いつくが、すぐに「面倒くさい」と言う。やる気の無い子にどう食いつかせるかが難しい。モチベーションや切実感がないと、資料も読めない。(青)
- ・逆にやる気さえあれば、文章だけの本も読める。小学校からそのテーマ(例：鉄道)が大好きという子は、難しい内容の文字ばかりの本も読む。やる気のある中学生のエネルギーは、全般的に白けてしまった高校生のものよりも強い。(青)

学校図書館にとって網羅的コレクションが持つ意味

・網羅的コレクションの魅力

- ・図書館に勤める人間としては、新刊書が全部揃っていたら閲覧したい。例えば、大阪府立中央図書館はその年に出版された児童書を全部買っているのを見に行くことがある。本を全部持っているのは、すごい魅力がある。個々の学校図書館ではどうしても切れ端情報を集めることになるけれど、(新設される「調べものの部屋」で) 特定テーマの本がこんなにたくさんあると生徒に見せられたらよい。(青)

- ・特定テーマの本を網羅的に集めて生徒に見せるという活動には、探究的な要素がおのずと入る、つまり、生徒が自分が好きなテーマの本を読んでいくことは、探究的な学習につながっていると思う。(j)
- ・中学生が読めそうな、特定テーマ（例えば「紅茶」）の本を片端から集めるのもよい。OPACの件名検索で「紅茶」と入れてもヒットしない本だが、実は紅茶好きな子が読むと面白い本も含めて集めると、コレクションに奥行きが出る。このコレクションが探究につながっていく。(f,g,k,青)
- ・大量の本の持つ“わくわく感”
 - ・「学校図書館活用データベース（東京学芸大学学校図書館運営専門員会）」の中の事例だが、アスリートについて調べる授業があり、アスリートの資料をたくさん集めた。生徒たちは、思った以上に大量の本があり、その中から好きな本を選ぶことでうれしがっていた。「ここまで集めてすごいなあ」「いろんなスポーツがあるな」「すごいな」と言っていた。コレクションの面白さ、「うわあ、たくさん」というすごさがある。大量の本が持つ“わくわく感”がある。(g)

指導上の問題

- ・調べものに使える時間の制約
 - ・『なるには Books』が使い難いというのは、調べものに使える時間が限られているからだ。つまり「1時間の授業で仕上げましょう」となると、おのずと使える資料が限定される。調べものに使うことのできる時間によって、使える資料のレベルや内容も変わってくる。(h)
 - ・短時間で達成感を持たせる調べものを期待するのであれば、小学校高学年程度の本がよい。それ以上のレベルの本だと、中学生が短時間で本を読み込んで「(調べものをして) ああ良かった」と言えるところまで持っていくのが難しい。(h)
 - ・(長い時間をかけて) 読み込んだら面白い資料と(短時間の) 調べもので有用な資料は違う。『なるには Books』であっても、必要な部分(例：資格)に付箋を貼るなどして切り出して生徒に手渡せば、1時間の学習でも使える。(h,j)

(3) 探究的な学習の支援方法について

資料提供のノウハウ

- ・自由なテーマ選択に合った資料提供
 - ・[公立共学中学 A]では、平成14年から総合学習の時間(年間10時間)を使って、全校生徒450人が各人自由にテーマ設定をする形で、探究的な学習を行っている。この授業の1回目の内容は「テーマをどうやって見つけるか」で、学校図書館も4月の生徒のテーマ決めから、この授業に関わっている。(i)
 - ・生徒が考えるテーマはパターン化している。テーマが決まった段階から、必要な資料を集めては間に合わないの、前年度からどんなテーマに興味を持ちそうか考えておき、子どもたちが選びそうなテーマ(例：環境、花火、オリンピック、スポーツ関係)については資料を集めておく。(i)
- ・相互貸借による資料・複本の確保－他の学校図書館・公共図書館との連携

- ・ [公立共学中学 A] では、同じ図書を複数冊所蔵するのはどうかと思うので、他校の所蔵の有無も調べて、相互貸借を利用しながら資料を集めている。一つのテーマにつき生徒一人に最低 4 冊は手渡せるように、自校であるテーマの本が 3 冊あったとすると、他の学校図書館や公共図書館の蔵書から借りた本を加えて、必要な冊数を集めている。(i)

・ 多人数での同一テーマ調べへの対応法－公共図書館利用の勧め

- ・ [私立男子中学 E] の理科の授業の課題で、2 コマ連続で実験をして、生徒に 10～20 枚のレポートを毎週書かせるものがある。学校図書館での資料提供はすごく大切だが、ある学年の生徒全員が同じテーマでレポートを書くので、必要な資料が重複し、学校図書館の資料だけでは全員に対応できない。そこで、ブックリストを作って、その本を近くの公共図書館へ行って借りなさい、とアナウンスしている。学校図書館での資料の直接提供には限界がある。(k)

・ インターネット時代の学校図書館の機能

- ・ [私立女子中学 F] では、創立当初から学校図書館が授業の中で使われてきたが、インターネットが普及した平成 12 年頃一時期、使われなくなったことがある。その時期に、学校図書館の意義は何だろうと自問自答した。その結果、学校図書館はいろいろな教科をつなぐハブ機能を持っているのではと気づき、いろいろな授業で行われている調べものをつないでしまおうと考えた。(j)
- ・ 「教科教員が何かやってくれるかも」と待っていても変わらない。(授業をつなぐという意識を持って活動してきた結果) 最近では、地理の教員で、“(探究学習を使って) 地理を教える”のではなく、“(探究学習を) 地理で教えたい”と言ってくれる人も出てきた。
- ・ 教科教員と一緒に相談・計画しながら調べ学習を進めることで、少しずつ学校の中で調べるといふ活動の位置付けを変えていくようにしている。細々とやっている。まだ、[私立女子中学 F] では探究学習をカリキュラム化するところまでいっていない。学校図書館の活用をきちんと体系化したいが、体系化をどうやって進めていくかは検討中だ。(j)

・ 「調べ学習」と「探究学習」の違い－正解のある「調べ学習」と正解がない「探究学習」

- ・ 小学校の調べ学習には、正解探しのイメージを持っている。だが、大人になってからの調べものでは、正解はないかもしれないし、設問自体も自分で考え出さなければならなくなる。小学校の単純な調べから大人の研究活動につなげるためには、「答えがない場合もある」と生徒に気付かせる必要がある。その啓蒙として、「この資料はない」という状態を生徒に見せるということがある。(青)
- ・ 「見つかった本は、全部読まなくちゃいけないですか」と心配するのが中学生。本の中から必要な部分を見つける、つまり必要な部分を抜き出すという本の使い方を生徒に知らせる必要がある。また、教科の教員にはそういう使い方の指導の必要性をはっきり分かっていない人も多い。「調べものの部屋」がそういう使い方を生徒や教員が知る場になればよいと思う。(青)

探究的な学習をカリキュラム上で効果的に機能させるには

・ カリキュラム上、なぜそこで調べものをするのかー一斉授業ではない理由

- ・ 調べ学習・探究学習は本当に必要なのか、と逆に問いかけたい。調べ学習・探究学習を否定する訳ではなく、一斉授業の良さや調べ学習・探究学習でできる事やできない事を考える必要があると思う。図書館に行っ行って行う授業が良い授業、という単純な問題ではない。(f)

・ カリキュラムに、探究学習を主体的に組み込む教員の存在

- ・ [国立共学中学 C 校] の場合は、一斉授業の中に部分的に探究学習を組み込んでいる授業がある。教員が予め選んでおいた複数の資料の中から生徒に資料を選ばせ、それを読み込みなさいと勧める。生徒はそれを読んで自分の言葉に直して発表する、という流れで行うことがある。社会科のある単元の途中で、生徒に調べものをさせることもある。生徒たちの調べで足りない知識は教員が補う。調べものはあくまで手段として使っていて、結果的に、生徒は当該単元で習得が求められている知識を学ぶことになる。調べたら終わりの授業ではない。座学による一斉授業でも良い学習ができると思うが、調べものを加えることで、もっと良い授業にできるのではないか。どの教科でも、図書館の活用によって良い授業になる部分があると思う。(g)
- ・ 探究学習は教科の調べ学習とつながっている。普段から教員が「図書館で調べてみよう」「図書館にはもっと詳しく載っている本がある」と学校図書館を意識して学習に関わっているからこそ、生徒がより良い探究学習ができる。(i)

・ 図書館の本をどう授業に活かすのか

- ・ [国立共学中学 C] での経験だが、学校図書館を使った授業も、回を重ねると、教員自らが図書館に足を運んでくれて図書館にどんな本があるか把握してくれるようになる。ただし、授業で使う本を図書館員と一緒に選ぶことのない教員は、足を運ぶようにはならない。(g)
- ・ [公立共学中学 A] で、国語科教員が図書館に通ってくれて、資料を前にしながら司書と一緒に授業計画を練ったことがある。こうしたやり方は、初めてだった。教員自身が、面白い授業をしたいと考えていた。教員が図書館に足を運ぶようになると、授業の中で図書館員はどう動いたらよいかも分かってくる。(i)
- ・ 良い資料があるのが前提だが、教員が授業での本の活かし方を知らないと始まらない。探究活動を充実させるには、教員が図書館の中に入るしかないと思う。司書がいくら頑張っても、教員が使わないと生きてこない。図書館に来て授業案を検討する教科教員と図書館員が用意する優れたコレクションの両方があってこそ、充実した探究学習が成立する。(i)

(4) その他の議論

電子資料の扱い方：各校の事情

- ・ 紙資料と電子資料（特にデータベース）をどう扱うか。特に、学校図書館のコレクションにどのようにインターネット情報を位置付けるかは、今後の課題と感じている。[私立男子中高一貫 I] でも、以前にデータベースを導入したことがあるが、最初は利用があっても、すぐに使われなくなってしまい、契約を打ち切った。(f)

・インターネットを入れていない学校の事例

- ・[私立男子中学 E] は、生徒にインターネットやデータベースを使わせていない。理由は、“停電しても生きていける人間を育てる”というのが学校の教育方針だからだ。携帯電話の校内の持込みは禁止されており、それらの電子機器は学校生活において“存在しないもの”として扱われている。生徒にはコピー機も使わせていない。生徒はコピーができないので、必要箇所は書き写さなければならない。書き写す文章が長文で面倒な場合は、おのずと要約することになる。学校図書館は、教育とセットで資料を利活用する場であるので、学校の方針に従って図書館サービスも提供してきた。(k)
- ・ただし、[私立男子中学 E] の生徒は家に帰ればインターネットが使える環境にいるし、実際にインターネットを使ってレポートを書く子もいる。学校図書館では、インターネットには出てこない内容の本を集めるよう心掛けている。例えば、先ほど紹介した理科の実験レポートには、昭和 40 年代刊行の『動物の解剖（地球出版）』が一番役に立つ。この本に載っている情報は、インターネットを検索しても出てこない。生徒に、ペンだこを作りながらも学校図書館を使った方が良いと分かせたい。(k)

・インターネットはあるが、基本的には使わせない学校の事例

- ・[公立共学中学 B] では、インターネットにアクセスできるパソコンは置いているが、基本的には生徒には使わせていない。というのは、調べものでは調べるプロセス（どのように情報を探して必要な部分を抜き出してまとめるか）を教えたいからだ。(h)
- ・インターネットを使う場面は、情報が足りない場合に、図書館員がプリントアウトして生徒に渡す時くらいだ。(h)

・インターネットに頼り、書き写すだけの生徒

- ・今の中学生の中には、家に帰ってインターネットを検索し、適当に書き写せばよいと思う子もいる。「本を使うのは面倒くさい」と言って、インターネットでキーワード検索して、出てきた文章を書き写したりする。(g)
- ・教員側が調べを課題に課す意図は、「教科書や資料集から必要な情報を読み取って要旨を書いてほしい」ということだが、「調べる」＝「書き写す」と思っている子も多い。インターネットは、何でも出てくる魔法の玉手箱と思っている生徒も目立つ。(g)

廃棄・除籍と保存の問題

・除籍の必要性和保存すべき資料

- ・[私立男子中高一貫 I] の学校図書館の課題の一つに除籍がある。(書架に余裕があるために) しばらく除籍をしていなかったのが、古い所蔵資料がある。特に、2 類の歴史の本が古い。蔵書更新の大切さを実感している。(f)
- ・一方、先ほど出てきた『動物の解剖』は昭和の出版物で今は購入できないが、古い本にもこうした貴重性がある。所蔵の多いタイトルの表(76～77 ページ参照)では、そういう本は上位ではなく下位に出てくるかもしれない。出版年が古くても捨てる本をどうやってピックアップして図書館に残すかは難しい作業だ。(f)

・インターネットに出てこない情報

- ・[公立共学中学 B] は、除籍をしているが、近現代の写真はインターネットにまだ出てこないのが、『朝日年鑑』を 40 年分くらい取ってある。(f)

- ・これに関連して、失敗したと思った事例が以前あった。[私立女子中学 F]で地理の探究学習をする時に、20年前のケニアと現在のケニアを比較させたいと教員から依頼を受けた。しかし20年前のケニアが分かる古い資料は既に廃棄してしまっていた。結局、古い本を公共図書館で借りて対応したが、古いデータが載っている資料も必要だと実感した。(j)
- ・[公立共学中学 A]でも、南極観測船しらせに関する茶色でボロボロの本を持っている。捨てる寸前だったが、しらせの隊員が学校に来て講演する行事があり、参考資料としてその本を展示したら、「実際の話だったんだ」と生徒が喜んだ。残しておいてよかったと思った。(i)
- ・古い資料=実物資料としての価値
 - ・古い資料と言えば、[私立男子中学 E]では「ソ連コーナー」を設けている。「ソ連」と書いてある当時の本やアポロが出ている古い雑誌などを一角に集めている。ボロボロの古い本から読み取れる当時の空気がある。子どもたちは、「おお」「やべえよ」と声を上げて本を見る。こうした情報もインターネットでは出てこない。こういう本を見ると、「こういう時代は本当にあったのだな」と実感できる。ソ連が出てくる古い本はもはや(化石標本のような)実物資料となっているので、絶対に捨てない。(k)
 - ・選書と同じくらい更新も重要だ。そして、除籍・廃棄の方針が絶対必要となる。新しければ良いという訳ではない。除籍本を決めるには、新規購入本を決めるのと同じだけの手間と時間がかかる。ソ連の例のように、「こういう本は実物資料として保管しておきましょう」と決める。その方針を教員と共有して、使える状態にしておく。(青)
 - ・(新規購入だけでなく)更新も図書館員の仕事だ。図書館員としての力が現れる。(青)

5.4. まとめ：中学校の学校図書館のコレクション形成の留意点

本節では、今回のインタビューの結果見えてきた、中学校の学校図書館におけるコレクション形成上の留意点をまとめる。これは、学校の設置形態や方針等の違いにより指導方法等が異なるために、学校図書館コレクションの実態が違っていた(時には、学校図書館担当者としての行動や判断・意見が対立していた)ようにも見える、今回のインタビュー参加者の間で、ほぼ共通する認識と思われるものである。

なお、これは、筆者が、学校図書館担当者としての自らの経験を踏まえて、両インタビューの要旨からまとめたものであり、筆者個人の主観による整理・表現が含まれていることを予めお断りしておく。

「中学生」という年齢層の子どもたちの言語的・心理的特性

中学生は、子ども時代の、資料から必要と思われる答えを取り出してまとめる、という単純な調べ学習から、大人として、現実社会を把握し、問題を特定し、判断・分析することから始まり、その解決へと結び付けるために、様々な異なる意見や対立する考えを統合して結論を導き出す、という複雑な探究活動への入口段階にいる年齢層である。

そのため探究学習においては、まずは、明確な定義を複数の資料から探し出してまとめ

る、という比較的単純なレベルの学習活動を成功させ、教員と生徒が共に成功体験を積み重ねる中で探究学習という学習形態に慣れ、次第に複雑な大人の探究活動へとスムーズにつながるように指導していく必要がある。

また、この年代は、言語発達の男女差・個人差が大きく、漢字や言葉の概念自体及びそれら概念の相互関係も学習途上にある。そのため、概念形成やその体系化ができていないことを前提に、それに気付かせる指導も含めて探究学習を組み立てる必要がある。コレクション形成に当たっては、そのような学習に必要な資料を揃えるという点に留意する必要がある。具体的には、写真や図が多く漢字に振り仮名があるといった配慮がないと、生徒の主体的な学習が成り立たないことも考えられる。一方で、「もう子どもではない！」というプライドがある年頃でもあるため、(小学生レベルではない)一般書を上手く使いこなす指導ができれば、そうしたプライドを学習意欲につなげることも可能である。

なお、生徒に学習意欲を持たせることは、それが本質的に主体性を求めるものであり、探究学習を成功させる鍵であると思われる。そのため、自由な(好きな)テーマを選んで探究できる環境を作ることは重要である。そして、自由な探究学習で生徒が選ぶテーマには、ある程度の傾向がある。具体的には、次節を参照されたい。

教科教員と学校図書館の協働の必要性

一般に現在の学校では、一斉授業と調べ学習・探究学習という学習活動の違い、図書館という場や図書館コレクションの利用を効果的に学習活動に組み込む方法、図書館での生徒への指導方法が、教科教員らに十分に浸透しているとは言い難い状況である。しかし、上記のような中学生の特性に対応した探究学習を展開するためには、テーマ設定を始め、資料提示の方法や利用のさせ方、情報の取り出し方等の指導を、必要に応じて、担当教員と協働して、学校図書館の担当者が工夫して行うことが、実際の図書館の学習支援となる。

コレクション形成の方法

一方で、上記のような発達段階の中学生の探究活動に適した資料の出版状況は、はなはだ心もとない。中学生が関心を持つようなテーマについて、中学生向けに分かりやすく詳しく説明した図書は非常に少ない、というのがインタビューに参加した実務者一同の一致した認識であった。

それに対する対策としては、以下のような方法が考えられる。

1. 百科事典的にあらゆる分野についてなるべく網羅的なコレクションをする。比較的分かりやすい小学生高学年から中学生向きの言語レベルの図書を中心に収集、提示する。
2. 自由研究で生徒が選ぶ可能性が高いテーマについては、奥の深い探究活動を可能にする一般書まで収集し、利用指導上で生徒が内容を理解するように工夫する。

NDCなどを用いて、網羅的にあらゆる学問分野をバランスよく収集・分類・配架し、その利用を習熟させることは、知の体系を意識化させる意味も持つ。つまり、中学生の発達段階で進められる概念・知識の体系化を助け、情報リテラシーを育成することになるだろう。

また、学校のカリキュラムや特徴、中学生の関心事等を反映している上記2のテーマ群については、自校の傾向を把握し、探究学習の際にその学習活動の進展度や生徒数等に対応してタイムリーに資料を提供できるように準備する。そうすることで、探究活動に役に立つ具体的な資料の存在が教員や司書に認識され、それがまた次の資料選定作業に結びつく。ただし、こうしたニーズに対応したコレクション形成は、出版事情も反映して、一朝一夕には成り立たない。場合によっては、地域の学校図書館や公共図書館との連携を図り、資料の共同利用を工夫することも必要になるだろう。

なお、この年代の生徒は「自分探し」を始める年代であり、これと思ったものをとことん追求する頑固さがある一方、(見つからずに) 回りの状況に左右され付和雷同する傾向があるため、本当の「自分」の探究テーマにたどり着かせるには、指導上注意が必要と思われる。中学生がどのようなテーマ群を好むかに関しては、各学校の教育方針やカリキュラムで取り上げる具体的テーマ、またその時々社会現象や流行、男女差を意識したジェンダー・バイアスなどが色濃く反映されると思われる。「中学生の探究活動に適したテーマ群」については、更なる研究が必要であるだろう。

最後に、本節のまとめでは、学校図書館の三つの機能と呼ばれる「学習情報センター」「読書センター」「教材センター」のうち、主として、「学習情報センター」としての面に焦点を当てて考察しているが、最近では文学や伝記だけでなくあらゆる分野の図書が対象として取り上げられる「読書センター」の読書材についても、ある程度同様の考え方を援用できるであろうことを付記しておく。

5.5（参考）生徒がよく取り上げる自由研究テーマについて

本章の最後に、参考として、各インタビューでも言及されていた、生徒がよく取り上げる自由研究テーマ（83ページで「ありがちテーマ」として言及されているもの）について実例を示し、若干の考察を加える。インタビューやまとめでも言及したように、生徒のテーマ選択は学校図書館のコレクション形成に影響を与える要因の一つである。そのため、実務者の経験に基づいて導き出された頻出実例を知ることは、有用と思われる。

実例は、インタビュー参加校のうち4校（公立共学中学A、公立共学中学B、私立男子中学E、私立共学中高一貫H）から寄せられた中学生が選んだ自由研究テーマである。学校ごとの実例の一部を、表5-1に示す。

表5-1 生徒がよく取り上げる自由研究テーマの例（学校ごと）

[公立共学中学A] 中学1～3年生「調べ学習」で複数人から選ばれるテーマ						
環境問題・ゴミ問題	地球温暖化	障害者福祉・バリアフリー・盲導犬	戦国武将	太平洋戦争（広島）	音	地震・防災
[公立共学中学B] 中学3年生「卒業レポート」で毎年選ばれるテーマ						
環境汚染・ゴミ問題	地球温暖化	絶滅危惧動植物・外来種	地震・防災	世界の貧しい子どもたちの現状	食の安全	ゲーム
動物虐待（動物の殺処分）	お菓子	高齢化社会	インターネット	障害者福祉・バリアフリー・盲導犬	戦国武将	
[私立男子中学E] 中学1～3年生「自由研究」でよく選ばれるテーマ						
戦国武将	防災	太平洋戦争（沖縄、広島など含む）	スポーツ選手	料理・食文化	恐竜	建築模型
						カビ
[私立共学中高一貫H] 中学3年生「卒業研究」でよく選ばれるテーマ						
自動車	睡眠	色	地震	米	テレビ	栄養
広告	映画	天気	チョコレート		コンビニ	ネコ

上記の表から分かるとおり、生徒がよく取り上げる自由研究テーマには、4校に共通するものもあるが、学校ごとの傾向もある。詳しい分析は今後の課題としたいが、インタビュー調査での議論や筆者の自由研究支援の経験を踏まえて考えると、生徒が選ぶ自由研究テーマは下記のように整理できる。

- ①どの学校でも、毎回必ず希望者が出るテーマ（全部で20～30程度と推測）
- ②年に1～数名、もしくは数年に一度誰かが取り組みたがるテーマ。毎回出てくるとは限らない（83ページの議論で、1,000を想定すれば足りると言及されていたもの）

また、別の観点として、次の2種類に分けることもできる。そしてテーマには、ある程度、男子・女子それぞれが好むものがあると思われる。

- ①生徒が自由意思で選ぶテーマ
 - ・昔から変わらず中学生が興味を持つもの
（例：戦国武将、鉄道、ファッション、ダイエット）

- ・その時々のお話題・時事問題が反映されるもの
(例：携帯電話、彗星、地震、津波、原発)

なお、

- ・生徒の関心は高いが、学校側の対応によっては、自由研究テーマには選びにくいもの(例：アイドル、化粧、アニメ、ゲーム、キャラクター、ダンス、刑務所、犯罪)もあると推測される。

②学校で取り上げられるためによく選ばれるテーマ

- ・授業や特別活動などでよく取り上げられるため、生徒が思い付きやすいテーマ。
(例：環境問題、ごみ・リサイクル、温暖化、盲導犬、広島・長崎、高齢化社会)

インタビューでも言及されていたように、探究したいテーマを言語化できないために、生徒が安易に選びがちな「ありがちテーマ」から、生徒が本当に探究したい別のテーマにたどり着く、もしくは同じテーマの中を掘り下げさせるまでには、時間をかけた指導が必要である。生徒が資料探索や資料からの情報抽出作業を進めた段階で、本当に探究したいテーマが見えてきて、生徒が「テーマを変更したい」と言ってくるのは、(特に初めて行う探究活動では)よく見られるケースである。

4校の実例を整理・分析し、前ページ①「どの学校でも、毎回必ず希望者が出るテーマ」に相当すると考えられるテーマの抽出を試みたのが、表5-2である。これは、4校に共通する頻出テーマである。これから自由研究の支援を開始する図書館にとっては、揃えるべき資料のテーマを推測する、といった使い方ができるだろう。

表5-2 どの学校でも、毎回必ず希望者が出るテーマ

戦国武将（織田信長などの各武将を含む） アイドル（個々の歌手など） 刑務所（少年犯罪、少年法など） ユニバーサルデザイン・バリアフリー・障害者福祉など 祭り（各地の祭り、ソーラン節など） 結婚（結婚式など） 菓子・お茶（チョコレート・紅茶・和菓子など） 和食・各国料理 宇宙・天体（太陽系、彗星、月食など） 宇宙開発（宇宙ステーション、宇宙飛行士、ロケットなど） 地震・津波（災害対策、援助を含む） 環境問題（異常気象、地球温暖化、リサイクル、ごみ問題など） 新エネルギー（風力発電など） 絶滅危惧種（動物保護など） 脳（記憶など） 睡眠・夢など 色彩 高齢化社会（介護、少子化など） 食品安全・栄養（食品添加物、食の安全問題、ファストフードなど） アレルギー（食物アレルギー、花粉症など） 薬（薬物依存、ジェネリック薬品など） ダイエット・化粧など コンビニ 自動車・飛行機など ハイテク技術（ロボット、IT機器など） 携帯電話・スマートフォンなど テーマパーク（ディズニーランドなど） ペット（犬、猫、動物虐待など） ファッション（アパレル産業など） 世界遺産（富士山など） 鉄道（個々の鉄道事情など） テレビ番組・映画監督など ゲーム・アニメーション 広告 スポーツ医学（アスリート・筋肉など） オリンピック サッカー・野球 方言（大阪弁など） 戦争と平和（太平洋戦争、原爆、沖縄、広島、長崎など）
--

6. おわりに：「調べものの部屋」のコレクション形成に向けて

報告書の最後となる本章では、「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」の主査を務めた中村が、調査研究を振り返り、結果を踏まえて、日本の学校図書館におけるコレクション形成の在り方と今後の研究課題を考察する。また、国際子ども図書館に新設される「調べものの部屋」でのコレクション形成の方向性について幾つかの提案を行う。

今回の調査研究では、最初に、学校図書館のコレクション形成をめぐる議論を概観するべく文献調査を行い（第2章参照）、それを通して「コレクション形成」等の用語の定義と図書館情報学分野での関連の研究の動向を、研究会メンバーで共有した。次に、先進的な実践で知られる主として近畿圏と首都圏等の学校（調査対象校）10校を訪問し、日本国内の学校図書館におけるコレクション形成の実践事例をまとめた（第3章参照）。この事例調査の後で、訪問調査の対象校を含む13の学校図書館から提供を受けた蔵書データを、統計的に分析し、検討をした（第4章参照）。さらに、事例調査と蔵書データの分析の結果をある程度整理した段階で、対象校の学校図書館の担当者に対してグループインタビューを実施した。インタビューでは、中学校図書館に適したコレクションの在り方と本研究の成果の整理の方向性について学校図書館担当者の意見を伺った。なお、インタビュー記録の要旨は第5章に掲載しているが、インタビューを録音し、文字に起こした記録そのものは、別途、国際子ども図書館のホームページに掲載する予定であるので、是非御覧いただきたい¹。

個性豊かな学校図書館コレクション

第1章でも述べたが、図書館のコレクションの質とは、その図書館が果たすべき使命のいかんによって違ってよいものだと思う。今回、国内の先進的な学校図書館を訪ねたが、教育方針のほか、公立か私立か、男子校か女子校か共学校か、中学のみか中高一貫かといった学校の設置の形態、学校図書館への教職員の配置状況や予算といった物理的な条件が、学校ごとに異なっていた。そして学校図書館のコレクションは、それらの要素が複合的に作用し、また学校図書館に対する期待や使われ方も影響して、学校ごとの多様な方法で形成された結果、それぞれが個性的であった。

本研究を通して、実際のコレクション形成のための各作業も、その結果として出来上がったコレクション自体も、学校間の違いは小さいものではないことが分かった。研究を開始した当初、先進的な学校図書館のコレクション形成には共通性があるのではないかと推測していたが、共通性はさほど大きくなかったのである。例えば、第4章で述べられているように、先進的な学校図書館13館で共通して所蔵している資料は極めて限られていた。

このような調査結果の背景に、上述のような、学校の方針や物理的条件の違いがあるのは間違いない。ただ、事例調査とインタビュー調査を終えて、学校図書館コレクションの違いは学校の違いの反映であるだけでなく、学校図書館に配置されている教諭または職員のコレクション形成に対する意識、または関連する知識等の多様性が関係しているのでは

1 国立国会図書館国際子ども図書館『中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト』<<http://www.kodomo.go.jp/promote/school/room.html>>（最終アクセス2013年12月1日）

ないかと思われた。また、第2章で見たように、日本ではこれまで、学校図書館のコレクション形成に関する理論的な研究が極めて少なく、また学校図書館の担当者の養成の際に教えられる内容は十分に標準化されてはこなかった。このことも、今回の結果に影響していると推測する。

第3章の最後に示したように、現在の日本において、学校図書館のコレクション形成に影響を与えている志向性が、少なくとも五つあるようである(49ページ表3-4参照)。それらは、私見では、各担当者が様々な経験の中から感じ取ったり、考えたりしてきたことと思われ、日本の学校図書館実践の戦後史が透けて見えるようにも感じられた。管見の限りでは、ここで志向性と呼んだものについての客観的な検討は、過去にされたことはない。学校図書館のコレクション形成の実務に携わっていても、自らの日々の行動や判断の背景にある意識や志向性について考える機会を得たことのある人は、多くはないのではないだろうか。

学校図書館の実務担当者と研究者、そして児童・生徒、学校教職員や保護者らの間で、コレクション形成の考え方についての議論が、もっとされてよいだろう。今回の調査はサンプル数が限られているため、本研究の結果を過度に一般化して論じることは控えたいが、この後、実態調査・分析が更に行われ、日本における学校図書館のコレクション形成に関する情報の共有と理論の構築が進むことを期待する。

探究的な学習の実現：日本の学校図書館の新しい使命

学校図書館の使命に関して、学校内で認識が共有されていく過程もまた複雑である。これには、主に、学校の方針等によって周囲から学校図書館に期待されてくる動きと、学校図書館の担当者の側からそれを打ち出していく動きとがあって、それらがいかに相互に作用するかは状況によって異なる。しかし、意外にも、調査の対象とした学校図書館担当者はいずれも、児童・生徒の読書推進に留まらず、また資料からの一つの正解を探す単純な調べ学習に留まらず、いわゆる〈探究的な学習〉に関心を寄せているという共通点が見られた。

〈探究的な学習〉は、現行の学習指導要領²の「総合的な学習の時間」の「目標」の中で次のように記述され、近年、特に注目を集めている学習方法である(下線は筆者による)。

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

探究(inquiry)を通じた学習は、児童・生徒が主体となる問題解決型の学習の在り方で、既に約80年前に米国の教育学者ジョン・デューイ(John Dewey)が論じている。近年、上述のように学習指導要領で〈探究的な学習〉、〈探究型学習〉などの言葉を使って「自

2 現行の学習指導要領は、小学校・中学校は平成20年に、高等学校は平成21年に告示された。

ら学び自ら考える力」を育成する教育の在り方が提言され、国際的にも、国際バカロレアの認定校になるための要件の中に児童・生徒の探究を促すカリキュラムが重要な要素として挙げられる³など、国内外で探究を通じた学習への関心が高まっている。

そのような近年の〈探究的な学習〉への関心の高まりは、学校図書館の使命が改めて認識される機会にもなっている。事例調査の整理を見ると、調査対象校の多くで、生徒に、複雑な問い（つまり簡単な答えの無い問題・テーマ）について多様な情報源を用いて多角的に考察をさせ、問題解決能力の育成を目指す授業や課題が設けられていることが分かる（33～34 ページ表 3-2(4)-1 参照）。そして、このような授業・課題に、学校図書館担当者は積極的に関わって、生徒の主体的な学びや思考を促し、様々な形で指導を行っている。

このような調査対象校の先進的な例を見ると、これからは、学校図書館のコレクションが、単独で検討されるのではなく、その学校の教育の在り方との関係の中で検討されることが広まると推測される。コレクション形成の作業には、学校図書館の担当者だけでなく、学校図書館の利用者である児童・生徒、学校教職員や保護者が関心や期待を寄せてくると考えられる。そうなった時は、今以上に、学校図書館担当者にコレクション形成に関わる専門的な知識と技能が要求されるのではないだろうか。つまり、私たち学校図書館関係者には、更なる研鑽が求められるようになると思われる。

「調べものの部屋」に向けた提案

最後に、本研究の成果を踏まえ、プロジェクトの主査として、「調べものの部屋」のコレクション形成に向けた提案を述べておきたい。

第1章で述べたように、国際子ども図書館では、「調べものの部屋」において自由研究などを目的とした中高生の調べものに役立つサービスを行うと共に、図書館や図書館資料を使った探究活動の体験プログラムを用意して、修学旅行や校外学習で上野公園を訪れた中高生に体験してもらうことを検討している。本研究を通して、充実した活動を行っていると評される学校図書館には、〈探究的な学習〉で取り上げられる問い（問題・テーマ）に応じたコレクション形成の動きがあることが明らかになった。ここから、「調べものの部屋」においても、体験プログラムや自由研究で取り上げるテーマの資料を重点的に収集するのがよいと考えられる。つまり、体験プログラムで取り上げる分野や中高生が自由研究で取り上げる頻度の高いテーマを事前に定めておき、その分野・テーマの資料を特に優先して収集するのである。テーマを事前に定めるに当たっては、第5章で示した「生徒がよく取り上げる自由研究テーマ」が役に立つだろう。

こうした重点収集分野・テーマのような考え方は、米国では従来から一般的に行われている。例えば『インフォメーション・パワーが教育を変える!』の中では、〈一般重点分野〉と〈個別重点分野〉と呼ばれるものがある⁴。前者には「世界史」といったカリキュラム内の大きな分野に当たるもの、後者には「南北戦争」といった個別のテーマに当たるも

3 国際バカロレアとは、インターナショナル・スクール等の卒業生に国際的に通用する大学入学資格を付与する仕組み。近年、文部科学省主導で、国際バカロレア資格を付与できる認定校を日本国内に増やす取組がなされている。参照: International Baccalaureate Organization, *Becoming an IB World School* < <http://www.ibo.org/become/index.cfm> > (最終アクセス 2013 年 11 月 20 日)

のが想定されている。学校図書館のような、比較的小規模な図書館のコレクション形成では、コレクションを分類別配分比などの観点で概観した際に、ある程度、分類によって濃淡があっても仕方がないと考えられる。なぜなら、例えば自館の使命の一つに「探究的な学習」があると組織内で認識が共有されている場合、その図書館のコレクションは「探究的な学習」の場面で顕在・潜在するニーズに対応する形で形成されることが、自然に期待されるからである。

「調べものの部屋」のコレクション形成の作業は、例えば、次のように進められるだろう。参考図書類に関しては、蔵書データの分析調査で、学校図書館の基本図書と考えられる資料リストが作成された（64 ページ表 4-9 参照）ので、このリストを参考に揃えることができる。また、学習の発展としての読書に誘うべく、まずは国語科の教科書に登場する作品を読書材として揃える。そして、「調べものの部屋」を、生徒に探究活動の経験を提供する学校図書館のモデルとして位置付け、残りのコレクションを形成する。形成の際には、重点的に収集する分野・テーマを、本研究の調査対象校の実例に学びながら、特定するとよいだろう。

以上のようなワークロードは、ここでは「調べものの部屋」に対する提案として記したが、それに限定されず、探究学習の支援を意識した学校図書館をこれから作ろうという場面でも参考になると思われる。また、継続的なコレクション形成の諸作業については、事例調査（第 3 章）で明らかになった先進的な学校図書館での作業の進め方や考え方から多くを学ぶことができるだろう。ここは、担当者各人の長年の努力による工夫や見解が散見されることから、今回の研究のまとめでは、あえて一般化して論じるのを避けた部分である。本報告書の中に理解を助ける表を多く掲載したので、それらも含めて、是非全文をお読みいただきたい。本報告書が、日本の学校図書館のコレクション形成に携わる人々、また学校図書館に関心を持つ人々に広くお読みいただければと願っている。

最後に、改めて、本研究が忙しい学校図書館の現場の方々の協力を得てできたものであることをここに記し、関係者の皆様に心からの御礼を申し上げる。

4 アメリカ公教育ネットワーク・アメリカ・スクール・ライブラリアン協会（足立正治・中村百合子監訳）『インフォメーション・パワーが教育を変える！：学校図書館の再生から始まる学校改革』高陵社書店, 2003, p.211. (原書名: Anne Wheelock and Sandra Hughes-Hassell eds., *The Information-Powered School*, 2001.)

国際子ども図書館調査研究シリーズ No. 3 (ILCL Research Series No. 3)
学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べもの
の部屋」開設に向けて

平成26年3月28日 発行

編集・発行 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043
印刷・表紙デザイン 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山 7-1-5

ISBN 978-4-87582-760-3

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。本誌のPDF版を国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) でご覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

リサイクル適性 **(B)**

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。